麦　野　C　遺　跡

－麦野C遺跡第5次調査概要－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第643集

2000

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業の増加に伴い、やむを得ず失われていく埋蔵文化財について発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。

本報告による麦野C遺跡第５次調査では、弥生時代から中世にかけての集落遺跡を調査し、多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで株式会社アゼル福岡支店をはじめとする多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成１２年3月３１日

福岡市教育委員会

教育長　西　憲一郎

例　言

1．本書は、博多区麦野６丁目12－5・23おける共同住宅建設工事に先立って、福岡市区教育委員会が平成10年度（１９９８年度）に実施した麦野Ｃ遺跡第５次調査の発掘調査報告書である。
2．本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
3．本書に使用した遺構実測図は本田・長家伸・伊藤健太・今塩屋毅行・今村佳子・坂本真一が作成した。また、製図には本田・今村佳子・鳥飼悦子・萩尾朱美があたった。
4．本書の遺構実測図中に用いていてる方位は、すべて磁北である。
5．本書に使用した遺物実測図は本田・今村佳子が作成し、本田・鳥飼・山根ひろみが製図した。なお遺物実測図の縮尺は土器類を１/３、１/４に統一し、石器を１/１、１/２で統一した。
6．検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。
7．遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
8．本書で使用した写真は本田が撮影した。
9．本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

遺跡調査番号	９８５６	遺跡略号	ＭＧＣ５
調査地地番	博多区麦野６丁目12－5・23	分布地図番号	１２　麦野
開発面積	１３６８㎡	調査面積	８７１㎡
調査期間	１９９９年1月２５日～１９９９年5月２１日		

本文目次

第一章　はじめに …… 1
　１．調査にいたる経緯 …… 1
　２．調査体制 …… 1
　３．遺跡の立地と環境 …… 2
第二章　発掘の記録 …… 4
　１．調査の概要 …… 4
　２．弥生時代の遺構と遺物 …… 8
　３．古代の遺構と遺物 …… 20
　４．中世の遺構と遺物 …… 68
第三章　まとめ …… 74

第一章　はじめに

1．調査にいたる経緯

平成10年２月６日、緒方由紀子氏らより福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区麦野６丁目12－５・23番内における共同住宅建設予定地内に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地は周知の遺跡である麦野Ｃ遺跡のほぼ中央部に位置しており、現状で周辺よりも１ｍ程高い宅地となっている。これを受けて埋蔵文化財課では平成10年10月８日に現地での試掘調査を行った。その結果、現地表面から30～50cm程掘り下げた鳥栖ローム層上面において弥生時代から中世にかけての竪穴住居、溝、柱穴等の遺構と該期の遺物の存在を確認した。これらの遺構は濃密に遺存しており、共同住宅建設に伴う地下げ基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、工事によって止むを得ず破壊される部分については全面に発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成11年１月25日に着手し、平成11年５月21日に終了した。

2．調査体制

調査委託	緒方　由紀子			
調査主体	福岡市教育委員会	教育長		町田　英俊
				西　憲一郎（現任）
調査総括	同	埋蔵文化財課	課長	柳田　純孝
				山崎　純男（現任）
	同	埋蔵文化財課	第２係長	山口　譲治
				力武　卓治（現任）
調査庶務	同	文化財整備課		谷口　真由美
調査担当	同	埋蔵文化財課	事前審査係	宮井　善朗
				屋山　　洋（試掘調査）
			第２係	本田　浩二郎（本調査）

調査作業　朝倉　浩司　伊藤　健太　岩本三重子　牛島　　靖　大賀規矩雄　越智　信孝
木原　保生　近藤　澄江　澄川アキヨ　玉田　重人　豊永　裕保　富永　利幸
中村フミ子　西山　径子　野田　淳一　羽岡　正春　平井　武夫　藤野トシ子
広田　熊雄　村田　敬子　水田ミヨ子　播磨千恵子
今村　佳子　石井　淳子　金子　朋子　能登原孝道（以上九州大学）
今塩屋毅行　坂本　真一（以上福岡大学）　辻　　弥生（西南大学）
山口　耕平（別府大学）
整理作業　有島　美江　野副けいこ　鳥飼　悦子　室　以佐子

調査期間中には株式会社アゼル福岡支店の方々に、多くの配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。また福岡市教育委員会埋蔵文化財課の山口譲治氏、長家伸氏をはじめとする同僚諸氏からも多くの助言をいただいた。深く感謝する。

3．遺跡の立地と環境

麦野遺跡群は福岡平野を貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積段丘の中位段丘上に位置し、東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市の最南端に分布する遺跡である。地形的には春日丘陵の東辺にほぼ平行して伸びる台地上に立地する。この台地は北西方向から多くの谷によって開析され数条の舌状台地を形成する。この舌状台地上には南八幡遺跡・雑餉隈遺跡・麦野Ａ～Ｃ遺跡などの遺跡群が存在する。これら遺跡群の地形的な境界は判然としておらず、今後の検討を要する問題である。

付近一帯でもっとも遡る遺物としては、麦野Ｂ遺跡第４次地点、麦野Ｃ遺跡第１次地点、南八幡遺跡第１・３次地点から旧石器時代の石刃・剝片等が出土している。

縄文時代の遺構・遺物についても検出数は少なく、麦野Ｃ遺跡第３次地点において該期の石鏃が出土した他には、麦野Ｂ遺跡第３次地点にて該期に比定される落し穴遺構が検出されているだけである。

弥生時代に属する遺構・遺物の検出数は増加し、雑餉隈遺跡第５次地点からは前期の住居跡・貯蔵穴等が検出され、続く中期の円形住居跡も検出されている。中期の住居跡の中には大型のものも検出され、比較的規模の大きい拠点集落が展開していた可能性が考えられる。後期の段階になると遺構が見られなくなり南八幡遺跡第５次地点で方形住居跡が検出されただけである。麦野Ａ～Ｃ遺跡群では弥生時代に属する遺構はこれまで検出・報告されていないが、遺物の出土は報告されており遺跡群内における該期の遺構の存在は容易に推測できる。

古墳時代に入っても遺構・遺物は増加せずに、前期から中期にかけては何も検出されていない。後期になって南八幡遺跡第２・３次地点で合わせて７軒の竪穴住居が検出されるのみであり、小単位の集落が展開していたことは推測されるが、これは後の奈良時代の大集落とは連続せず短期間の居住であったことと言えよう。

７世紀後半から８世紀代にかけては、これらの遺跡群にとって大きな画期と言えよう。雑餉隈遺跡第９次地点では７世紀末から８世紀初頭の大型建物群が検出され、その規模と配置から官衙的性格が想定されている。８世紀中頃から後半にかけては各遺跡群において集落が検出されるようになる。突然、集落が広範囲にわたって展開し始めるこの現象は、各遺跡群の各調査地点の調査成果からも伺うことができよう。これらの住居群はかなりの高密度で分布しており、雑餉隈遺跡第５・８次地点合わせて5200㎡中に56軒の検出数を数える。遺跡群全体の中では分布の粗密の差はあるだろうが、該期の村落の景観は壮観であったと想像される。この集住の契機としては大宰府・水城・大野城などの国家的規模の土木事業とその維持・営繕作業に関わるものと推測され、雑餉隈遺跡第９次地点で検出された大型建物はこれを確証させるものであろう。９世紀代の検出遺構は極端に減少し、賑わいを見せた遺跡群一帯は、閑散とした景観に変化したものと想像される。

中世の段階でも検出される遺構は希薄で、麦野Ａ遺跡第４次地点で中世前半期の掘立柱建物などからなる集落が、後半期になり麦野Ａ遺跡第１次地点で15世紀代の集落跡が検出された程度である。本調査地点に近接する日吉神社内の板碑には嘉暦三年（1328年）の造立年が刻まれており、「筑前国続風土記付録」にも記述されている。該期の集落が展開していたことを伺わせる資料であろう。

現在、南八幡遺跡群においては第９次調査、雑餉隈遺跡群においては第11次調査、麦野Ａ遺跡群においては第６次調査、麦野Ｂ遺跡群においては第４次調査、麦野Ｃ遺跡群においては第５次調査までの発掘調査が実施されており、急速に進む開発に対応している。今後も調査が増加する地域の一つであり、遺跡群全体の様相究明に期待したい。

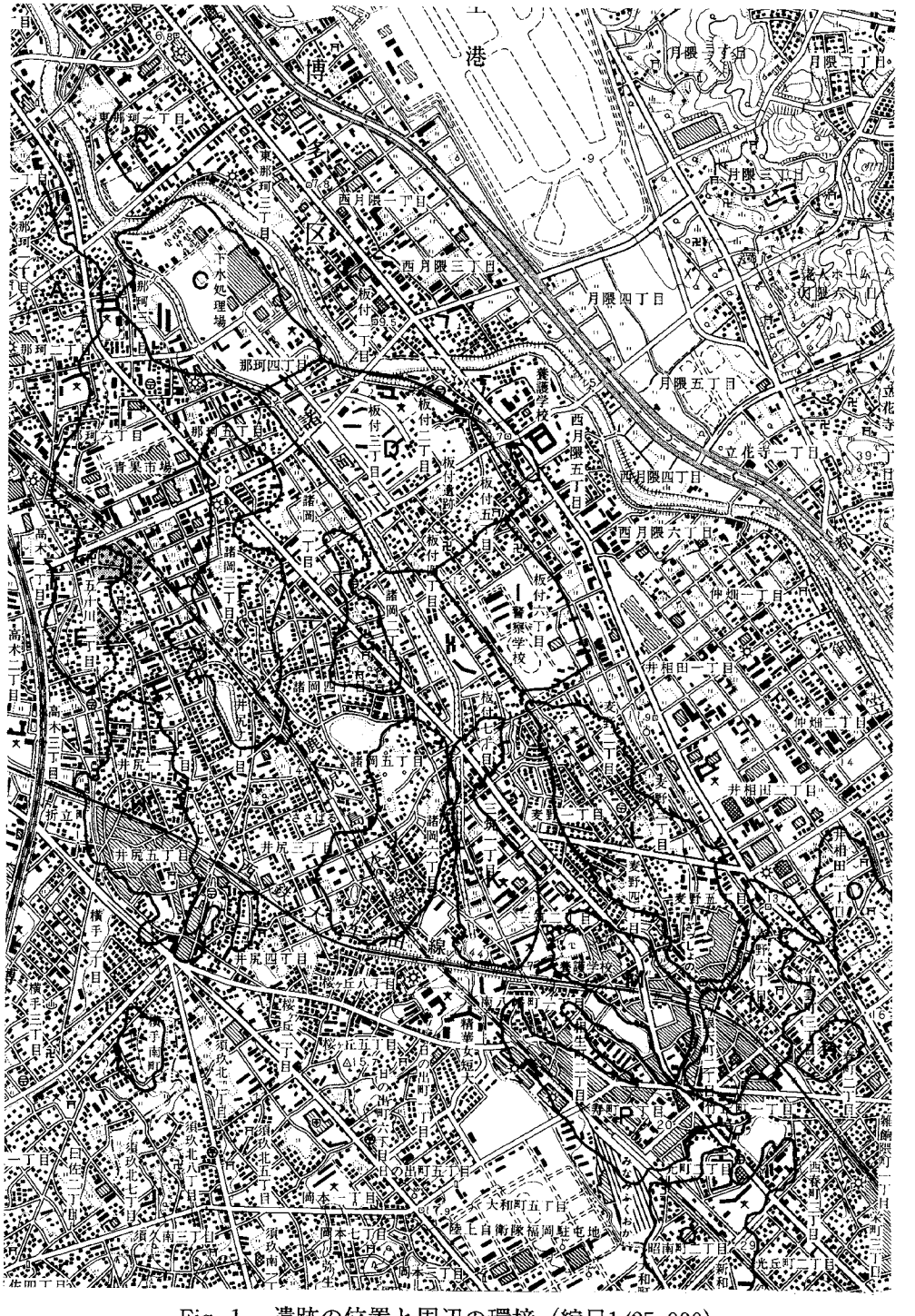


Fig-1　遺跡の位置と周辺の環境（縮尺1/25,000）

A．那珂遺跡　B．東那珂遺跡　C．那珂君休遺跡　D．板付遺跡　E．五十川遺跡
F．諸岡B遺跡　G．諸岡A遺跡　H．井尻B遺跡　I．高畑遺跡　J．笹原遺跡
K．三筑遺跡　L．麦野A遺跡　M．麦野B遺跡　N．**麦野C遺跡（本報告）**
O．**井相田A遺跡**　P．南八幡遺跡　Q．雑餉隈遺跡　R．井相田B遺跡

第二章　発掘の記録

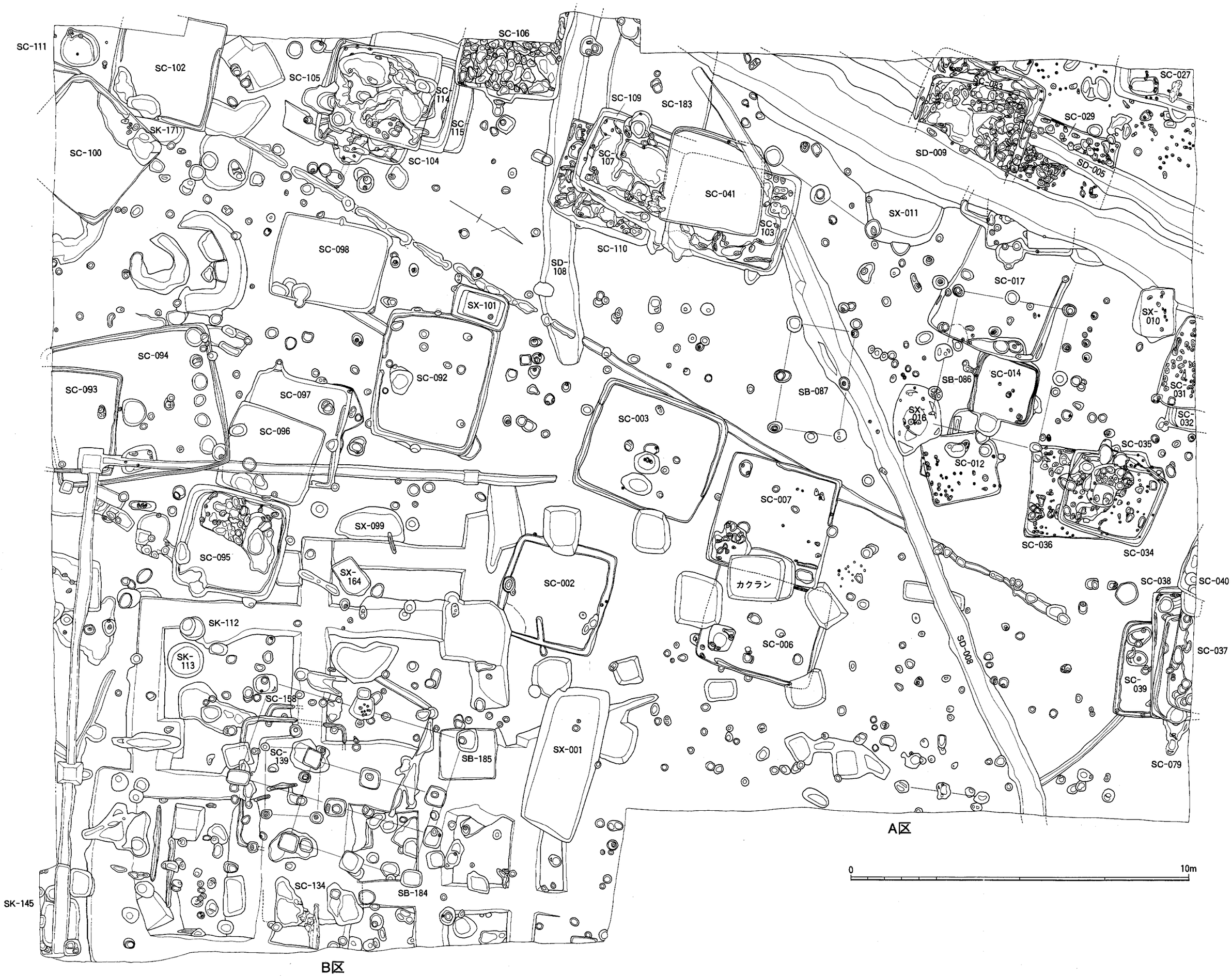
1．調査の概要

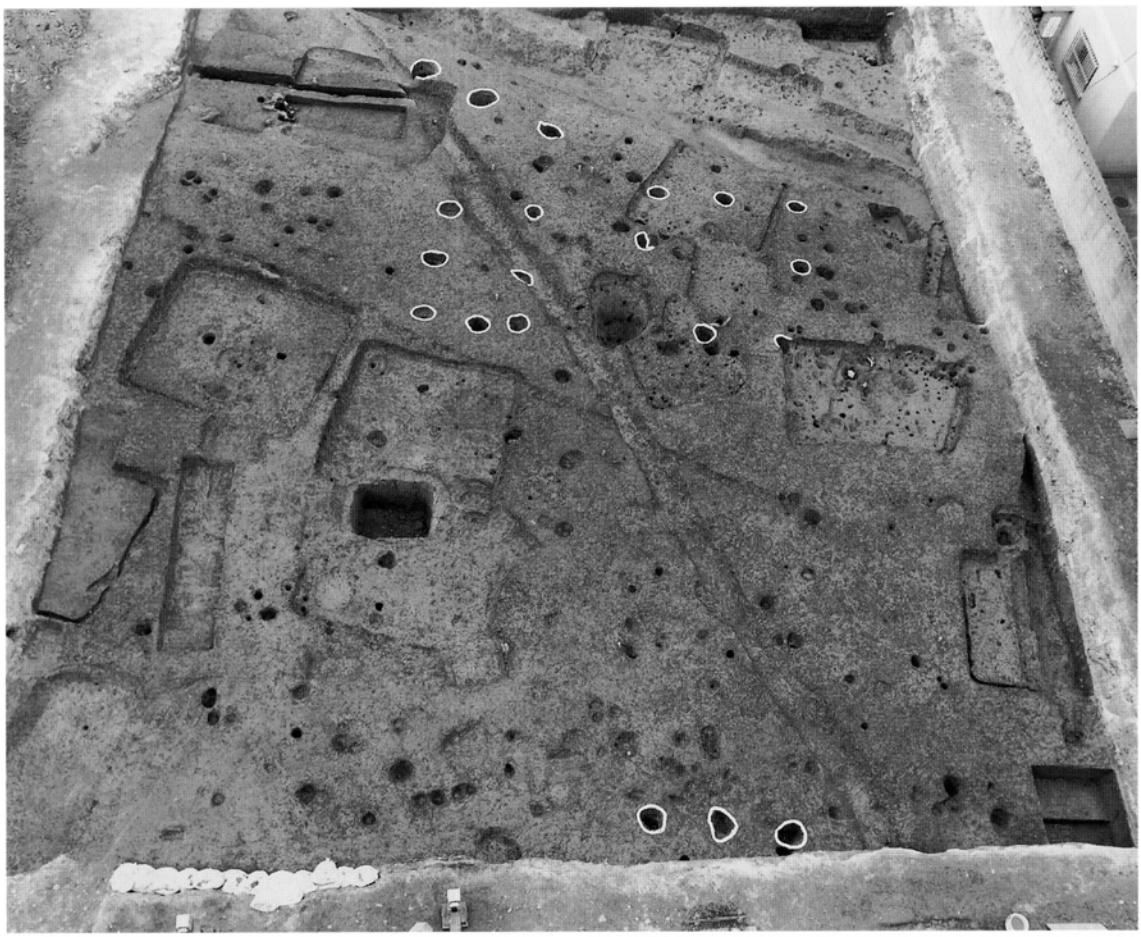
麦野Ｃ遺跡は博多区麦野６丁目から東雲町・銀天町一帯に広がる遺跡群で、南北800ｍ、東西400ｍの分布範囲をもつ。遺跡範囲内の中央を西鉄大牟田線が東西方向に走り、周辺は急速に市街地化している。これまでに第４次までの発掘調査が行われているが、西鉄大牟田線より北側では１次のみ、南側で２～４次の調査を実施しており、調査地点の位置にも偏りがあり遺跡群全体の様相は漠然としている。第５次調査は西鉄大牟田線より北側の、第１次地点に近接する住宅地内において行われた。調査地点の現状は宅地であり、過去の開発により地下げされている周辺に比べ１ｍ程高く、現地表面の標高は18ｍ前後を測る。調査は開発総面積1368㎡のうち、871㎡について実施した。調査は排土処理の関係から調査区を二区分し、西側をＡ区、東側をＢ区と設定し、Ａ区より着手した。

試掘調査の成果を基に重機によって30㎝～80㎝ほど表土を除去し、鳥栖ローム層上面において遺構を確認した。既存建物の基礎によって攪乱されいる箇所もあったが、遺構は良好に遺存していた。表土掘削の結果、調査区の東側が大きく削平されていることが判明した。西側では削平による遺構の損失は少なく、竪穴住居は深さ60㎝以上残存しているものもあった。遺構精査の結果、Ａ・Ｂ区で合わせて、弥生時代前期末の竪穴住居１軒・小児用甕棺１基、弥生時代後期初頭の竪穴住居６軒以上、７世紀末から８世紀後半にかけての竪穴住居45軒以上・掘立柱建物２棟以上、中世前半期の土壙墓・方形竪穴状遺構・溝３条などの遺構を検出した。これまで麦野Ｃ遺跡内では弥生時代に属する遺構は確認されておらず、本調査によって本遺跡内にも該期の集落が展開することが確認された。また、調査面積871㎡中で45軒以上の古代に属する竪穴住居が検出され、雑餉隈遺跡第５・８次地点の住居密集度（5600㎡中56軒）を超える高密度の分布を見せる。これらの住居跡は方向・配置において何らかの規則性を持って建てられており、建て替えに際してもほぼ同じ場所に行う等、社会的な規制にある程度管理された生活を印象づける様相を呈する。本調査地点に近接して所在する日吉神社内には嘉暦三年（1328年）の造立年を刻む板碑があり、該期の集落の展開が予想されたが、調査の結果中世前半期の区画溝・土壙墓などが検出され、一帯に屋敷地が存在していたことを示した。本調査地点の北側に近接する第１次調査地点では、旧石器時代の石器が数点出土しており、本調査地点においても出土が予想されたため、グリッドを設定して深掘りを行ったが、遺物は検出されなかった。
出土遺物はコンテナケースで47箱を数え、弥生土器・石器・土師器・須恵器・貿易陶磁器・鉄器などが出土した。

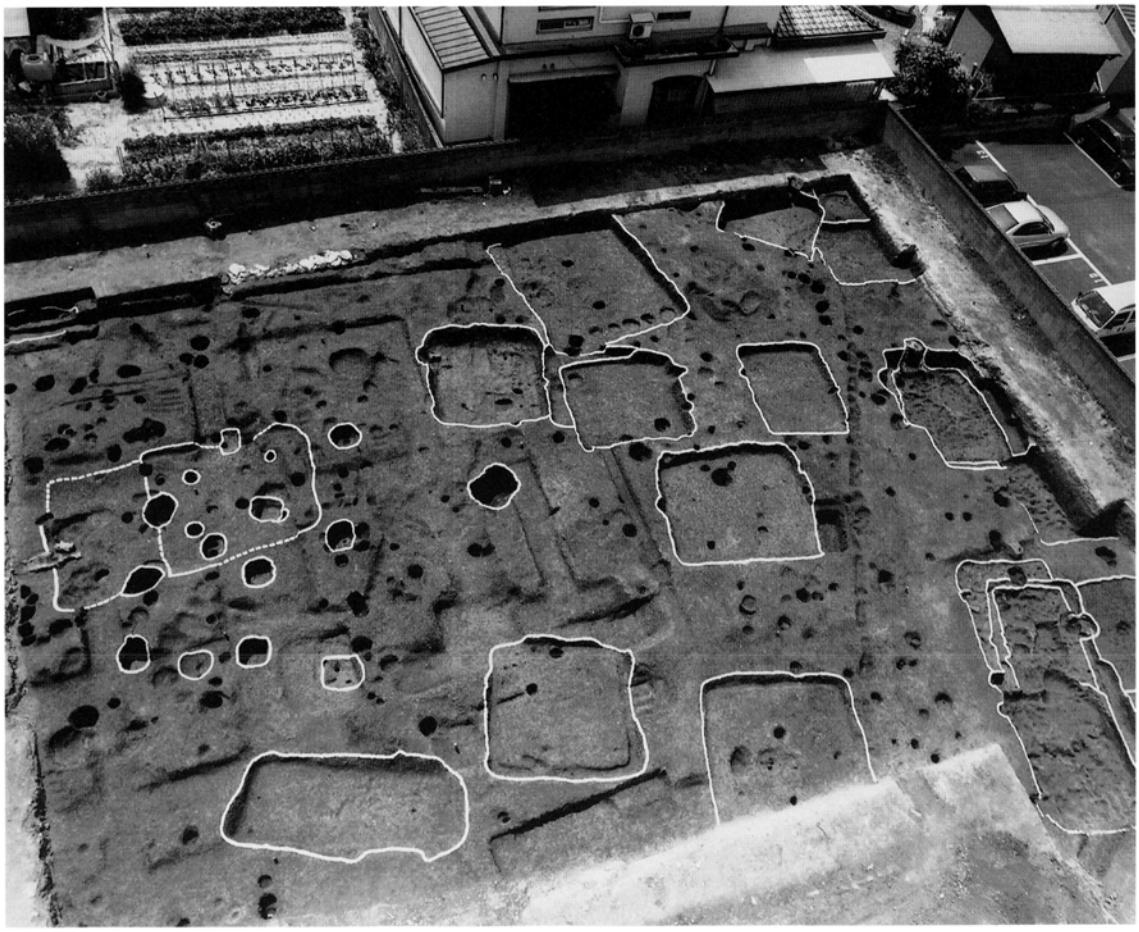
麦野Ｃ遺跡群調査一覧

調査次数	所　在　地	調査番号	調　査　期　間	調査面積	報　告　書
第１次	博多区麦野６丁目11-4	８９４９	19891011～19891118	６３３㎡	第３６１集
第２次	博多区銀天町２丁目４	８９０４	19890411～19890412	１００㎡	未　報　告
第３次	博多区銀天町３丁目14	９６０４	19960408～19960419	２４２㎡	第５０１集
第４次	博多区銀天町２丁目3-6	９６２８	19960805～19960813	２６５㎡	未　報　告
第５次	博多区麦野６丁目12-5他	９８５６	19990125～19990521	８７１㎡	**本　報　告**


SC-111
SC-102
SC-105
SC-106
SC-114
SC-115
SC-109
SC-183
SC-083
SC-027
SC-029
SK-171
SC-100
SC-104
SC-107
SC-041
SD-009
SD-005
SX-011
SC-103
SC-110
SD-108
SC-098
SX-101
SC-017
SX-010
SC-094
SC-093
SC-092
SC-097
SC-096
SB-087
SB-086
SC-014
SC-031
SC-032
SX-016
SC-012
SC-035
SC-003
SC-007
SC-036
SC-034
SX-099
SC-095
SX-164
SC-002
カクラン
SC-038
SC-040
SC-006
SD-008
SC-037
SK-112
SK-113
SC-158
SC-039
SC-139
SB-185
SX-001
SC-079
SC-134
SB-184
SK-145
A区
B区
0
10m

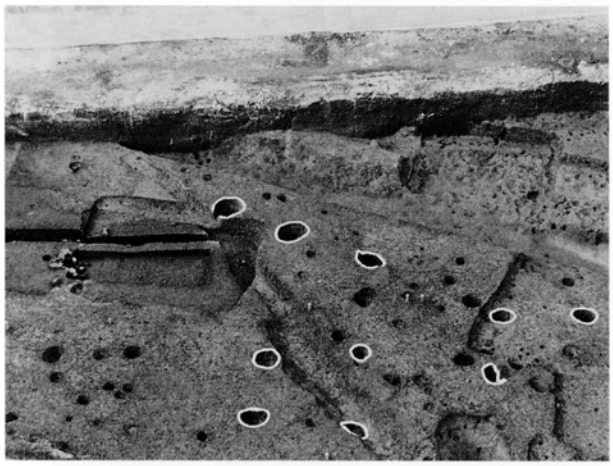


Ph-1　A区全景（西から）



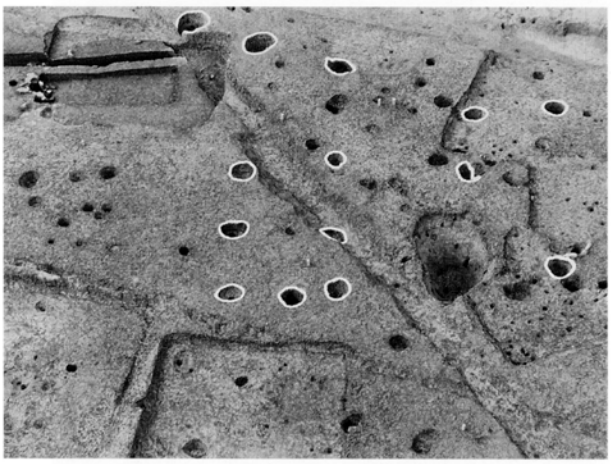
Ph-2　B区全景（北から）

A区完掘状況

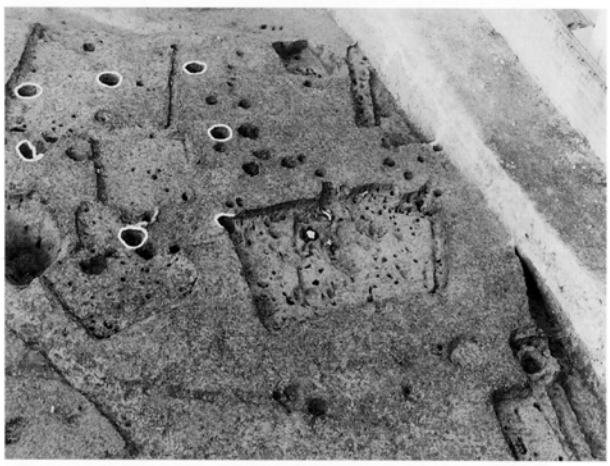


Ph-3　A区完掘状況（西から）

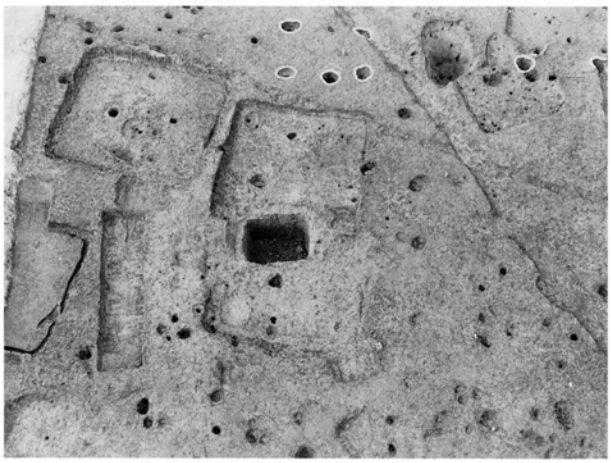
Ph-4　A区完掘状況（西から）



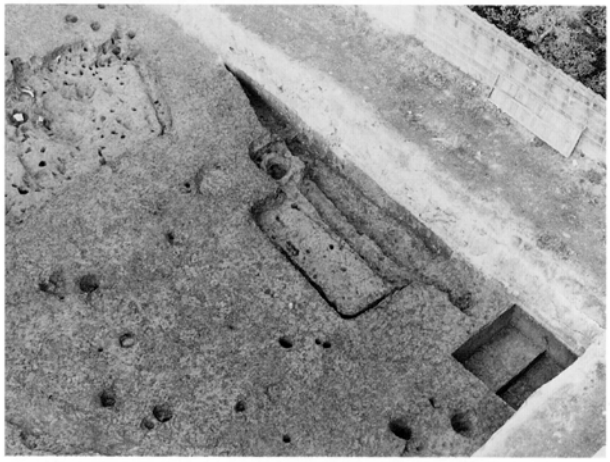
Ph-5　A区完掘状況（西から）



Ph-6　A区完掘状況（西から）



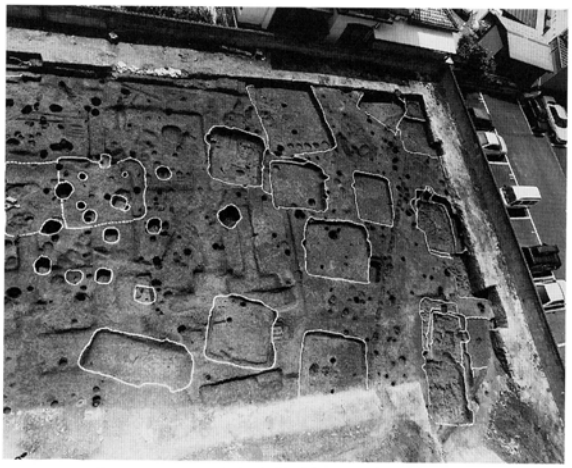
Ph-7　A区完掘状況（西から）



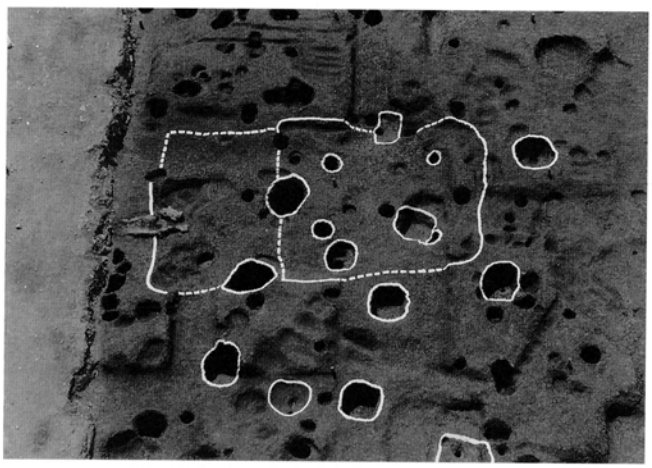
Ph-8　A区完掘状況（西から）

B区完掘状況

Ph- 9　B区完掘状況（北から）

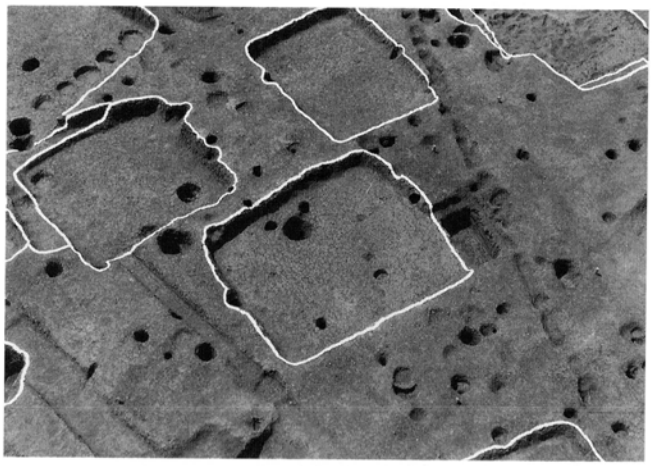


Ph-10　B区完掘状況（北から）

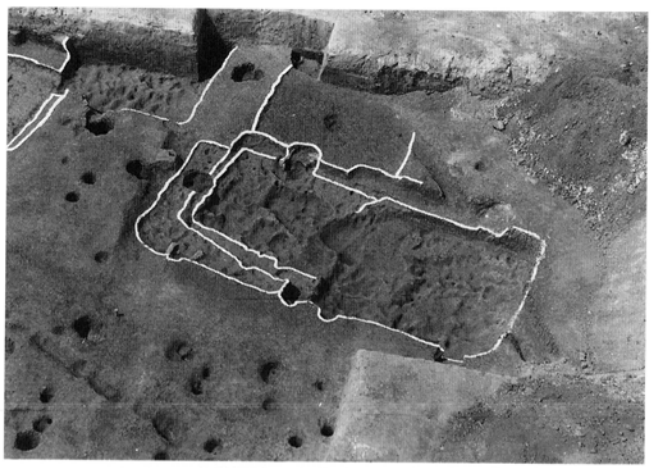


Ph-11　B区完掘状況（北から）

Ph-12　B区完掘状況（北から）



Ph-13　B区完掘状況（北から）



Ph-14　B区完掘状況（北から）

2．弥生時代の遺構と遺物

これまで麦野Ｃ遺跡内で行われた調査では、弥生時代に属する遺構は検出されておらず、遺物の出土だけが報告されていた。本調査地点においては弥生時代前期末の竪穴住居跡１軒・小児甕棺１基、弥生時代中期末から後期初頭にかけての竪穴住居跡４軒以上・掘立柱建物２棟を検出し、周辺に集落が展開していたことを明らかにした。各時期の検出された遺構の数は多くはないが、ある程度連続して定住していたと考えられる。調査の成果から、弥生時代の生活面は古代から中世にかけての後世段階の開発によって大幅に削平を受けており、複数の住居などの遺構が消滅しているものと考えられる。複数の重複する古代の住居群内からは、弥生時代の遺物が出土していることことからも検出された以上の遺構が存在していたことが考えられる。本調査での弥生時代の検出された遺物はコンテナケースで10箱以上を数える。特にSC-092からの出土量は全体の８割以上を占める。住居廃絶後に投棄されたものと考えられるが、住居の形態から祭祀関連の遺構の可能性も考えられる。SC-012・SC-092の２つの住居は床面上に柱穴を持たず、側壁に斜めに掘り込まれた柱穴を持つタイプで他と異なる構造をもつ。本調査区内では井戸は検出されなかった。

ＳＣ－００３（Fig－３）

Ａ区南側において検出した竪穴住居である。平面形は方形を呈し4.0ｍ×3.5ｍを測る。床面は検出面からの深さ20㎝、主柱穴は２本で床面から深さ50～70㎝を測る。壁溝は北東隅以外はほぼ全周する。床面上中央には３つの土坑が連なり、中央の土坑底部は被熱により赤変化し埋土中には炭化物が多く含まれていた。炉址と考えられる。床面上より土器片が数点出土した。

Fig－７に出土遺物を示す。

１は器台である。上半部のみ残存しており、復元口径は9.8㎝を測る。胴部には指頭圧痕が観察さ

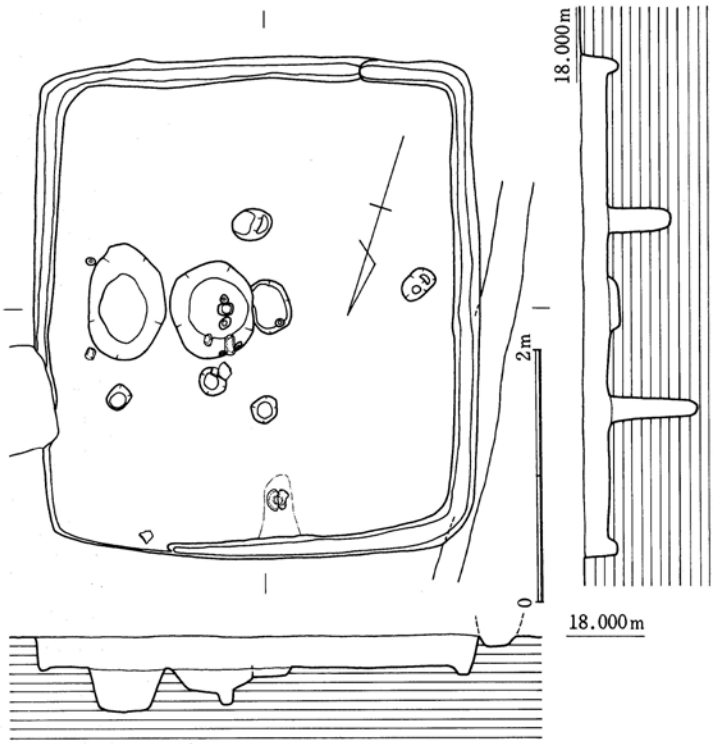


Fig-３　SC-003実測図（縮尺1/60）

Ph-15　SC-003完掘状況（南から）

Ph-16　SC-003完掘状況（東から）

れる。口縁部付近は被熱のため赤褐色を呈する。２は無頸壺である。底部は欠損するが、復元口径は13.2㎝、最大径は16.2㎝を測る。遺存状態は悪く器面調整は外器面の縦刷毛目調整以外観察されない。３は甕である。復元口径は19.4㎝を測る。４は石斧である。現状で全長8.3㎝、全幅6.7㎝を測る。基部は欠損する。５は黒曜石製の石鏃である。

ＳＣ－０１２（Fig－４）

Ａ区中央部北側で検出した小型竪穴住居である。平面形は方形で2.05ｍ×2.2ｍを測る。床面は検出面から深さ15㎝程度と遺存は浅い。南壁に接して小児甕棺がほぼ横位の状態で検出された。甕を下甕とし無頸壺を上甕とし合せ口とする（Fig－５）。掘方は検出されず、住居廃絶後すぐに埋設されたものと考えられる。甕棺前面には炉と考えられる深さ30㎝の土坑が検出された。床面上では柱穴は検出されず、北西側と南東側の壁面上に斜め方向に掘削された柱穴を検出した。この２つの柱穴は深さ50㎝前後を測る。住居の上屋は簡単な構造が想定される。殯屋の可能性が考えられよう。

Fig－７に出土遺物を示した。

１は甕である。口径16.4㎝、底径7.3㎝、器高18.2㎝を測る。底部は平底で、底部から胴部下半部は被熱のため赤化する。刷毛目調整が観察できる。

２は無頸壺である。復元口径16.2㎝、胴部最大径18.4㎝、底径8.0㎝、器高15.5㎝を測る。遺存状況は悪く器面調整は刷毛目調整がわずかに観察できる程度である。これらの遺物は弥生時代前期末に位置づけられよう。

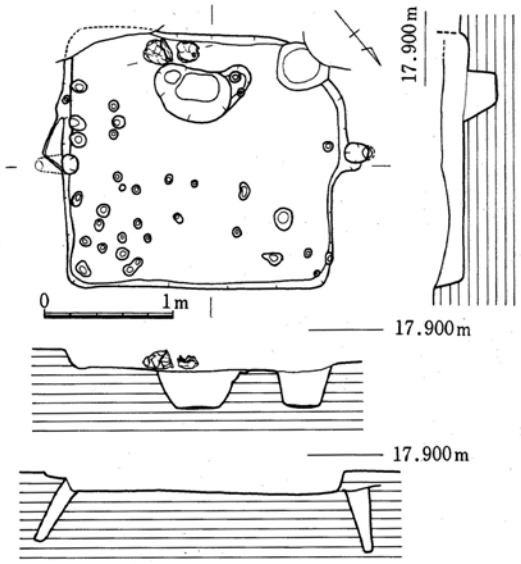
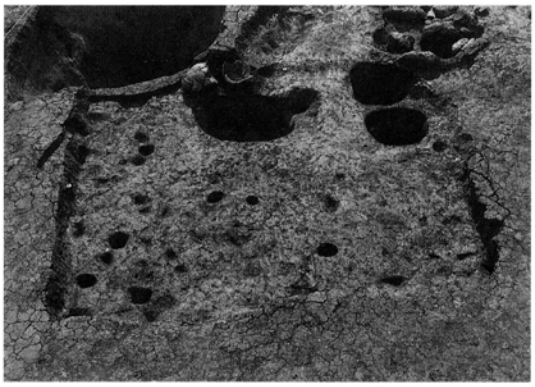


Fig-４　SC-012実測図（縮尺1/60）



Ph-17　SC-012完掘状況（西から）

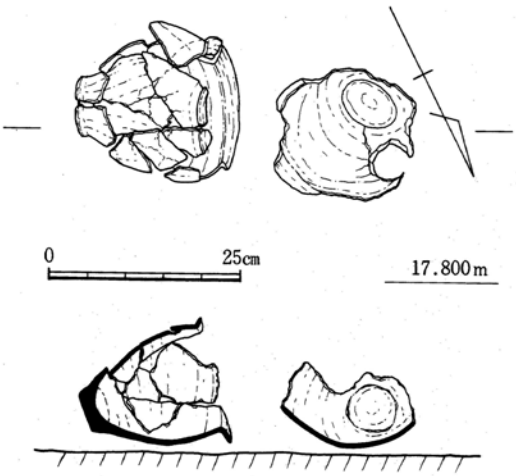
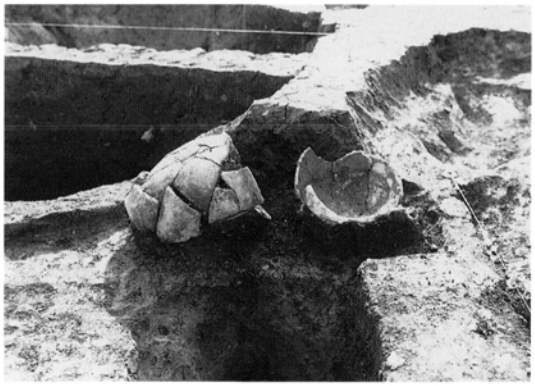


Fig-５　小児甕棺出土状況図（縮尺1/10）



Ph-18　SC-012内小児甕棺出土状況（西から）

ＳＣ－０９４（Fig－６）

Ｂ区南端で検出した住居である。平面形は方形を呈し、同時期の他の住居よりも大型の住居で復元で4.25ｍ×5.0ｍを測る。南端は調査区外にのび、南側はSC-093に切られる。床面は検出面から深さ40㎝を測る。主柱穴は２本で床面からの深さは50㎝を測る。両柱穴間の土坑は炉と考えられる。
貼床は厚さ５㎝程度で、これを除去すると北側に６つの土坑が並んで検出された。この住居に伴う遺構とは考えがたく、住居掘削以前の遺構と捉えられる。

Fig－７に出土遺物を示した。

１は壺の底部片である。復元底径9.4㎝を測る。外面には単位の大きい縦刷毛目調整が施されており、内面には指ナデ調整痕が観察される。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。２は石包丁である。
壁溝内より出土した。刃部が一部欠損するが、ほぼ完存する。擦痕が明瞭に観察される。石材は砂岩系のものが使用され、
灰色を呈する。紐通し孔は2.3㎝間隔で穿孔される。これらの遺物より弥生時代後期の時期が考えられる。

SC-094土層名称

1．暗褐色土　炭化物を含む
2．黒褐色土　ローム粒混入多
3．黒褐色土　ローム粒混入
4．暗褐色土　炭化物混入多
5．黒褐色土　ローム粒混入少
6．暗茶褐色土　ローム粒混入
7．暗黄褐色土
8．黒褐色土　炭化物混入
9．黒褐色土　ローム粒混入
10．暗褐色土　ローム粒混入多

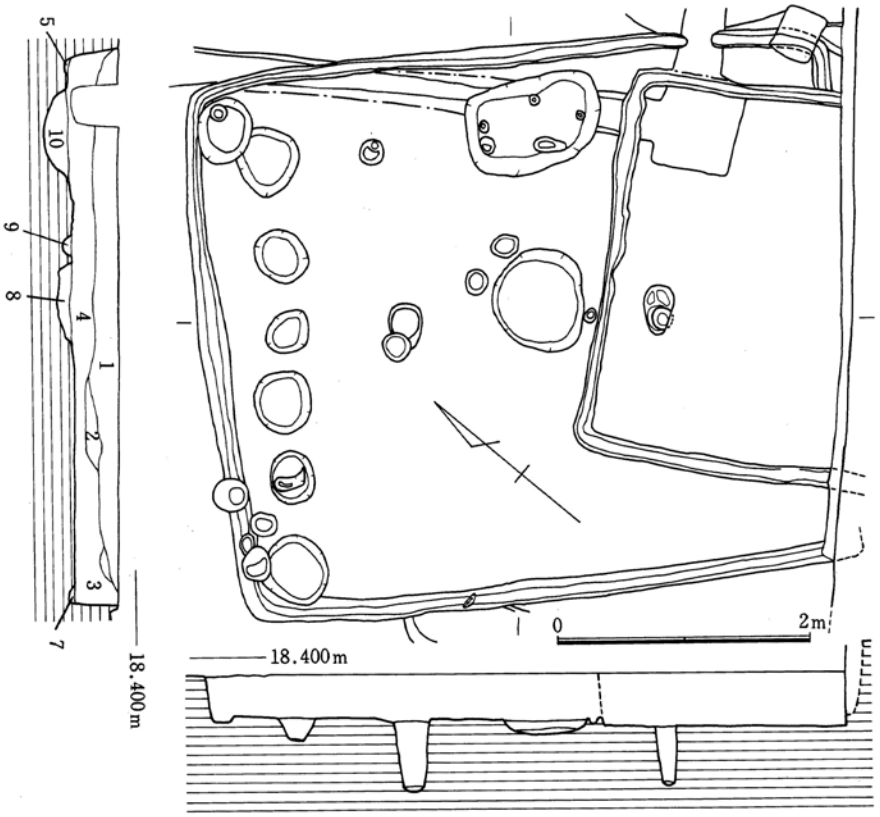
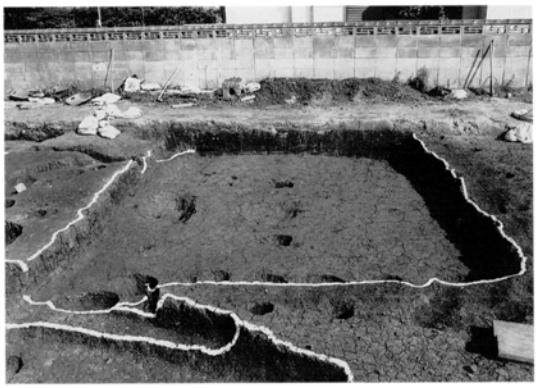
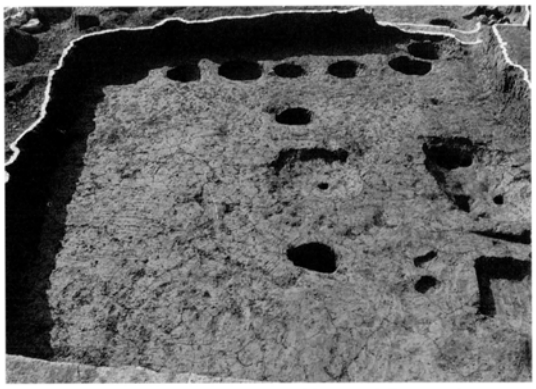


Fig-６　SC-094実測図（縮尺1/60）



Ph-19　SC-094完掘状況（北から）



Ph-20　SC-094完掘状況（南から）

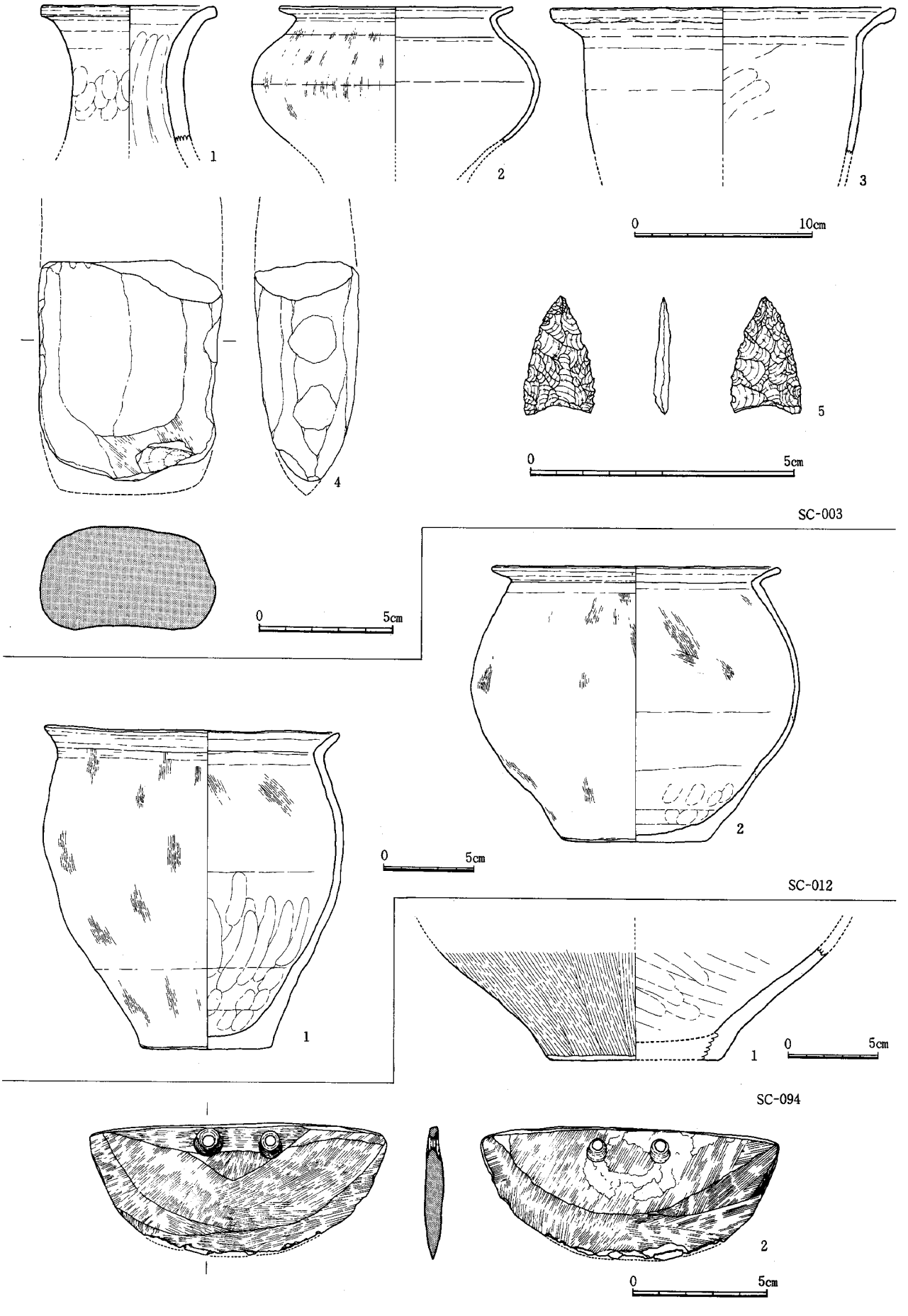


Fig-7　出土遺物実測図（縮尺1/1.1/2.1/3）

ＳＣ－０９２（Fig－８）

Ｂ区中央部で検出した住居である。平面形は方形で4.1ｍ×3.3ｍを測る。床面は検出面からの深さ25㎝を測る。床面上では柱穴は検出されず、西側壁と東側壁に斜めに掘削された柱穴を検出した。この住居もSC-012と同様の上屋構造が想定される。２本の主柱穴とは別に床面南側において柱穴状の土坑を検出した。床面からの深さは1.85ｍを測り、通常の柱穴とは異なる目的で掘削されたものと考

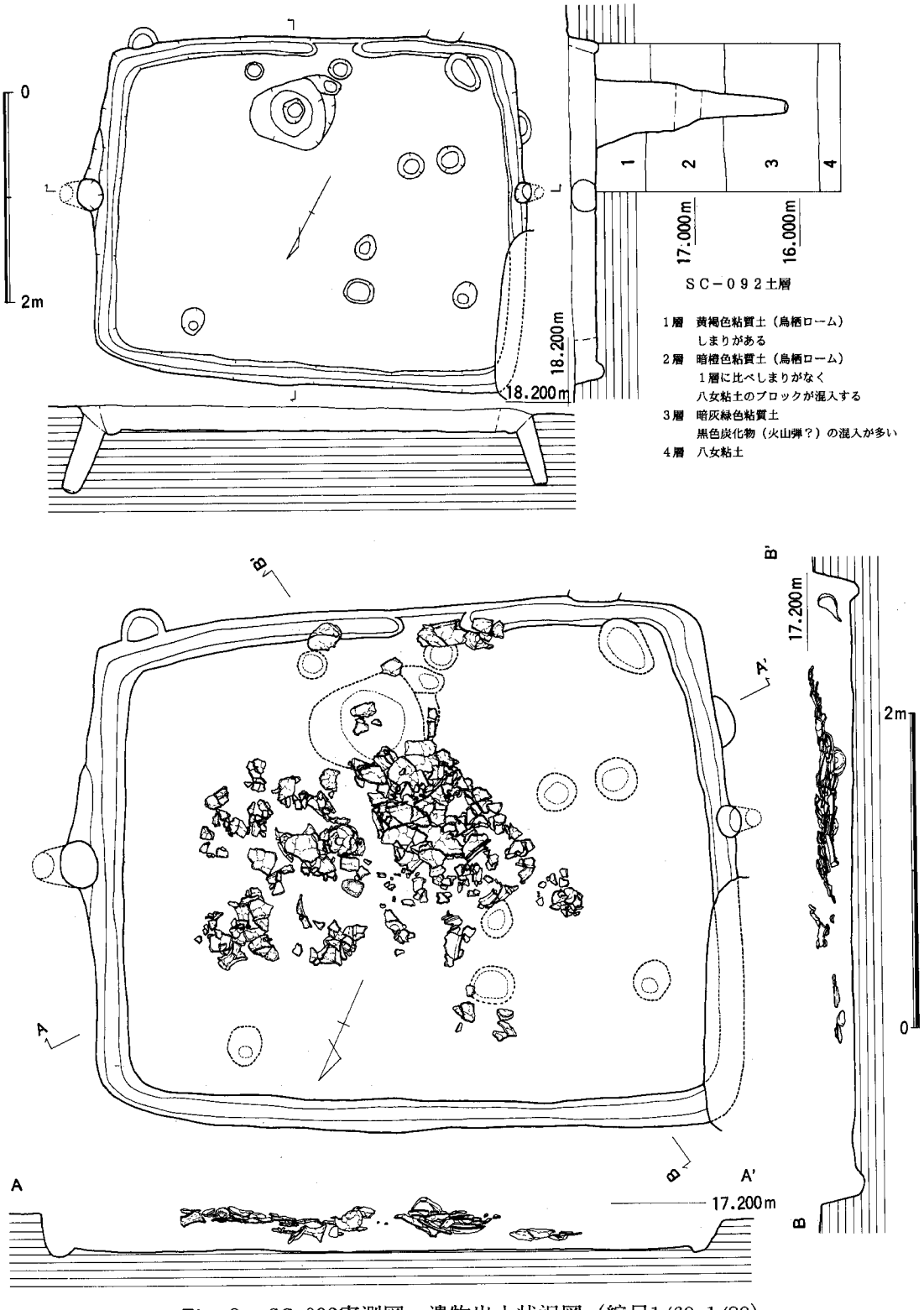


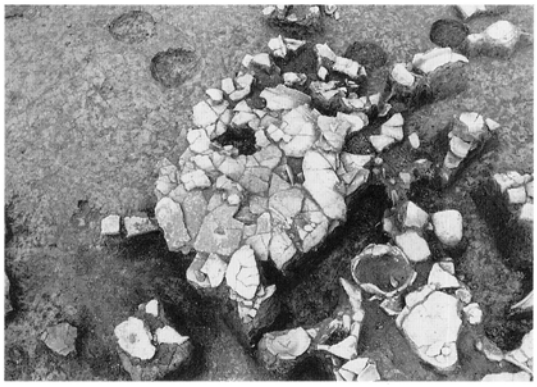
Fig-８　SC-092実測図・遺物出土状況図（縮尺1/60.1/80）

えられる。この住居内には廃絶後に廃棄された土器が、散乱した状況で出土した（Fig-8下段）。土器は住居中央部に集中しているが、数回にわたる長期間の廃棄が出土状況より推測された。中央部の大型甕は西側方向より倒された状況で出土したが、他の土器の投棄方向などは把握できなかった。下層において完形のものが多く出土し、総量はコンテナケースで８箱を数える。住居の構造・廃絶後の利用方法などから祭祀遺構の可能性が考えられる。Fig－９～12に出土遺物を示す。

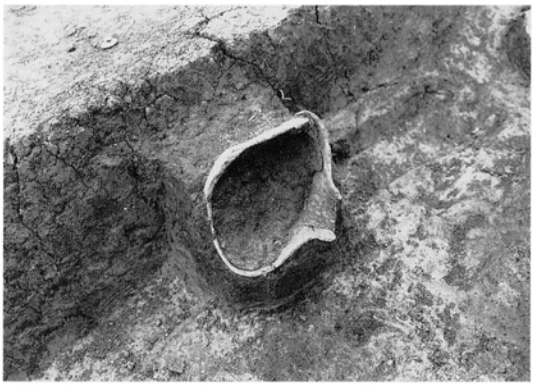
１は高坏である。復元口径24.0㎝、底径16.4㎝、器高20.5㎝を測る。二次的な被熱のため器面は粗

Ph-21　SC-092完掘状況（西から）

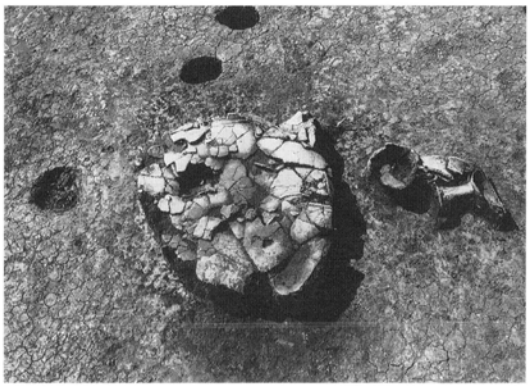
Ph-22　SC-092遺物出土状況（北から）



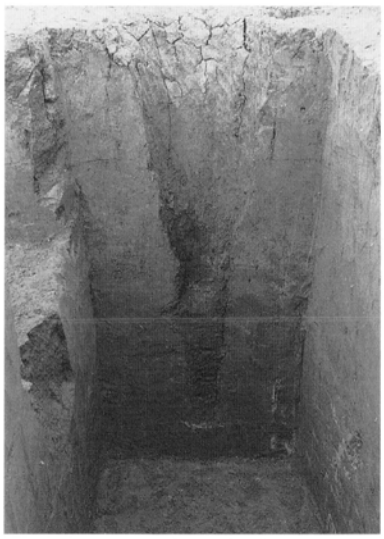
Ph-23　SC-092遺物出土状況（北から）



Ph-24　SC-092遺物出土状況（北から）



Ph-25　SC-092遺物出土状況（北から）



Ph-26　SC-092内土坑断面（西から）

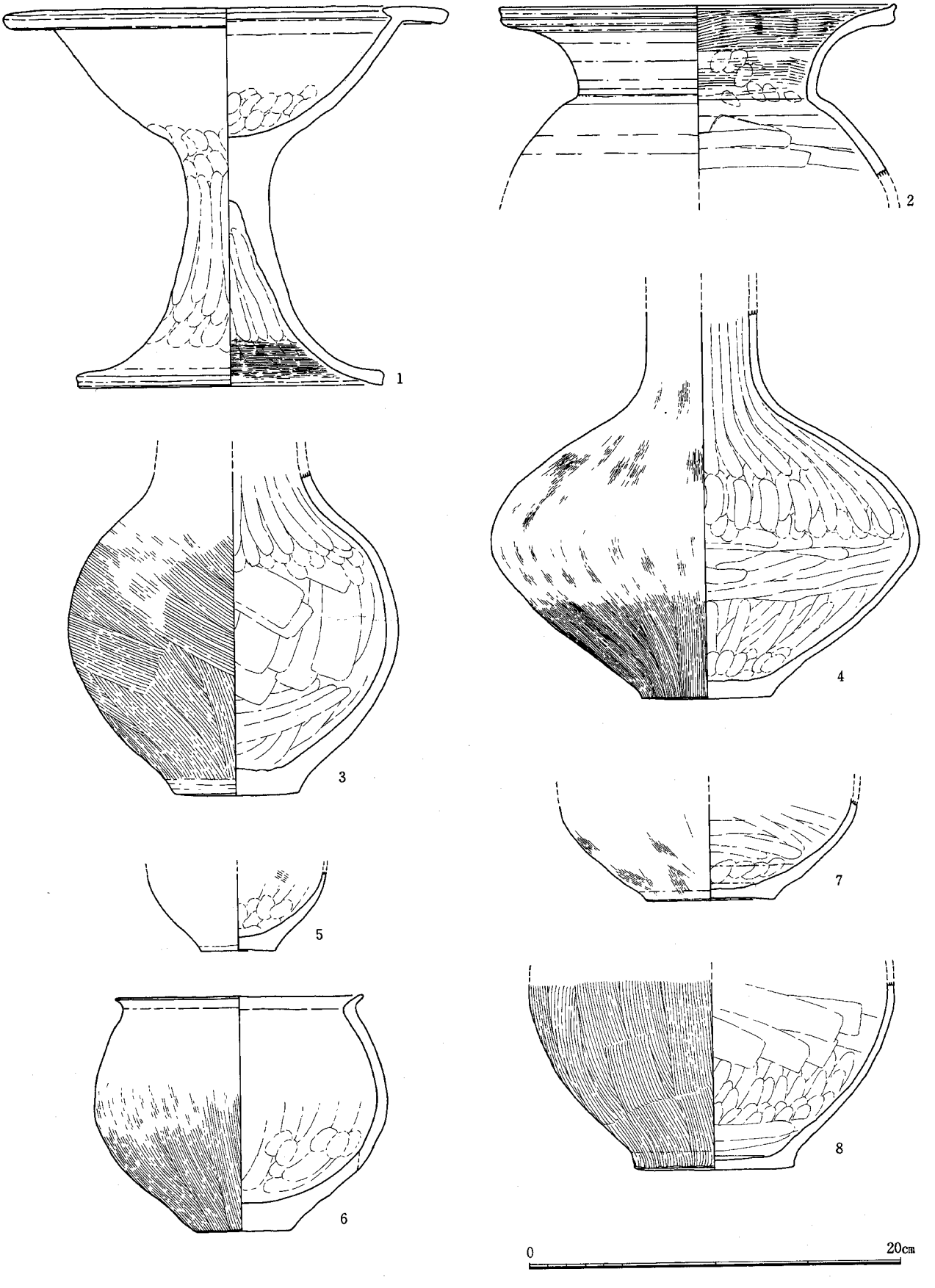


Fig-9　SC-092出土遺物実測図１（縮尺1/3）

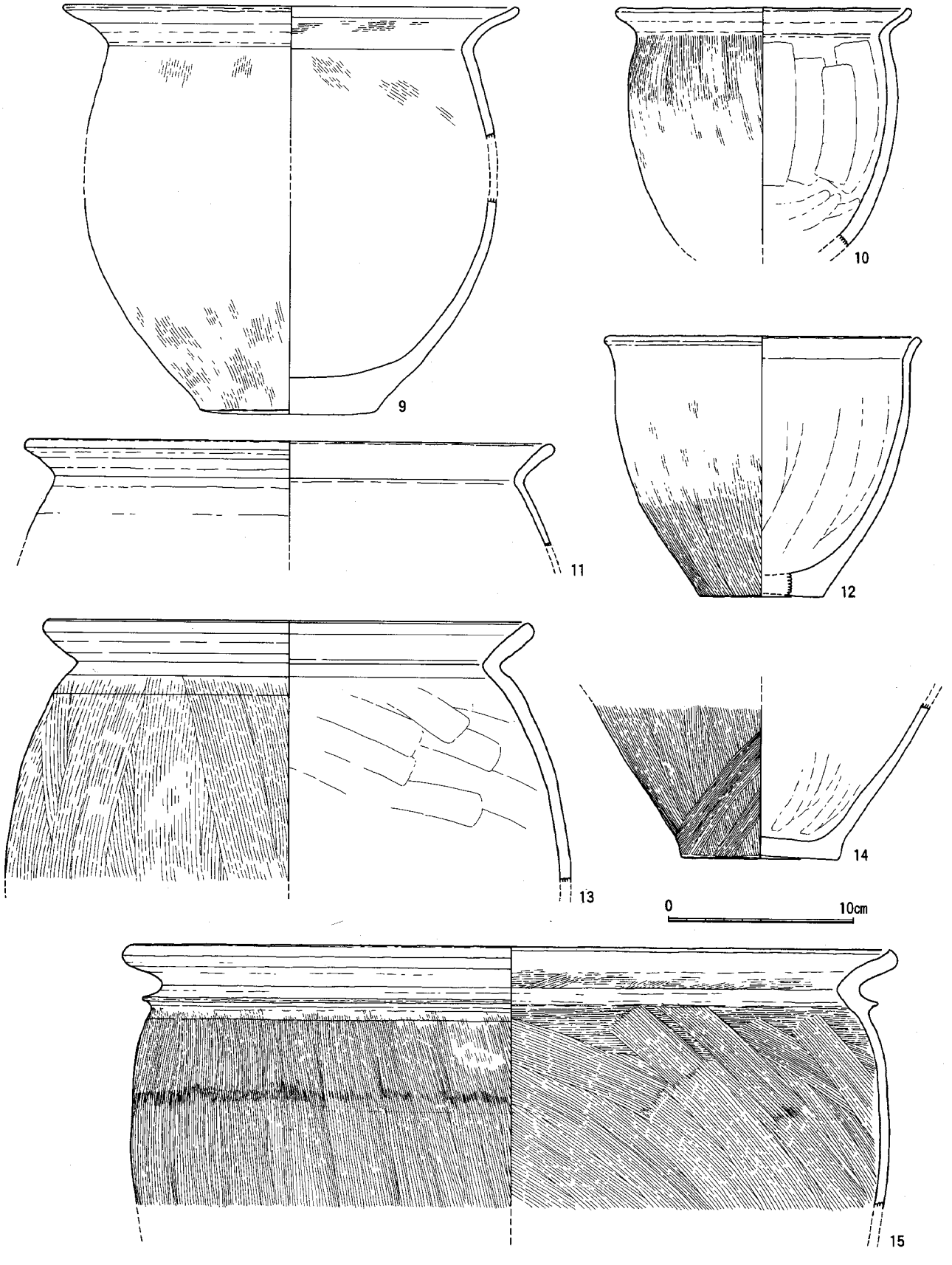


Fig-10　SC-092出土遺物実測図２（縮尺1/3）

れており、坏部の調整は消滅している。脚部外面には指ナデ調整が施され、内面はナデ調整の上に横刷毛目調整が施される。2は広口口縁壺で、胴部下半以下は欠損する。復元口径は21.2cmを測る。3は壺である。口縁部は欠損するが、袋状口縁がつくものと考えられる。底部はやや丸みを帯び、底径は6.7cmを測る。4は袋状口縁壺である。口縁部を欠損する。胴部最大径は23.0cmを測る。内面には上部への指ナデ痕が明瞭に残る。5は小型壺である。底部はやや上げ底で、底径4.0cmを測る。6は無頸壺である。口径13.4cm、底径5.0cm器高12.7cmを測る。7は壺の胴部片である。底部は平底で、底径は6.8cmを測る。8は壺の胴部片である。底部はやや丸みを帯び、底径は8.8cmを測る。9は甕である。復元口径24.4cm、底径9.6cm、器高22.0cmを測る。遺存状態はあまり良くない。10は甕である。底部を欠損する。復元口径16.0cmを測る。11は甕の口縁部片である。遺存状態は悪く器面調整は観察できない。復元口径は28.4cmを測る。12は甕である。復元口径17.2cm、底径6.7cmを測る。被熱し器面調整はほとんど消失する。13は甕の口縁部片である。復元口径は26.4cmを測る。外面には縦刷毛目調整が施される。14は甕の底部片である。底部はほぼ平底であるが、中央部がやや上げ底気味になる。底径は8.6cmを測る。15は甕の口縁部片である。復元口径は42.0cmを測り、遺存状態は良好である。16～22は器台である。16は口径12.2cm、底径16.0cm、器高17.2cmを測る。17は口径11.0cm、底径15.4cm、

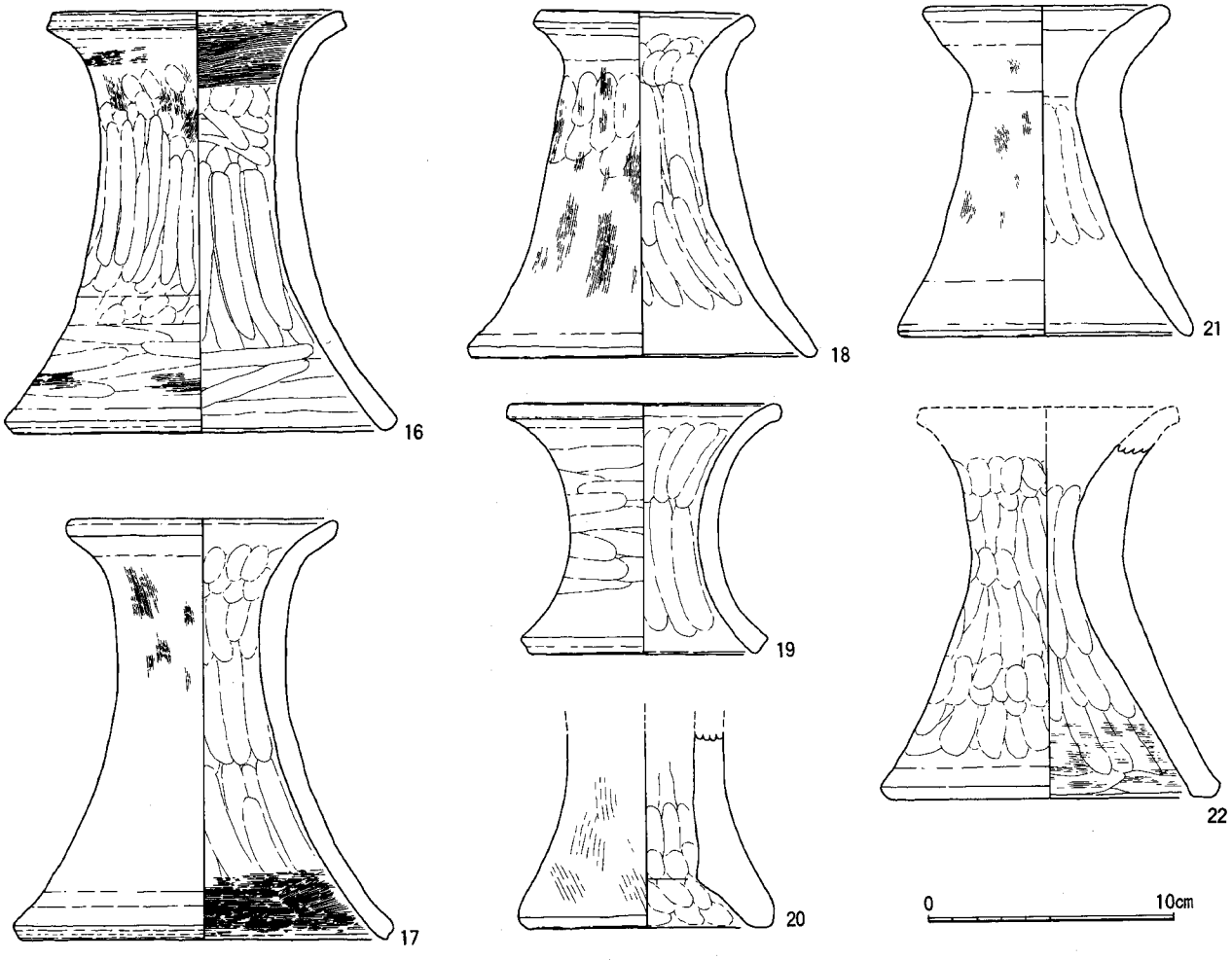


Fig-11　SC-092出土遺物実測図3（縮尺1/3）

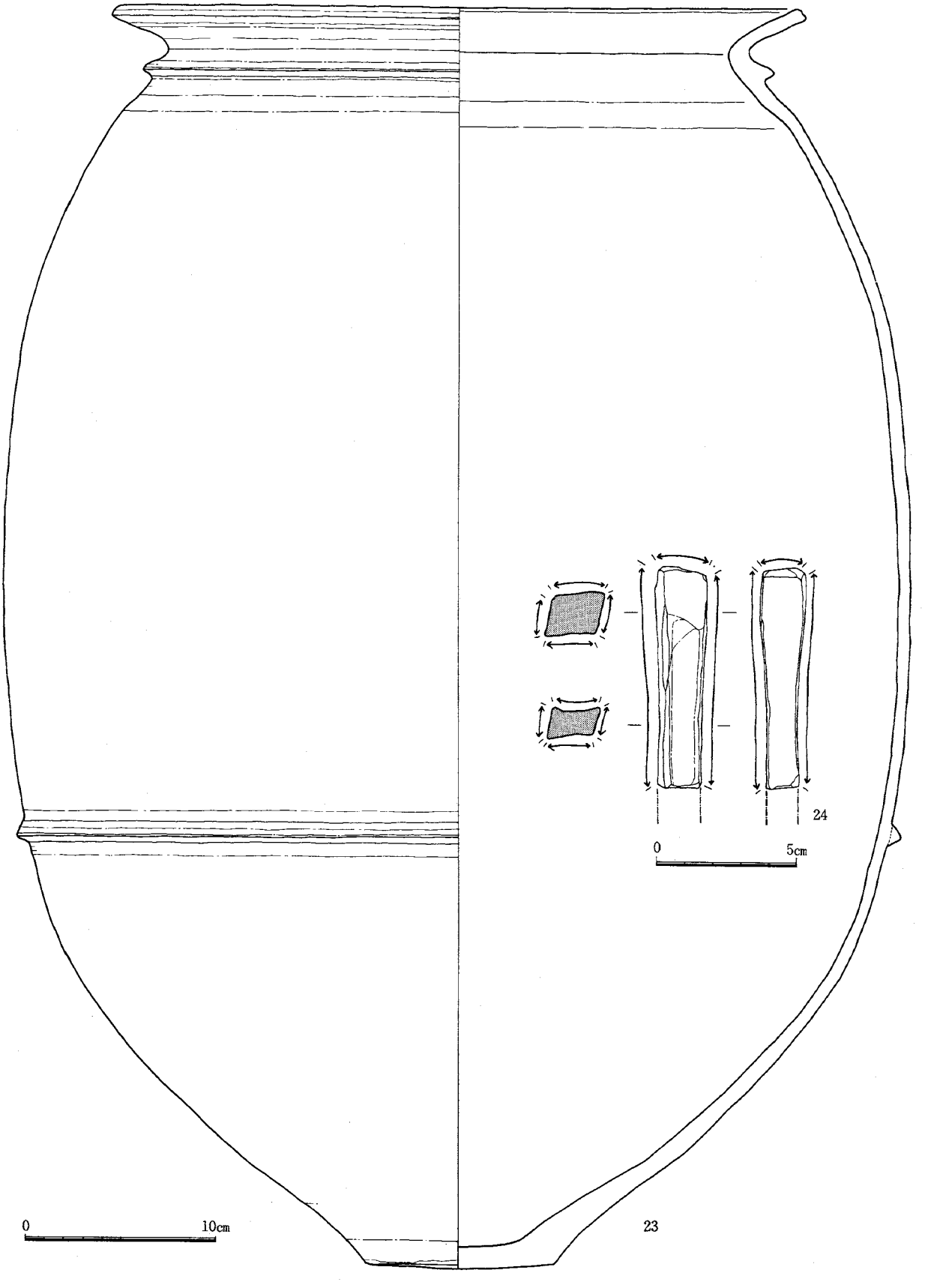


Fig-12　SC-092出土遺物実測図４（縮尺1/2.1/3）

器高17.2㎝を測る。18は口径8.6㎝、底径14.2㎝、器高14.3㎝をはかる。19は口径13.2㎝、底径10.0㎝、器高10.3㎝を測り、口縁部径の方が大きくなる。20は底径10.4㎝を測り、遺存状況は悪い。21は口径9.8㎝、底径12.0㎝、器高13.5㎝を測る。22は底径13.8㎝を測る。これらの器台は口縁部・底部が被熱して赤化する。全体的に遺存状況は良くない。23は大型の甕である。復元口径38.4㎝、底径9.6㎝、胴部最大径48.4㎝、器高67.6㎝を測る。底部はやや丸みを帯び、頸部と胴部下半に突帯を巡らす。器面は摩滅のため調整は観察できない。24は砥石である。下部を欠損しているが、全面に研磨痕が観察される。この住居から出土した土器はほとんど二次的な被熱を受けており遺存状況は良くない。遺物から弥生時代後期前半の時期が考えられる。

ＳＢ－１８４・ＳＢ－１８５（Fig-13・Fig-14）

SB-184・185はＢ区東側で検出した掘立柱建物である。ともに梁間１間、桁行２間で、梁間2.6ｍ・3.0ｍ、桁間3.8ｍ・6.1ｍを測る。この建物は平行・重複して建てられているが、直接的な切り合いはなく、前後関係は把握できなかった。柱穴の深さは検出面からSB-184が40㎝～70㎝を測り、SB-185は20㎝～50㎝を測る。両建物の推定面積は9.8㎡・18.3㎡を測る。柱穴の埋土はどちらの建物も黒色粘質土で、SB-184の柱穴から遺物が少数のみ出土した。

Fig－15に出土遺物を示した。

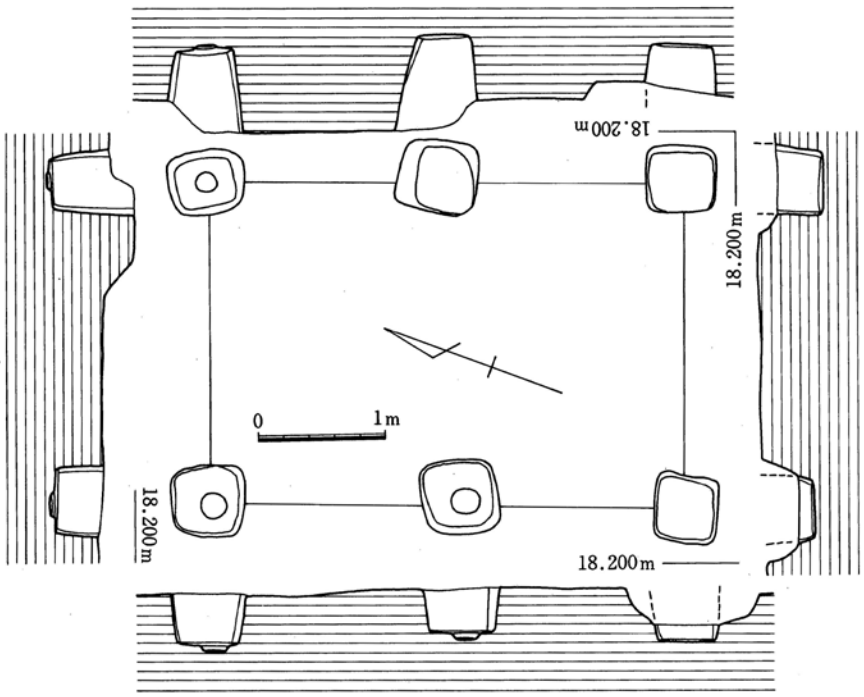


Fig-13　SB-184実測図（縮尺1/60）

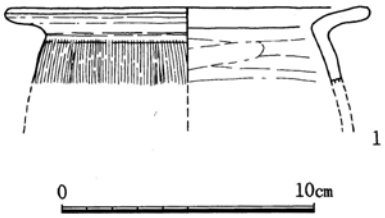
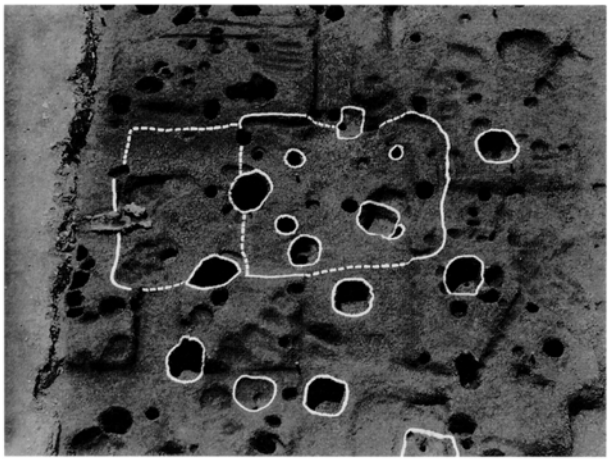


Fig-15　SB-184出土遺物実測図（縮尺1/3）



Ph-27　SB-184・185検出状況（北から）

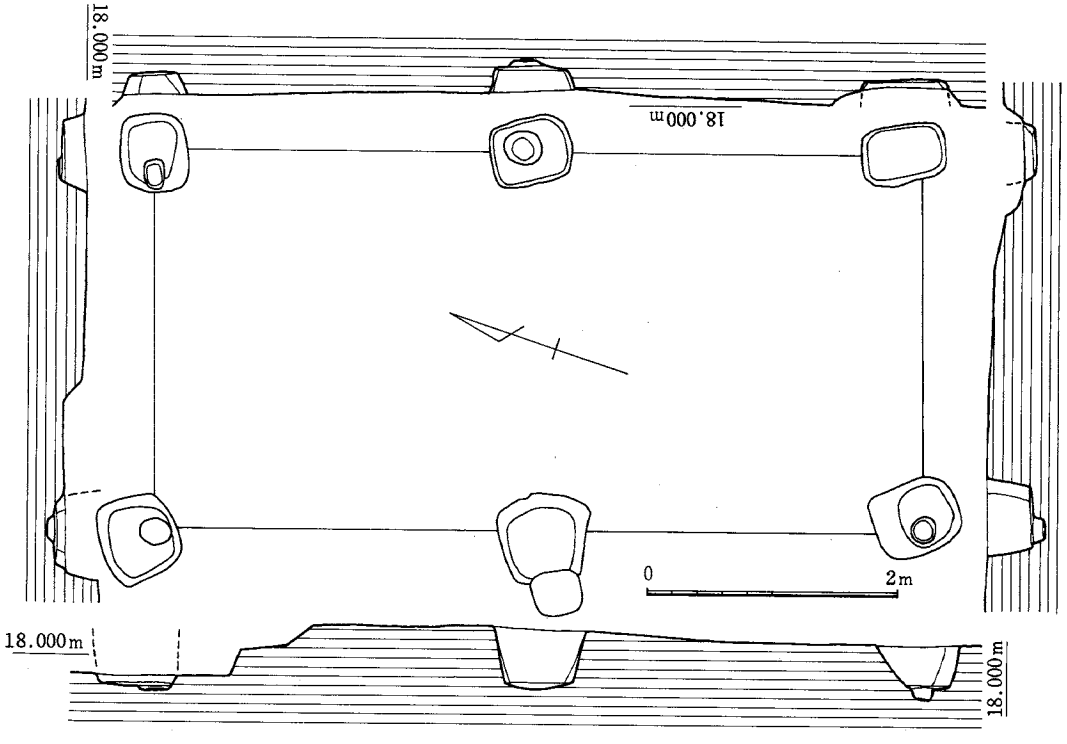
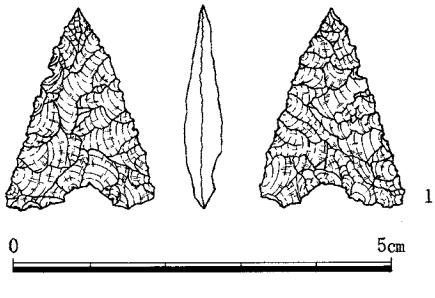


Fig-14　SB-185実測図（縮尺1/60）

1はSB-184から出土した弥生土器の甕の口縁部片である。復元口径は14.4cmを測り、焼成は良好である。外面には縦刷毛目調整が施され、口縁部内面には横刷毛目調整が施される。胴部内面にはナデ調整が観察される。遺物・埋土からSB-184・185の時期は弥生時代後期前半を考えている。

その他の出土遺物（Fig－16）

以上の遺物以外にも弥生時代に属するものが出土した。1は黒曜石製の石鏃である。古代の住居の埋土より出土した。2は砥石である。端部・下部は欠損しているが、残存する面にはすべて擦痕が観察される。砂岩製で、乳白濁色を呈する。SC-003の床面上より出土した。



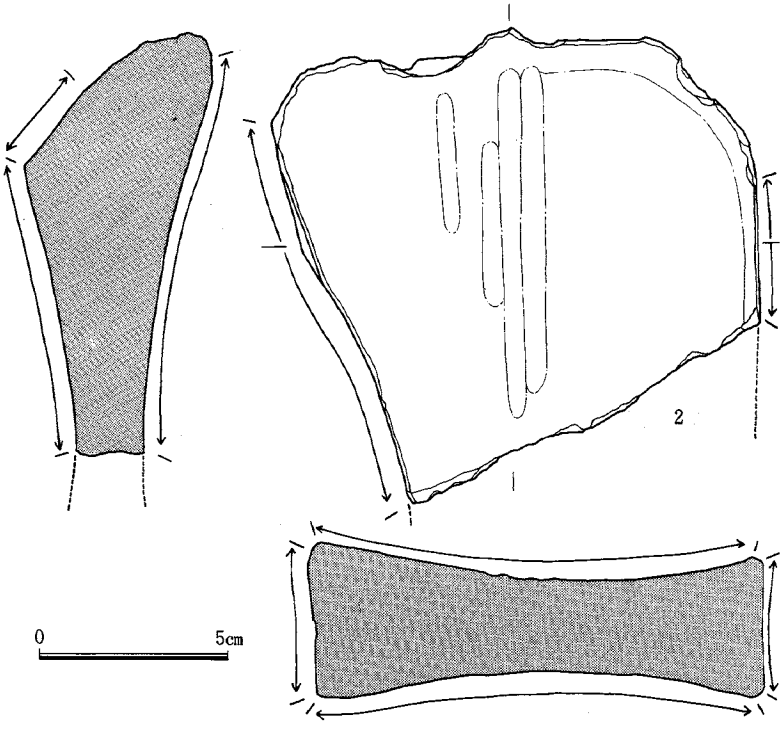


Fig-16　その他の出土遺物実測図（縮尺1/1.1/2）

3．古代の遺構と遺物

これまでの麦野・雑餉隈・南八幡遺跡での調査において、古代の遺構が全く検出されなかった調査区はほとんどないほど、この時期の遺構は広範囲に展開している。本調査においては調査面積871㎡中で45軒以上の竪穴住居・２棟以上の掘立柱建物・土坑・柱穴群を検出した。この遺構密度はこれまでの調査に比較して群を抜く密度であるが、過去に大幅な開発を免れて遺構が良好に残存していたことや、数回にわたる建て替えの結果であり、同時期に営まれた住居の密度としては他の調査区と同程度になるものと考えられる。しかしながら、他の調査区と異なりほぼ同じ場所に数回にわたって建て替えを行うなど、比較的長期間の定住が行われており土地利用において何らかの規制が存在していたことが想定される。これまでの一帯の調査において奈良時代の竪穴住居は約150軒、掘立柱建物は43棟以上検出されている。本調査地点に近接する麦野Ｃ遺跡１次調査地点では23軒以上の竪穴住居が検出され、竪穴住居は切り合い、竈の有無・構造から６タイプに分類され４時期に区分されている。本調査において検出された竪穴住居にも同様の分類を適用し、住居の規模・一次掘削痕の分類を追加する。分類は報告した36軒の住居について以下のように行い整理した。

竈の構造		竈の有無・位置・方向		住居の規模		一次掘削痕	
1	作り付け型	A	竈位置不明	Ⅰ	１辺が2.2ｍ以下の住居	a	一次掘削痕が確認できない住居
		B	竈が南方向				
2	コーナー型	C	竈が西方向	Ⅱ	１辺が2.4ｍ～3.2ｍ程の住居	b	中心から周辺に掘り広げた住居
		D	竈が東方向				
3	張り出し型	E	竈が北方向	Ⅲ	１辺が3.2ｍ以上の住居	c	周辺から掘り下げた住居

竈の構造は住居内の付設位置で１～３類に分類した。１類は住居内の壁面に竈の壁体となる白色粘土を直接張り付けたもの、２類は住居壁の隅部に付設するもの、３類は住居壁に張り出し部を設け竈を付設するものである。

次に竈の有無・位置・方向でＡ～Ｆ類に分類した。Ａ類は竈位置が不明なもの、または竈を持たないもの、Ｂ類は竈が南方向に向けて付設されるもの、Ｃ類は竈が西方向に向けて付設されるもの、Ｄ類は竈が東方向に向けて付設されるもの、Ｅ類は竈が北方向に向けて付設されるものである。

次に住居の平面規模によってⅠ～Ⅲ類に分類した。Ⅰ類は住居の１辺が2.2ｍ以下を測るもの、Ⅱ類は住居の１辺が2.4ｍ～3.2ｍを測るもの、Ⅲ類は住居の１辺が3.2ｍ以上を測るものである。

最後に住居貼床下に検出できる住居構築時の一次掘削痕によってａ～ｃ類に分類した。ａ類は一次掘削痕が確認できない、ほぼ平坦に掘削されたもの、ｂ類は住居中心を最初に掘り下げて周囲を掘削していったもの、ｃ類は住居壁際から先に掘り下げて全体を掘削したものである。

なお、竈の付設方向については住居の占地する箇所の地形的制約などの影響が考えられ、広範囲に展開する住居群については効果のない分類とも考えられるが、本調査区のような狭い範囲に展開する住居群については十分に適用できるものとして採用した。煙道は遺構面全体が削平されているため残存しているものは少なかった。張り出し状に斜め方向に掘削されるものと、平行に掘削した後に上方へと抜ける２タイプの煙道が検出された。住居廃絶時の竈祭祀については分類できるだけの資料が検出できなかったため、今回の分類の項目からは除外し住居の説明において記述した。ほとんどの住居の竈は廃絶時に壁体が破砕され、床面上に白色粘土が散乱するような状況で検出された。数軒の住居の竈では廃絶時に祭祀行為を行っていたことが調査より分かっている。

これらの分類を基本として住居の説明を行い、第三章にてまとめを行う。

ＳＣ－００２（Fig－17）

Ｂ区北側で検出した住居である。平面形は方形で3.25ｍ×3.15ｍを測る。南東側端部を撹乱されるが検出面からの深さ20㎝ほど残存する。壁溝はほぼ全周し、床面からの深さは10㎝前後を測る。住居内で竈は検出されなかったが、住居南東隅部に掘り込みが検出され、焼土・白色粘土が堆積していたことから竈を破壊した跡と考えられる。床面上においては柱穴は検出されなかった。また、住居南壁際に土坑が検出されたが、この住居に伴う遺構なのかは判断できなかった。埋土は黒褐色土で、鳥栖ロームの小ブロックを多く含む。埋土・南東隅部土坑から土師器・須恵器などの遺物が出土した。

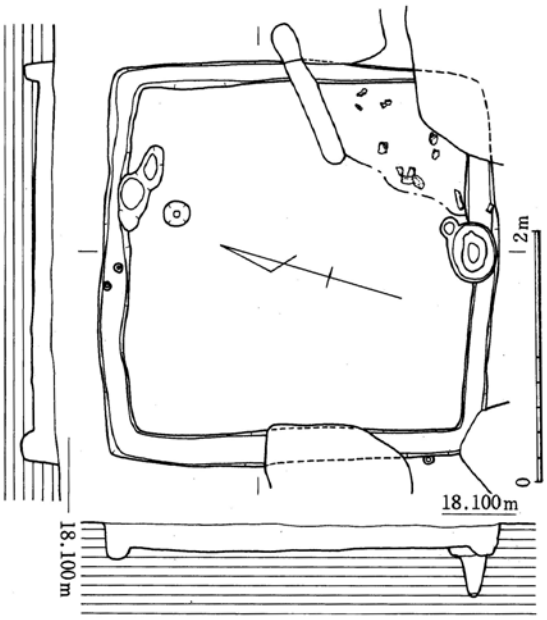


Fig-17　SC-002実測図（縮尺1/60）

Fig－18に出土遺物を示した。

１は土師器の甕である。復元口径は26.6㎝を測る。焼成は良好で、色調は暗褐色から褐色を呈する。器面調整は外面に指ナデ調整と指押さえ、内面は横刷毛目調整とヘラ削り調整が施される。内面のヘラ削り調整は下方から左斜め上方向に向けて施されている。２は須恵器の埦である。口径12.0㎝、高台径9.6㎝、器高3.6㎝を測る。底部はヘラ切りののち高台を貼り付け接合痕をナデ消している。内底部は同心円上に広がる指ナデ調整を施している。遺物からこの住居の年代は８世紀中頃の年代が考えられよう。

Ph-28　SC-002調査状況（西から）

Ph-29　SC-002竈残存部（西から）

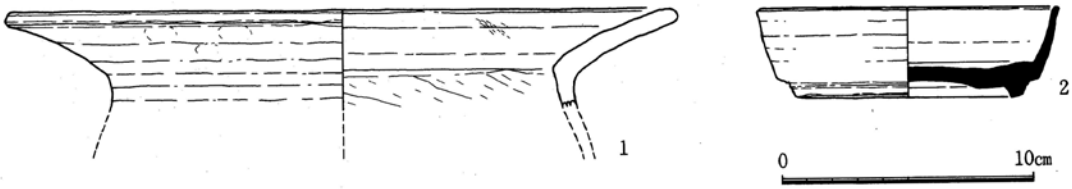


Fig-18　SC-002出土遺物実測図（縮尺1/3）

ＳＣ－００６（Fig－19）

Ａ区南側で検出した住居で、西側をSC-007に切られ南側壁の一部を撹乱によって失う。平面形は方形で3.00ｍ×3.50ｍを測る。床面は検出面からの深さ25㎝前後を測る。住居内での竈の検出はなかったが、住居南東隅部にて直径70㎝深さ20㎝前後の土坑を検出した。竈の基底部の可能性も考えられたが、焼土・白色粘土の検出はなかった。住居床面上では柱穴の検出はなかった。埋土は黒褐色土で、鳥栖ロームをブロック状に含む。遺物が住居東壁側の壁溝内より出土した。

Fig－20に出土遺物を示した。

１は須恵器の坏である。復元口径12.4㎝、底径8.3㎝、器高3.5㎝を測る。底部はヘラ切り離しされ、外底部はヘラナデによって切り離し痕を成形する。焼成は良好で、色調は暗灰褐色から黒褐色を呈する。

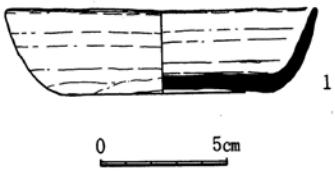


Fig-20　SC-006出土遺物実測図（縮尺1/3）

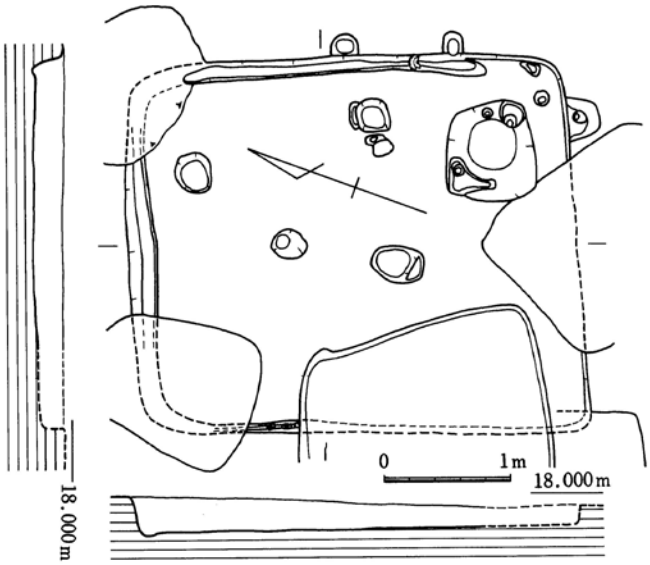


Fig-19　SC-006実測図（縮尺1/60）

Ph-30　SC-006完掘状況（北から）

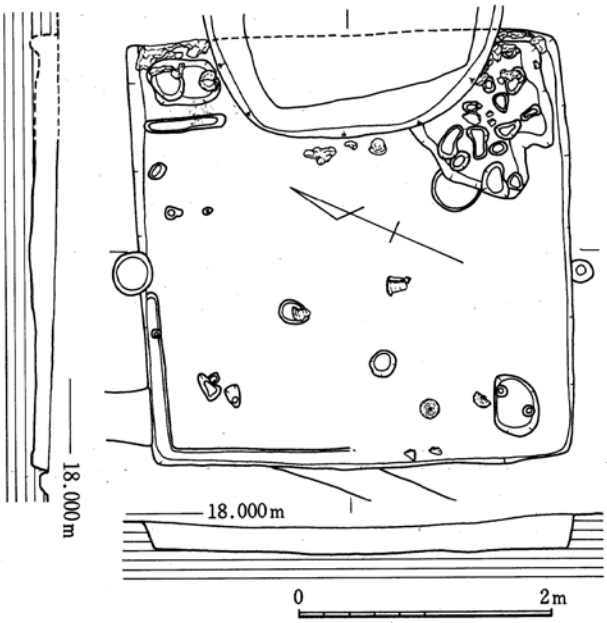


Fig-21　SC-007実測図（縮尺1/60）

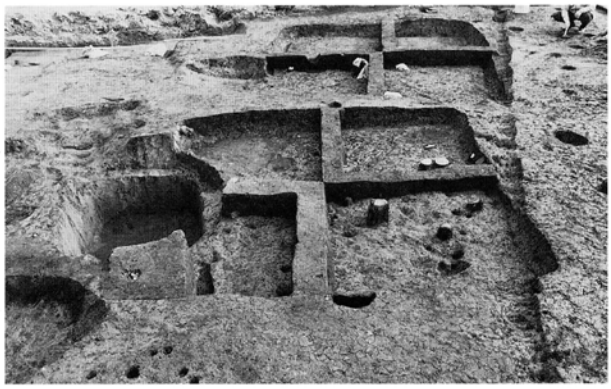
ＳＣ－００７（Fig－21）

Ａ区南側で検出した住居でSC-006を切る。平面形は方形で3.40ｍ×3.50ｍを測る。床面は検出面からの深さ20㎝前後を測る。住居内での竈の検出はなかったが、住居東側隅部の土坑内において白色粘土が多く検出されたことから、この位置に竈が付設されていたものと考えられる。住居東側壁は撹乱によって失われている。壁溝は住居西側の隅部付近のみ検出され全周はしない。床面上では柱穴は検出されず、住居外に掘削されたものと考えられる。埋土は黒褐色土で地山層である鳥栖ロームのブロックを含む。遺物は埋土中・床面上から土師器・須恵器などが出土した。

Fig－22に出土遺物を示す。

1～7は須恵器の蓋である。8～10は須恵器の埦である。1は口径13.6㎝、器高2.4㎝を測る。焼成時に歪みが生じる。ヘラナデによって成形され、摘みは接合される。口縁端部の折り返しは小さく低い。2は口径14.4㎝、器高2.0㎝を測る。体部は扁平な造りでヘラナデにより成形される。摘みは中央が突き出る宝珠型を呈する。焼成は良好で色調は淡灰褐色を呈する。3は口径14.6㎝、器高2.3㎝を測る。焼成時に歪みが生じる。体部は丸みを帯び、ヘラナデによって成形される。焼成は良好で色調は灰褐色を呈する。4は復元口径19.6㎝、器高3.6㎝を測る。体部は丸みを帯び、天井部の一部はヘラ削りされ、以下をヘラナデ成形する。口端部は断面形が三角形を呈する。5は復元口径11.6㎝、器高1.9㎝を測る。6は復元口径13.0㎝、器高2.1㎝を測る。口端部は指ナデによって最終調整される。

7は復元口径13.4㎝、器高2.1㎝を測る。ヘラナデによって成形される。8は復元口径16.0㎝、高台径9.2㎝、器高5.6㎝を測る。焼成は甘く色調は淡灰褐色を呈する。高台は断面形が台形を呈する。9は底径9.6㎝を測る。焼成は良好で色調は灰褐色を呈する。高台の断面形は方形を呈する。体部はヘラナデによって成形される。10は復元口径16.6㎝、高台径9.6㎝、器高5.1㎝を測る。焼成は甘く、色調は淡灰褐色を呈する。高台の断面形は三角形を呈する。この他には土師器甕片・?などが出土した。須恵器は焼成の良好なものと不良なものが混在して出土する。焼成不良な製品は意図的にこのような焼成をし、使用されているものと考えられるような出土状況である。



Ph-31　SC-007調査状況（北から）

Ph-32　SC-007完掘状況（西から）

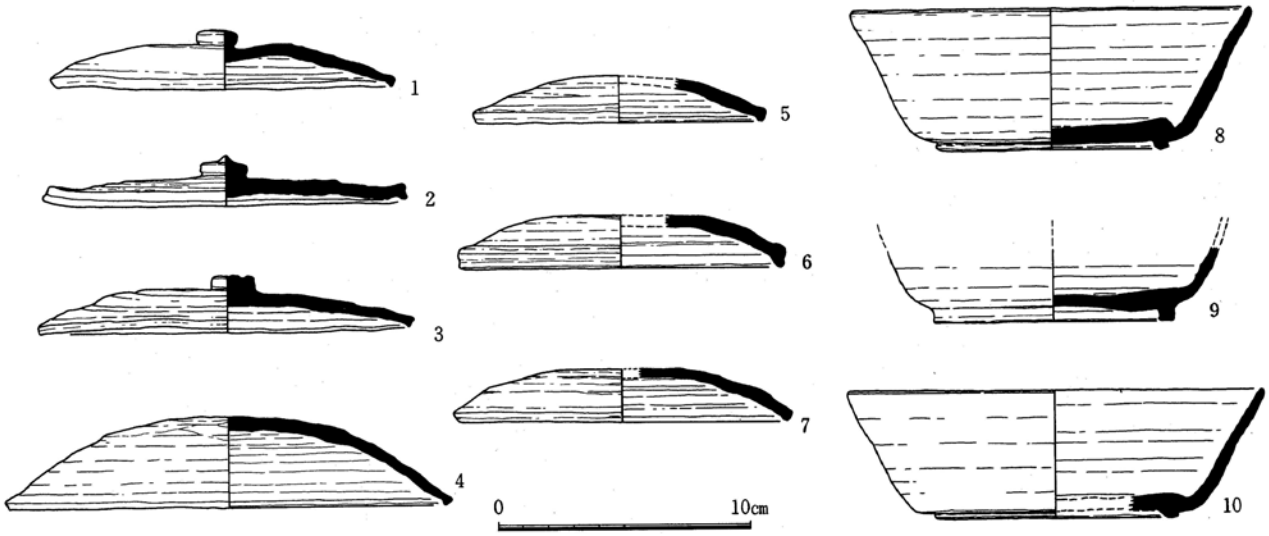


Fig-22　SC-007出土遺物実測図（縮尺1/3）

ＳＣ－０１４（Fig－23）

Ａ区中央部北側で検出した小型の住居で、西側をSC-017に切られるが、平面形は方形で2.10ｍ×1.90ｍを測る。検出面から床面までの深さは15㎝前後を測る。壁溝は住居東側壁以外を除いて掘削される。住居東側壁には張り出しがあり、竈が付設される。張り出し部は径50㎝程度で、床面より５㎝程低く掘削されている。張り出し内と周辺には白色粘土が堆積・散乱しており、これに焼土が混入する。壁面には被熱した痕跡は観察されない。竈本体はすでに破壊されており、袖・煙道は検出されなかった。床面上では柱穴は検出されず、構築時の掘削痕も確認されなかった。埋土は黒褐色土で一度に埋め戻されたのか分層できなかった。埋土中より遺物が出土した。

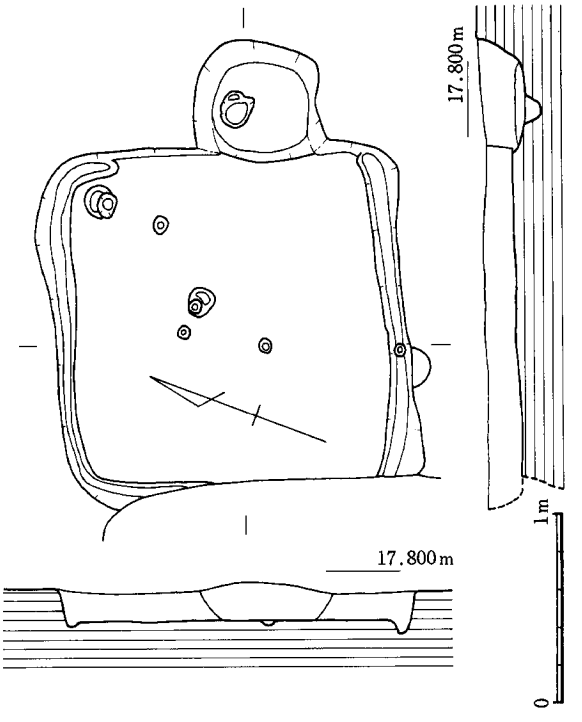


Fig-23　SC-014実測図（縮尺1/40）

Fig－25に出土遺物を示した。

１は土師器の甕である。復元口径は36.4㎝を測る。摩滅のため器面の遺存状況はわるい。外面にはわずかに縦刷毛目調整が観察できる。内面は左斜め上方向に施されたヘラ削りが観察される。２は須恵器の埦である。復元口径13.0㎝、高台径7.6㎝、器高3.7㎝を測る。体部の開きは大きく、高台は低く断面形は台形を呈する。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。３は須恵器埦の底部片である。高台径は7.8㎝を測る。高台は断面形が三角形を呈し、底部の端部近くに貼り付けられる。

ＳＣ－０１７（Fig－24）

Ａ区中央部で検出した住居である。平面形は方形で3.10ｍ×3.20ｍ以上を測る。SC-014を切り、西側はSD-009・SC-026・SC-080に切られる。この住居付近は中世の段階でSD-009掘削に伴う地下げが行われ、西側に傾斜をつけて削平されており、この住居も西側の遺存状態がわるい。床面は検出面からの深さが20㎝前後を測る。壁溝は住居北側と東側において確認された。竈は東側の壁に作り付けられていたことが白色粘土の散乱状況から推測される。竈本体は住居廃絶時に破壊されているが、壁に竈の壁体の一部が張り付いたままの状態で検出された。白色粘土の下には浅い掘り込みが検出され、この中には焼土と灰が堆積してい

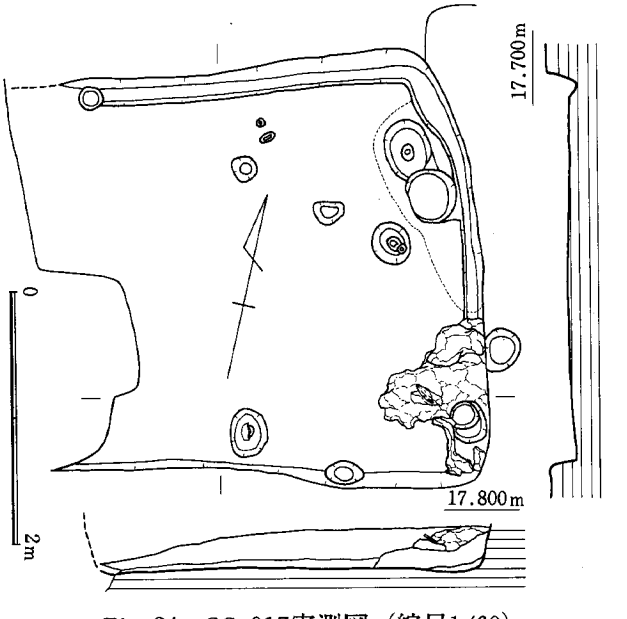


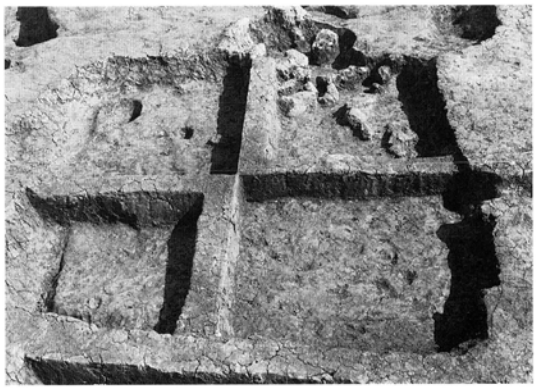
Fig-24　SC-017実測図（縮尺1/60）

た。竈の基底部と考えられる。埋土は黒褐色土で鳥栖ロームのブロックを含む。床面上では柱穴は検出されず、一次掘削痕も確認されなかった。床面上より土師器・須恵器などの遺物が出土した。

Fig－25に出土遺物を示す。

4は土師器の坏である。復元口径22.0㎝、底径19.8㎝、器高1.7㎝を測る。底部はヘラ切りで、体部はヘラナデで成形される。摩滅のため遺存状況はわるい。色調は赤褐色から褐色を呈する。

5は土師器の甕である。復元口径15.6㎝を測る。胴部最大径は復元で12.8㎝を測る。二次的な被熱のため器面は摩滅しており、赤化する。外面口縁部にかろうじて指押さえの痕跡が観察される。内面には左斜め上方向に施されたヘラ削りが観察できる。色調は外面が橙色、内面が暗褐色を呈する。胎土は小礫の混入が多くやや粗雑な印象である。



Ph-33　SC-014調査状況（西から）

Ph-34　SC-014竈検出状況（西から）

Ph-35　SC-017調査状況（西から）

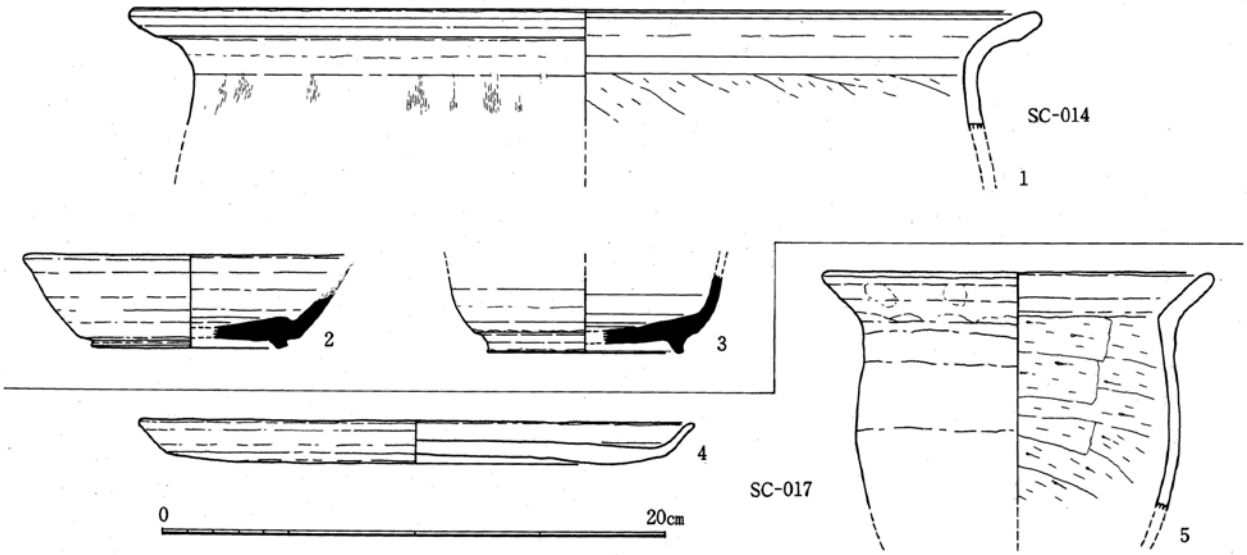


Fig-25　SC-014・SC-017出土遺物実測図（縮尺1/3）

ＳＣ－０２７（Fig－26）

Ａ区北西端部で検出した住居で、住居の一部が調査区内に入り、大半は調査区外にのびる。平面形は方形で、推定で一辺2.9ｍ前後の規模となる。検出面から床面の深さは30㎝前後を測る。住居東壁の北側に張り出しが設けられ竈が付設される。竈本体はすでに破壊されているが、白色粘土と焼土が張り出し部周辺に散乱する。床面上には炭化物の集中する箇所が２カ所確認されたが、土坑などに伴うものではなかった。現状では床面上で柱穴は検出されなかったが、住居外に柱穴を掘削するタイプの住居であろう。住居構築時の掘削痕は狭い範囲の調査で確認できなかった。この住居の南側に重複して他の住居が断面で確認できたが、調査は安全確保の面から断念せざるを得なかった。

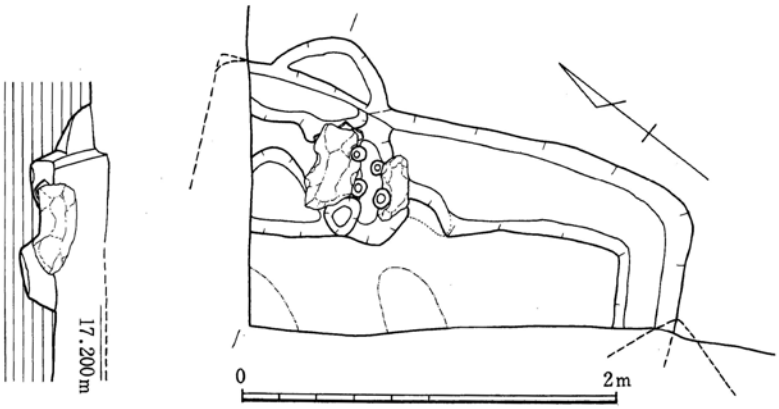


Fig-26　SC-027実測図（縮尺1/40）

Fig－28に出土遺物を示した。１は土師器の甕である。復元口径25.0㎝を測る。２は土師器の坏である。底径は10.8㎝を測る。３は土師器の埦である。高台径は8.4㎝を測る。高台は底面端部に貼り付けられる。４は土師器埦である。高台径は8.0㎝を測る。高台は断面形が三角形を呈する。５は土師器埦の高台部片である。高台径は7.2㎝を測る。

Ph-36　SC-027完掘状況（東から）

Ph-37　SC-027完掘状況（南から）

ＳＣ－０３１・ＳＣ－０３２（Fig－27）

Ａ区北際で検出した重複する住居である。両住居の順序はSC-031→SC-032の順に南西方向に50㎝ずらして、ほぼ平行するように構築される。検出面から床面の深さはSC-031が30㎝、SC-032が50㎝を測る。平面形はともに方形を呈するが、住居の大半が調査区外に位置するため、正確な規模は不明であるが、SC-031が一辺2.85ｍ、SC-032が一辺2.80ｍを測る。竈は両住居ともに調査区内では検出されなかった。他の平行する住居から推測して東側壁の北側に作り付けで付設されているものと考えられる。埋土はともに黒褐色土で鳥栖ロームのブロックが混入する。床面上では白色粘土・焼土の散乱は見られず、柱穴も検出されなかった。掘削痕は確認されず、構築時にはほぼ平坦に掘削されたものと考えられる。

Fig－28に出土遺物を示す。

6は土師器の甕である。復元口径22.0cmを測る。口縁部下に煤が付着する。7は須恵器の蓋である。天井部にはヘラ切り痕が残る。焼成は良好で色調は灰褐色を呈する。8は土師器の甕である。復元口径は31.0cmを測る。摩滅が激しく調整はほとんど消滅する。色調は橙色を呈する。9は須恵器の埦である。復元口径13.0cm、高台径9.0cm、器高3.7cmを測る。高台は断面が方形で、体部は端部でわずかに外反する。色調は灰褐色を呈する。

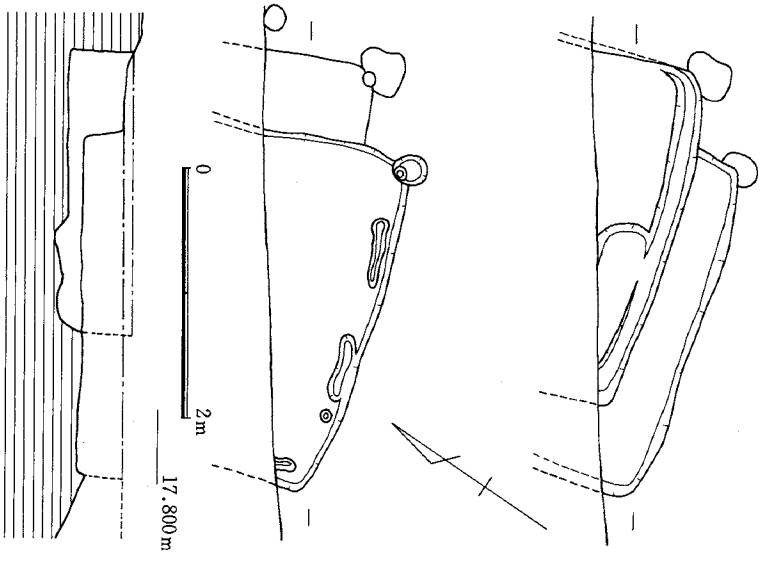


Fig-27　SC-031・SC-032実測図（縮尺1/60）

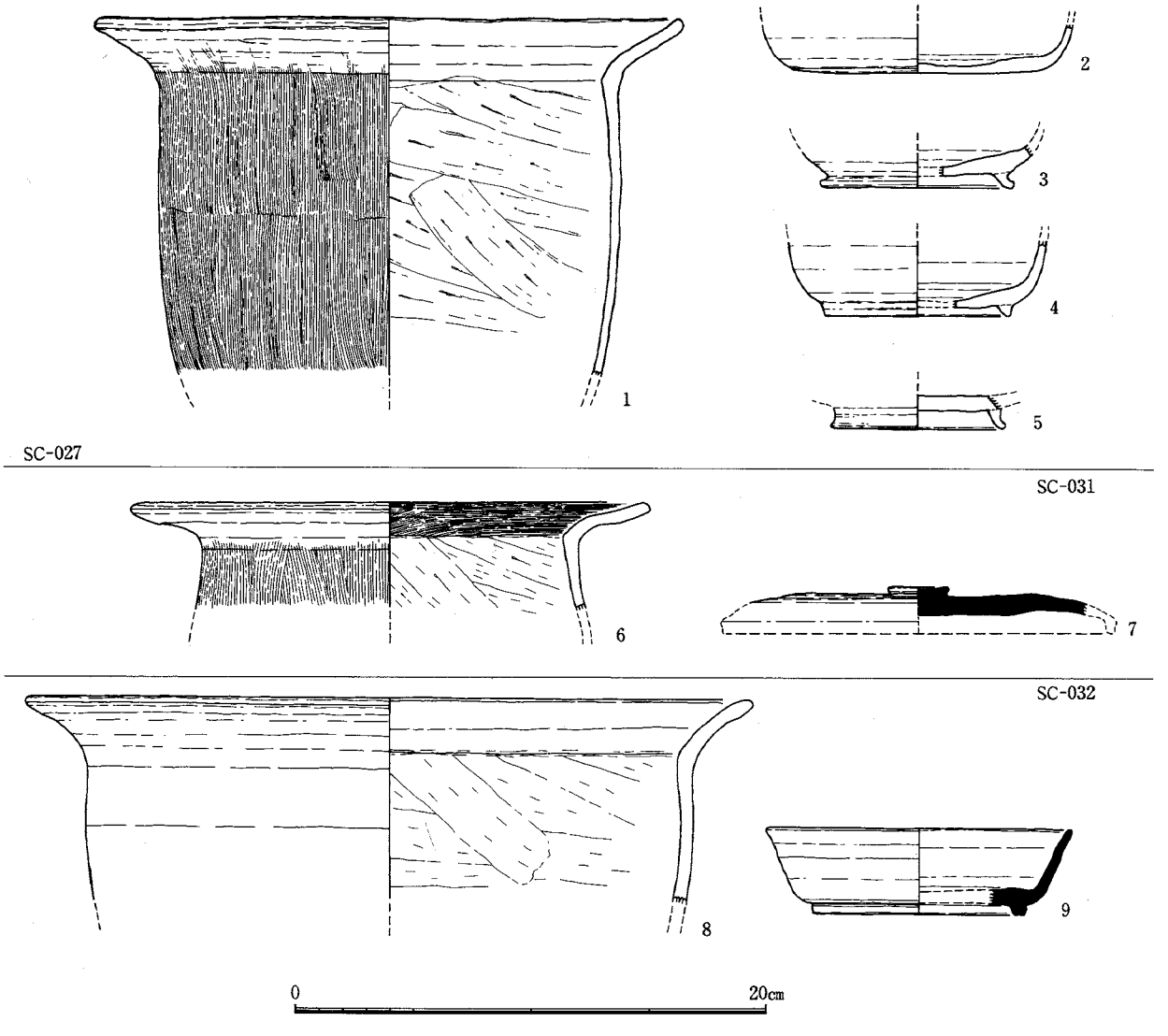


Fig-28　出土遺物実測図（縮尺1/3）

SC－026・028・029・080・083（Fig－29）

A区北西部で検出した住居群である。中世の溝SD-009に中央部を切られ、住居の重複も激しく平面プランを全体的に検出できたものはない。各住居の簡単な説明を述べる。

SC－026

SD-009に西側の大半を切られ、SC-017を切る方形住居で、残存する東側壁一辺が2.60mを測る。住居東側壁に張り出しを持ち、白色粘土を用いて竈を付設する。竈本体は廃絶時に破壊されている。検出面から床面までの深さは30cm前後を測り、床面上には白色粘土が散乱する。張り出し部は住居床面より10cmほど高く、煙道方向に向かって緩やかに高くなる。床面上では柱穴は検出されず、構築時の一次掘削は壁周囲から行われる。床面上から遺物が出土した。

Fig－31に出土遺物を示す。

1は須恵器の蓋である。竈の左袖部分から出土した。竈祭祀用の土器か。完形品で口径は16.6cm、器高1.8cmを測る。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。口端部はヘラナデによって段を作る。2は土師器の椀である。高台径10.4cmを測る。高台の断面はつぶれた方形を呈し、底面端近くに貼り付けられる。色調は淡褐色を呈する。3は土師器の甕の口縁部片である。復元口径29.4cmを測り、器面調整は摩滅して観察できない。

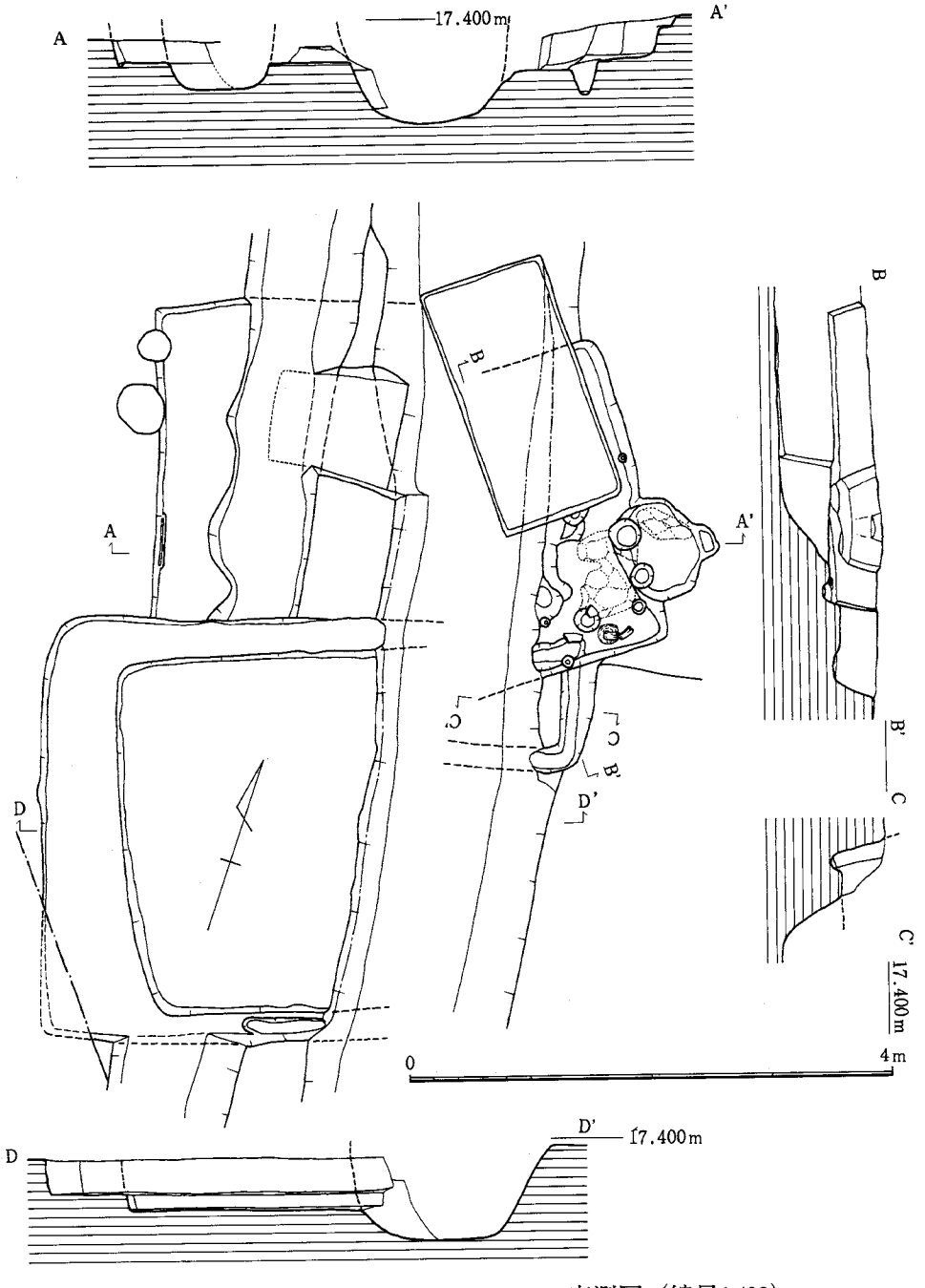


Fig-29　SC-026・028・029・080・083実測図（縮尺1/60）

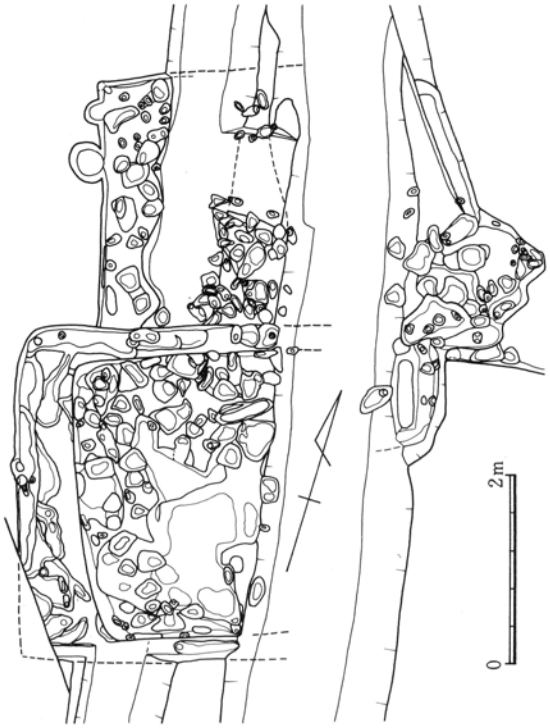
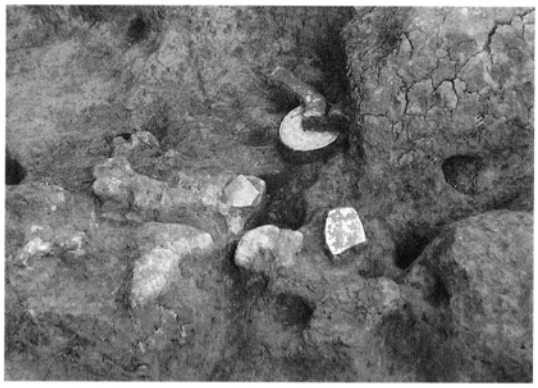


Fig-30　完掘状況実測図（縮尺1/80）

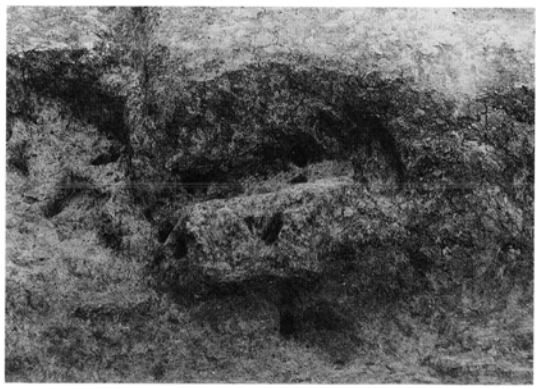
Ph-38　SC-026調査状況（西から）

Ph-39　SC-026・080完掘状況（西から）



Ph-40　SC-026遺物出土状況（西から）

Ph-41　SC-026・080調査状況（西から）



Ph-42　SC-080完掘状況（西から）

Ph-43　SC-028・083調査状況（東から）

ＳＣ－０２８

住居中央から東側をSC-080・SD-005に切られ、北側と西側壁の一部が残存する。現状では平面形が方形を呈し、一辺3.55ｍを測りやや大型の住居になる。検出面からの床面の深さは28㎝前後を測る。壁溝は南側壁部分のみで検出され床面からは深さ５㎝程度を測る。床面上では柱穴・白色粘土などは確認されなかった。東側が完全に消滅していることから推測でしかないが、東側壁に作り付けで竈は付設されていたものと考えられる。構築時の掘削は壁周囲から行われている。埋土から遺物が出土した。Fig－31に出土遺物を示した。４は須恵器の壺の口縁部片である。復元口径は24.4㎝を測る。口縁部はヘラナデと指ナデで成形・調整される。５は須恵器の壺の口縁部片である。口縁部直下から頸部上部までの破片で、外器面には波状文が施される。６は須恵器の甕の胴部片である。外面にはほぼ横位に施された掻き目痕が観察される。内面には青海波紋の叩き目が良好に残る。

ＳＣ－０２９

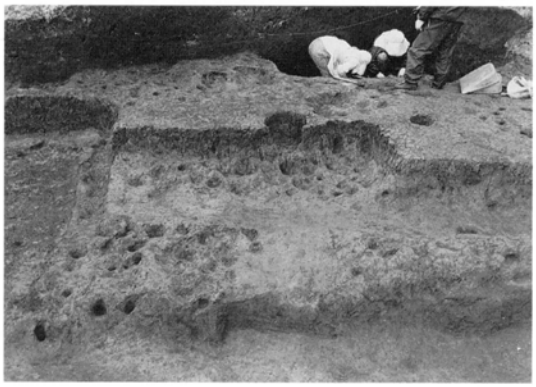
南側をSC-028、中央部と北側をSD-005とSD-009によって切られる。西側壁と北側壁の一部が残存する住居でSC-028・SC-080にほぼ並行・重複するように構築される。現状で西側壁が2.6ｍを測る。復元でも一辺3.0ｍ以下の規模の住居となる。床面は検出面から深さ20㎝を測る。SD-005とSD-009によって切られ島状に残存する床面北側で焼土が検出されたが、竈の痕跡などは確認できなかった。消失した東側壁に竈は付設されていたと考えられる。床面上では柱穴は検出されない。構築時の掘削は床面全面で確認でき、ほぼ平坦に掘削されたことが想定される。Fig－31に出土遺物を示した。７は須恵器の蓋である。復元口径は16.0㎝、器高2.7㎝を測る。焼成不良で遺存状態はわるく、色調は淡褐色を呈する。８は須恵器の埦である。復元口径15.8㎝、復元高台径9.2㎝、器高5.0㎝を測る。体部は直線的に広がり、高台の断面形は台形を呈する。焼成不良で色調は淡灰褐色を呈する。高台は底面の端部近くに貼り付けられる。

ＳＣ－０８０

南東隅部の壁と壁溝のみが残存する住居で、大半はSD-009とSC-026に切られる。検出時はSC-029の南東隅部とも考えられたが、床面の高さが異なること、SC-026の北側で住居の続きが検出されなかったことからSC-026とは別の小型住居と判断した。検出面から床面までの深さは45㎝を測る。これらの住居群は西側に傾斜する地点に構築されており、竈は東側方向に向かって付設される傾向にある。現状では柱穴・竈の存在は不明である。一辺が2.2ｍ前後の規模をもつ住居に推定される。

ＳＣ－０８３

SC-028内にこれと重複して構築された住居で、平明形は方形で一辺が3.0ｍを測る。東側はSD-009に切られ消滅する。SC-028とは軸を少しずらして構築される。検出面から床面までの深さは46㎝前



Ph-44　SC-029完掘状況（東から）

Ph-45　SC-029完掘状況（南から）

後を測り、SC-028の床面からは20cmほど掘り下げられる。床面東側で白色粘土と焼土が検出された。構築時の掘削は中央部を最初に掘り下げるタイプである。

これら住居群と溝の埋土からどの住居に伴うものなのか不明な遺物が出土した。Fig－31に出土遺物を示した。9は須恵器の高坏の脚部片である。焼成は良好で色調は灰褐色を呈する。10は平瓶の胴部片である。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。胴部はナデ成形される。

これらの住居群の構築順序は検出状況よりSC-029→SC-028→SC-080→SC-083→SC-026の順番が考えられる。これらの住居群の埋土はほぼ黒褐色土の単層で、廃絶した住居を意識して短期間のうちに再び同じような場所に構築されたことが調査成果より推測できる。

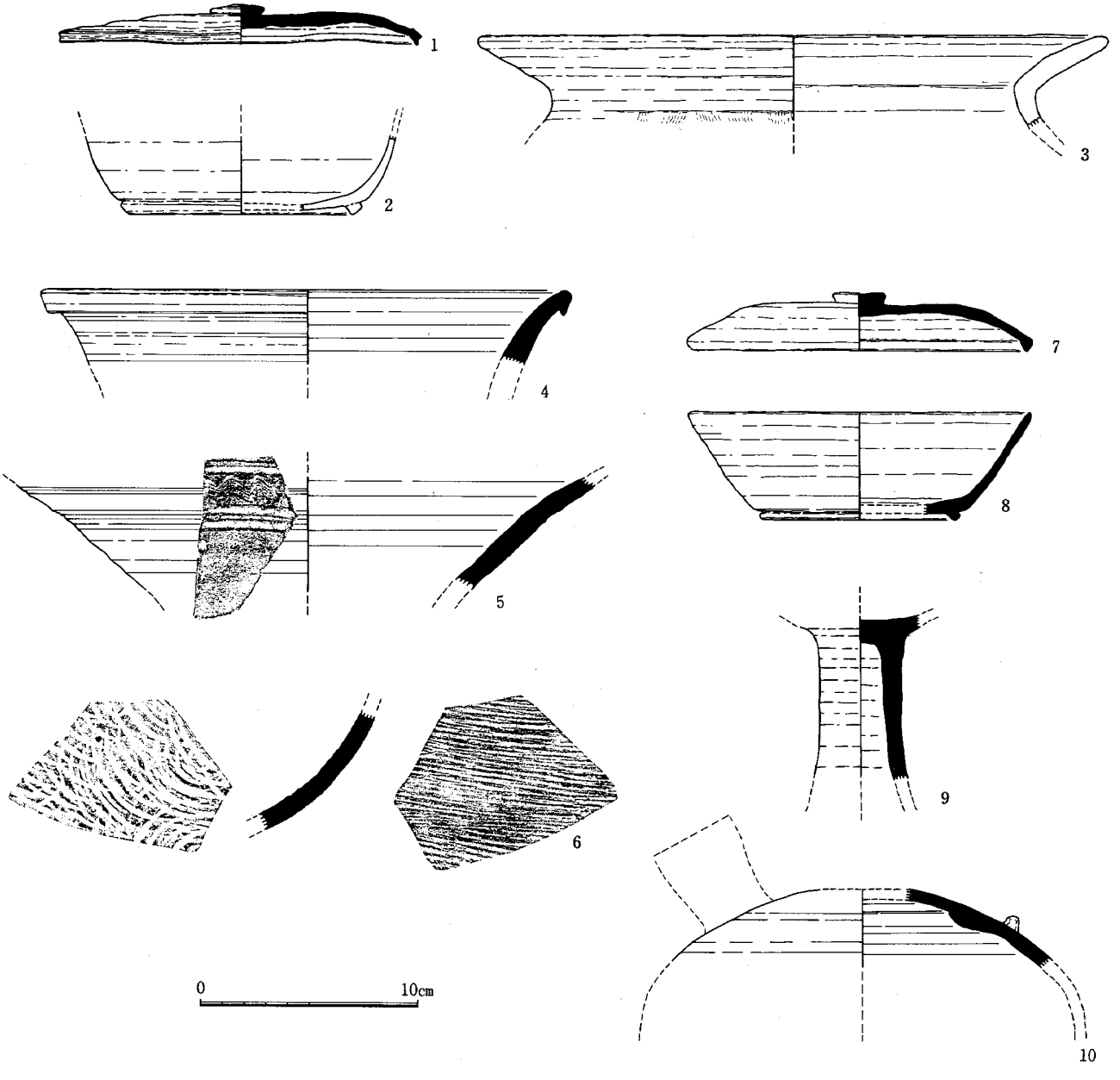


Fig-31　出土遺物実測図（縮尺1/3）

ＳＣ－０３７・０３８・０３９・０４０・０７９（Fig－32）

Ａ区北側で検出した住居群である。北側が調査区外になり安全確保のため調査区拡張が不可能であり、調査区内にかかる部分のみ調査を行ったため、住居全体を把握できた住居はない。

ＳＣ－０３７

SC-040の竈の張り出しによって西側隅部を破壊される。検出できたのは南側壁と東側壁の一部である。現状で一辺が2.8ｍ以上を測る。検出面から床面までの深さは60㎝前後を測り、床面は他の住居を切り込む。他の住居とはわずかに軸を異にするように重複して構築される。SC-079とはほぼ並行している。現状では竈は検出されなかったが、東側に付設されたものと考えられる。壁溝・柱穴は検出されなかった。床面上より遺物が出土した。Fig－37に出土遺物を示した。

１は須恵器の埦である。口径13.6㎝、高台径9.6㎝、器高3.9㎝を測り、底部に墨書とヘラ記号を持つ。墨書は「十」の文字で、ヘラ記号も十文字に刻まれる。高台の断面は方形を呈し、底面端部近くに貼り付けられる。２は須恵器の埦の胴部片である。復元口径は12.6㎝を測る。焼成不良で色調は淡灰褐色を呈する。体部は直線的に開き、口縁部がわずかに外反する。

ＳＣ－０３８（Fig－３３）

南側壁と東側の壁の一部が検出された住居である。北側はSC-037とSC-079によって切られ、東側はSC-040によって消滅する。現状では一辺3.8ｍを測り、ほぼ方形を呈する。壁溝は南側壁際で部分的に検出された。検出面から床面までの深さは36㎝を測る。床面上では柱穴・白色粘土は検出されなかった。竈は東側壁に付設されていたものと考えられる。住居の南側隅部で土坑を検出した。この土坑からは土師器・須恵器などが出土した。完形品はなく破損品を廃棄したものと考えられる。

Fig－37に出土遺物を示した。３は須恵器の埦である。口径12.0㎝、高台径8.2㎝、器高3.8㎝を測る。焼成は良好で色調は濃灰褐色を呈する。高台の断面は方形を呈し、底面に貼り付けられる。

Ph-46　SC-037・038・039・040・079完掘状況（東から）

4は須恵器の椀ある。口径13.4㎝、高台径9.0㎝、器高4.6㎝を測る。焼成不良で色調は淡灰褐色を呈する。高台の断面形は台形を呈し、底面の端部近くに貼り付けられる。

ＳＣ－０３９

北側をSC-038・SC-079に切られる住居で、平面形は方形を呈する。残存する南側壁で一辺2.9ｍを測る。検出面から床面までの深さは30㎝前後を測る。壁溝は検出部分では全周する。壁溝内に床面か

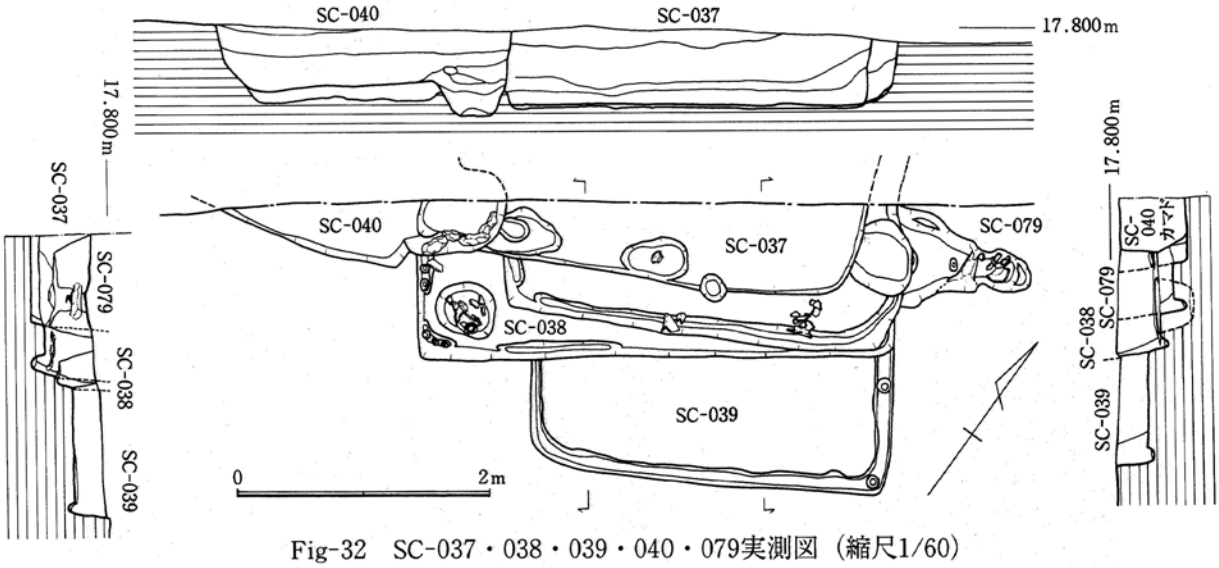


Fig-32　SC-037・038・039・040・079実測図（縮尺1/60）

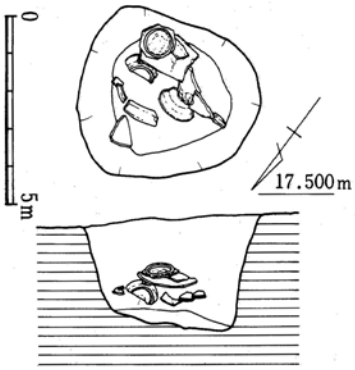


Fig-33　SC-038西側土坑実測図（縮尺1/20）

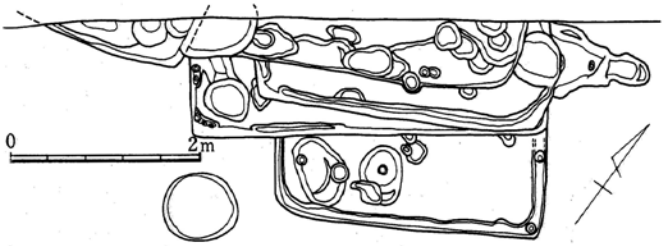


Fig-34　完掘状況実測図（縮尺1/80）

Ph-47　SC-038西側土坑（北から）

Ph-48　住居群検出状況（西から）

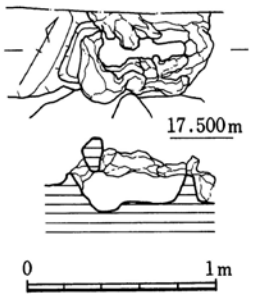


Fig-35　SC-040竈実測図（縮尺1/40）

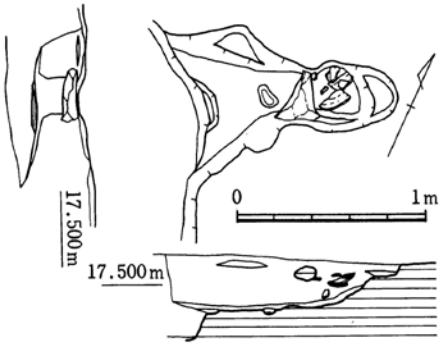


Fig-36　SC-079竈実測図（縮尺1/40）

Ph-49　SC-040竈検出状況（西から）

Ph-50　SC-079竈検出状況（西から）

らの深さ20㎝の土坑が並んで検出されたが、これが上屋構造に伴うものかは分からなかった。構築時の掘削は壁際から行われている。遺物は細片のみが出土したが図示できなかった。

ＳＣ－０４０（Fig－35）

南側壁と東川壁の竈の張り出し部のみ検出できた住居で、他の住居を切り込むように構築される。検出面から床面までの深さは40～50㎝を測る。壁溝は調査部分では検出されなかった。この住居も構築時の掘削は壁際から行われていた。住居の東側の南側隅部近くに張り出し部をもち、竈が付設される。竈前面は廃絶時に破壊されており、袖などは検出されなかったが、煙道部分は残存していた。張り出し部は床面より15～20㎝程度掘り下げられ、煙道入り口には５㎝程の高まりを残す。煙道の天井部は残存しておらず、白色粘土が貼り付けられた壁体と底部が検出された。煙道内部には焼土と灰が堆積しており、底部は一部被熱のため硬化する。煙道出口付近は特に被熱が激しく赤化する。焼土と灰は住居廃絶時に竈封じのために充填されたものと考えた。他の住居の埋土中に竈が構築されているため、壁体が脆弱であり白色粘土を煙道部にも貼り付けたのであろう。遺物は住居の埋土から少数が出土した。出土遺物をFig－37に示す。

５は須恵器の埦である。復元口径15.6㎝、復元高台径11.0㎝、器高4.1㎝を測る。高台の断面は方形を呈し、体部は緩やかに外反する。焼成は良好で色調は暗灰褐色を呈する。６は土師器の甕である。竈壁体である白色粘土内より出土した。復元口径は24.8㎝、胴部最大径は26.0㎝を測る。焼成は良好で、色調は淡赤褐色から橙色を呈する。器面調整は外面に縦刷毛目調整、内面にはヘラ削りが施される。ヘラ削りは胴部下位では上方へ、上位では横方向に施される。刷毛目に用いられた板材の幅は３～４㎝程度のもので刷毛目の幅は広めのものである。口縁端部は指ナデが施され、刷毛目調整がナデ消される。口縁部内面には横刷毛目調整が施される。

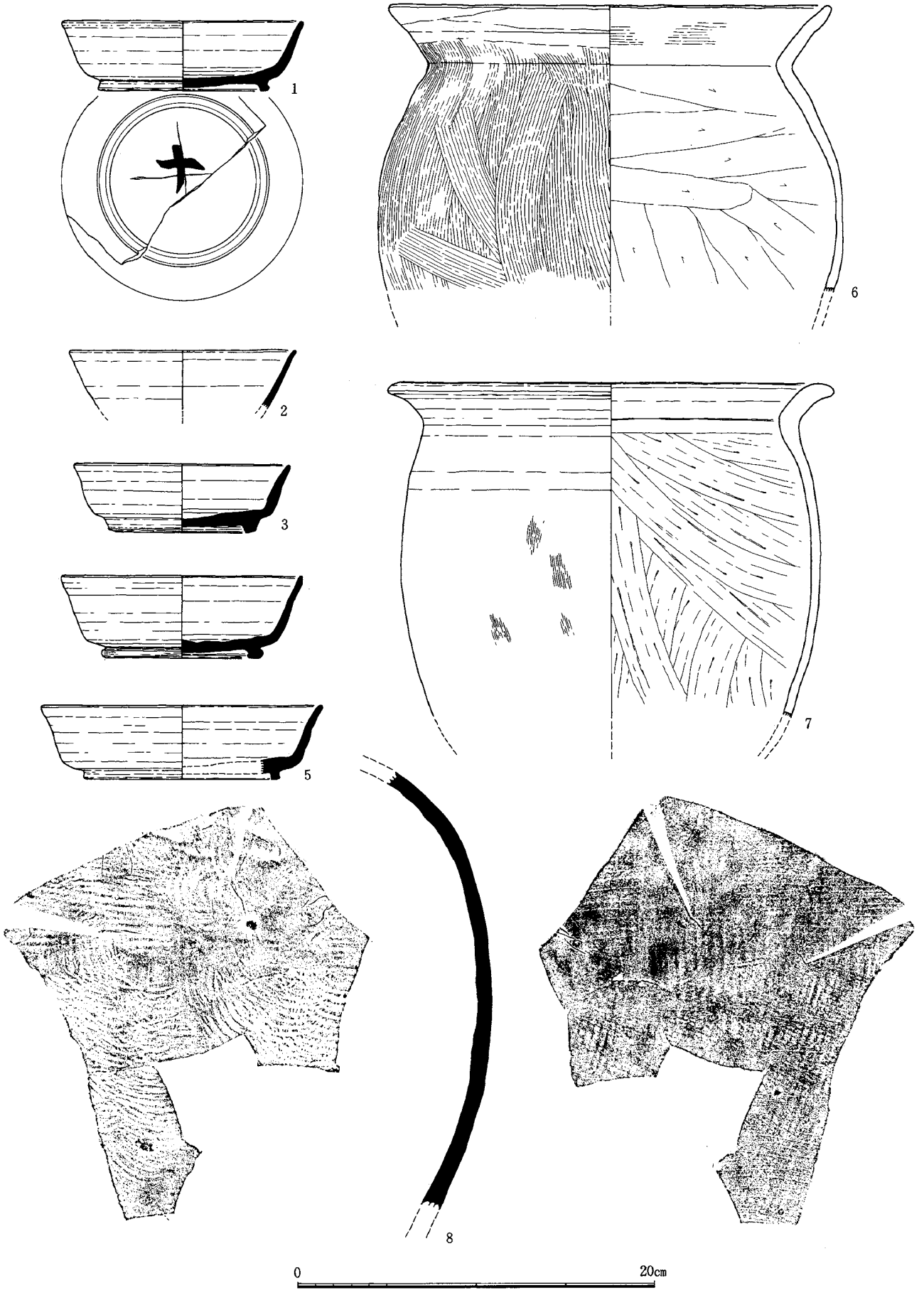


Fig-37　出土遺物実測図（縮尺1/3）

ＳＣ－０７９（Fig－36）

SC-038に切り込み、SC-037に切られる住居で、平面形は方形を呈し、現状で一辺が3.0ｍを測る。南側壁と東側壁の一部が残存し、東側壁の東南隅部近くに張り出しを持つ竈が付設される。壁溝は南側壁際にのみ確認された。検出面から床面までの深さは40cm程度を測る。竈の張り出しの底面は住居の床面より15cmほど高く、煙道方向に向かって高くなる。竈前面には10cm程度の掘り込みがあり、この上に白色粘土で竈の壁体が構築されていたものと考えられる。竈本体は住居廃絶時に破壊されており、床面上には白色粘土・焼土が散乱する。煙道内には竈祭祀に用いられた甕の破片などが埋置されており、天井の一部が陸橋状に残存する。炭化物と焼土が埋土中に多く混入する。住居構築時には壁際より掘削される。床面上・竈煙道内部より遺物が出土した。

Fig－37に出土遺物を示す。７は煙道部より出土した土師器の甕である。復元口径は25.0cm、胴部最大径は23.4cmを測る。焼成は良好で、色調は橙色から淡赤褐色を呈する。外器面は摩滅しているため、器面調整のほとんどが観察できないが、わずかに縦位の刷毛目調整が見られる。内面は下位から上位へのヘラ削りを施したあと、下方へのヘラ削りを重複させて施している。口縁部はナデ調整が施される。

これらの住居群の構築順序は検出状況よりSC-039→SC-038→SC-079→SC-037→SC-040 の順が復元できる。これらの住居群も、住居の主軸を南側にわずかにずらしながら重複するように構築される。住居廃絶後の踏みしまっていない軟質の場所に意図的に住居を構築するためには、以前の住居の床面よりも深く掘削しなければならず、同じ場所に建て替えるための労働力を考慮すると、様々な規制を受ける生活環境と社会体制を垣間見ることができよう。

ＳＣ－０３４・０３５・０３６（Fig－38）

Ａ区中央部北側で検出した住居群で３軒の住居が重複する。検出時は住居２軒の切り合いと考えていたが、掘り下げ途中に３軒目の住居隅部が検出された。以下に各住居の説明を述べる。

ＳＣ－０３４

SC-035・SC-036の両住居を切る住居で、平面形は方形を呈する。規模は2.60ｍ×2.80ｍを測り、検出面から床面までの深さは40cm前後を測る。壁溝は南側隅部を除いてほぼ全周する。住居西側壁の中央より南側による箇所に張り出し部があり竈が付設されていた痕跡が確認できる。埋土は上層からロームブロックを多く含む黒褐色土、黒褐色土・貼床である鳥栖ローム土層の順に堆積する。貼床は部分的に厚く貼られる部分もあるが、平均すると５cm前後である。構築時の掘削は住居中央部から周囲を掘り広げるタイプであった。竈の張り出しは住居西壁の南寄りの箇所に設けられていた。竈本体は廃絶時に破壊され、詳細は不明であるが、右袖部分の白色粘土は残存してい

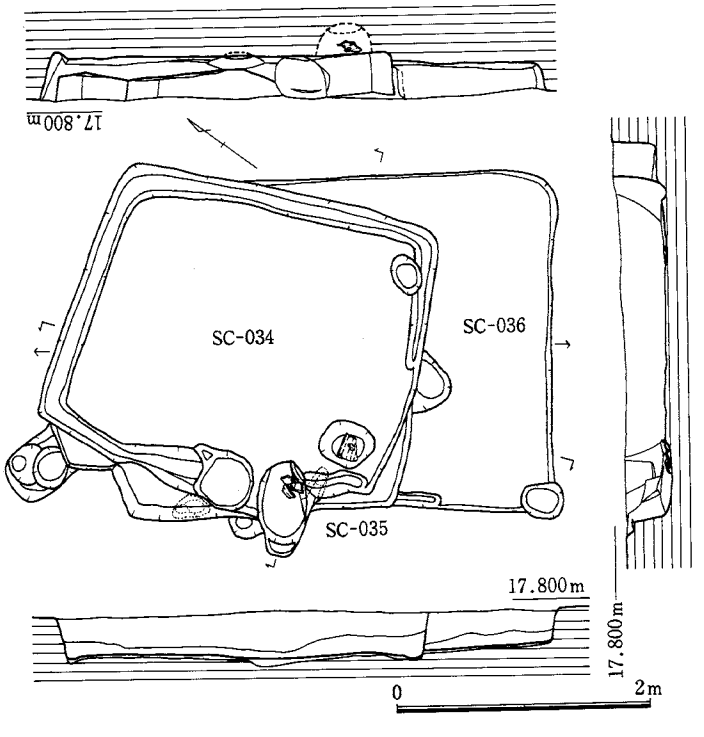


Fig-38　SC-034・035・036実測図（縮尺1/60）

た。竈基底部・床面より遺物が出土した。

Fig－40に出土遺物を示した。1は須恵器の蓋である。口端部は欠損している。摘みは宝珠型を呈し、天井部に貼り付けられる。天井部の一部にヘラ削り痕が観察される。焼成はやや不良で、色調は淡灰褐色を呈する。2は須恵器の埦である。復元口径13.8㎝高台径9.8㎝、器高4.8㎝を測る。高台の断面は三角形を呈する。焼成良好で色調は濃灰色を呈する。3は須恵器の埦である。復元口径14.6㎝、高台径11.4㎝、器高4.8㎝を測る。高台の断面形は台形を呈し、底面端部に貼り付けられる。

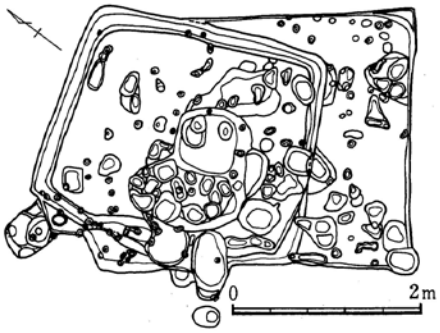
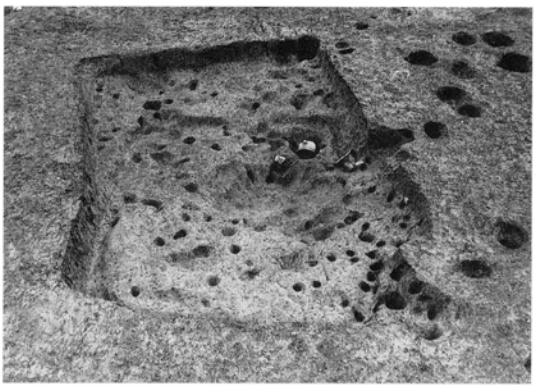
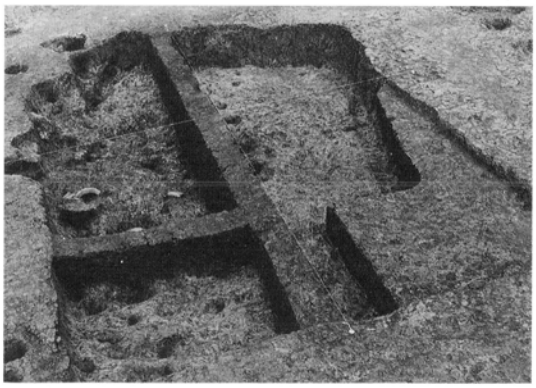


Fig-39　完掘状況実測図（縮尺1/80）

やや様相の新しいもので焼成は良好、色調は黒灰色を呈する。4は須恵器の甑である。復元口径26.0㎝を測り、底部は欠損する。ヘラナデにより成形され、把手は指押さえで接合される。焼成良好で色調は淡灰褐色を呈する。4は床面の土坑より出土しており、SC-035に伴う可能性も考えられる。5は土師器の甕である。復元口径27.8㎝を測り、底部は欠損する。遺存状態は良好で器面調整が明確に観察できる。外面は縦刷毛目調整が重複するように施され、内面には時計回り方向に施されるヘラ削りが観察できる。被熱のため胴部・口縁部下が赤化する。焼成は良好で色調は淡赤褐色を呈する。6は土師器の移動式竈である。復元底径25.8㎝を測り、上半部は欠損する。外面には縦刷毛目調整が施され、内面はヘラ削りで器面調整を行う。焚き口部は遺存していないため詳細は不明である。


Ph-51　SC-034・035・036完掘状況（北から）

Ph-53　SC-034・035・036調査状況（南から）


Ph-52　SC-034・035・036調査状況（南から）

Ph-54　SC-034・035・036遺物出土状況（北から）

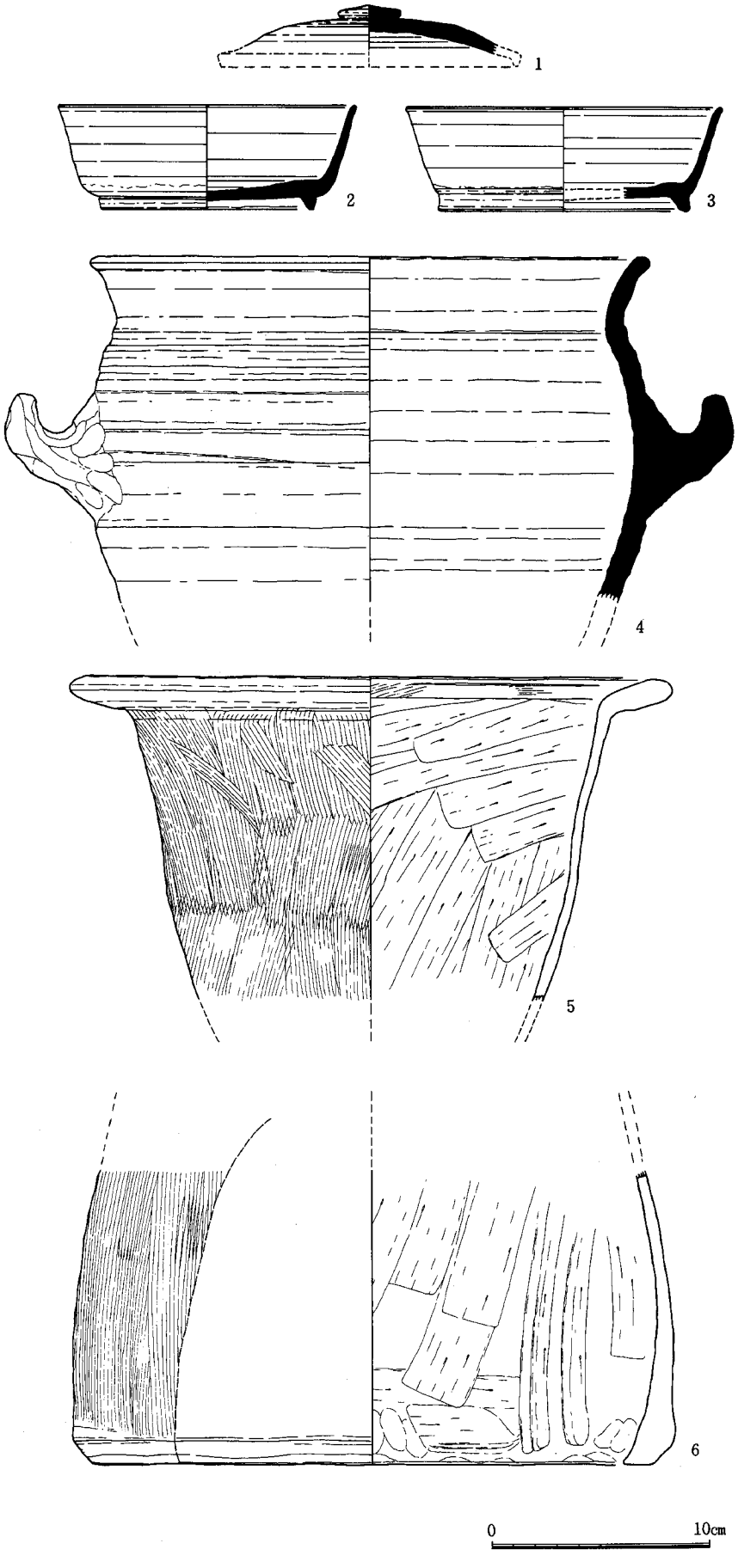


Fig-40　出土遺物実測図（縮尺1/3）

ＳＣ－０３５

SC-034に大半を切られ、SC-036を切る住居で、住居の東側隅のみが検出された。床面のほとんどはSC-034によって掘りとばされているが、残存する部分で検出面から床面までの深さは20㎝前後を測る。東側壁に白色粘土が張り付いた状態で検出され、付近に竈が付設されていた可能性が考えられるが、移動式竈がこの住居のものであれば、竈は付設されず、住居床面上に掘り込んだ土坑上に据えて竈の代用としたものと考えられる。この住居の平面形は現状では方形に復元され、規模はSC-034と同程度の住居であろう。遺物はSC-034出土のものと分離することができなかったため、一括でFig－40に図化した。

ＳＣ－０３６

SC-034・035の両住居に切られるこの住居群では最も古い住居である。北側半分を両住居に切られるため正確な規模は把握できないが、残存する南側壁で一辺が2.6ｍを測る。

検出面から床面までの深さは30㎝前後を測る。埋土はSC-034と同様に上層がロームブロックを含む黒褐色土、下層が黒褐色土の単純層、貼床である鳥栖ローム土の順に堆積する。住居の大半が失われていることもあり、竈の有無・付設位置は判明しなかった。構築時の掘削はほぼ平坦に行われていた。遺物は細片のみが出土し、図化できなかった。

これらの住居群の構築順序は検出状況からSC-036→SC-035→SC-034 の順が復元できよう。検出状況から、この住居群は東側に竈を付設するタイプであることが分かる。東側壁に竈を付設する住居は本調査地点においても３軒しか検出してされていないことから、特定の時期に構築された住居として捉えることもできよう。

ＳＣ－０９３（Fig－41）

Ｂ区南側際で検出した住居で、弥生時代の住居であるSC-094の埋土の中に構築された住居である。平面形は方形で、規模は現状で一辺3.4ｍを測る。南側が調査区外に位置するため住居全体の正確な規模は把握できなかった。検出面から床面までの深さは40㎝を測る。壁溝は現状ではほぼ全周し、床面からは深さ５㎝前後を測る。床面上では竈の痕跡・柱穴は検出できなかった。埋土は黒褐色土の単純層で堆積状況より一度に埋め戻されたように考えられる。埋土中には白色粘土・焼土の混入は認められない。床面上に逆位の状態で土師器の埦が出土した。Fig－42に出土遺物を示した。１は土師器の埦である。口径19.4㎝、高台径11.8㎝、器高5.5㎝を測る。高台の断面形は台形を呈し、底面の端部近くに貼り付けられる。焼成は良好で色調は橙色を呈する。底部には板目圧痕が観察される。

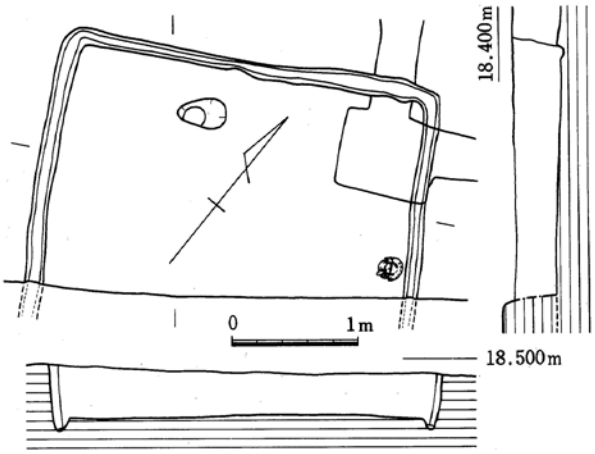


Fig-41　SC-093実測図（縮尺1/60）

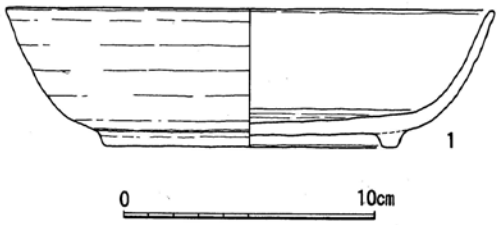
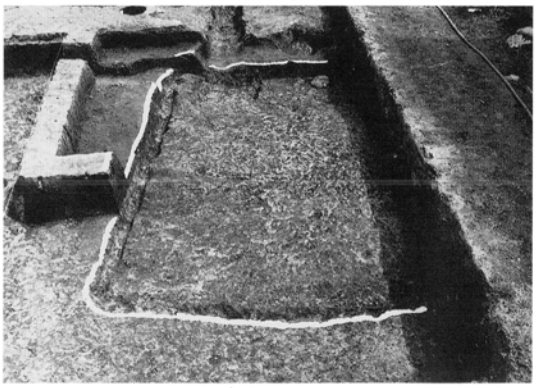


Fig-42　SC-093出土遺物実測図（縮尺1/3）



Ph-55　SC-093完掘状況（西から）

Ph-56　SC-093完掘状況（北から）

ＳＣ－０９５（Fig－43）

Ｂ区中央部南側で検出した住居で、東側壁の一部をSC-096に切られる。平面形は方形で規模は3.15ｍ×3.18ｍを測る。検出面から床面までの深さは50㎝前後を測る。壁溝は住居東側隅部付近のみで検出された。床面上では柱穴は検出されず、この住居も壁外に上屋構造を設けるタイプのものであろう。住居東側壁の南寄りの箇所に張り出しを持ち、そこに竈を付設する。竈本体は廃絶時に破壊されており、構造を明らかにするものは残っていないが、張り出し部付近には白色粘土と焼土が散乱する。張り出し部は底面から高さ30㎝のところに段を有しており、これが煙道の底部になるものと考えられる。白色粘土は厚さ20㎝ほど堆積しており、これを除去すると竈の基底部の掘り込みが検出された。掘り込みは住居床面より５㎝程で焼土と灰が薄く堆積する。住居の埋土中より土師器の甑が出土したが、住居埋没途中の廃棄品であり、この住居の直接的な時代を指し示すものではない。埋土は上層よりロームブロックを含む黒褐色土、炭化物を多く含む暗褐色土、黒色土、壁際に三角堆積する黒褐色土、貼床である鳥栖ローム土と分層する事ができる。土師器甑は黒色土層上に据え置かれた状態で検出された。構築時の掘削は西側から行われており、床面西側が凸凹になるのに対し、東側はほぼ平坦に掘削されている。掘削は北側部分が最も深く行われており、

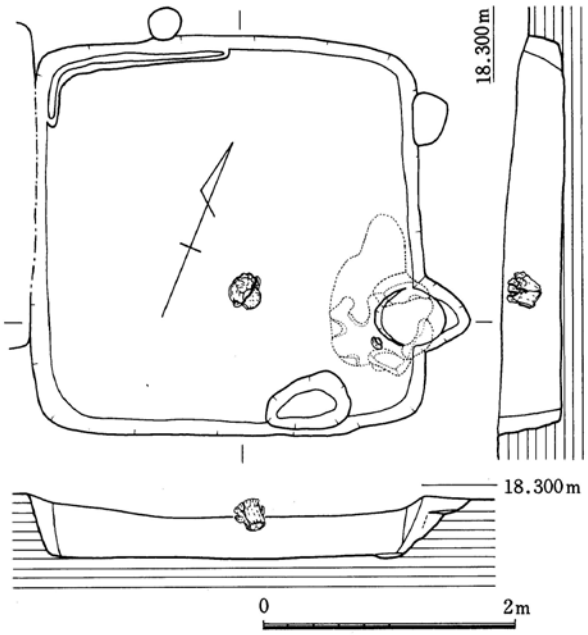


Fig-43　SC-095実測図（縮尺1/60）

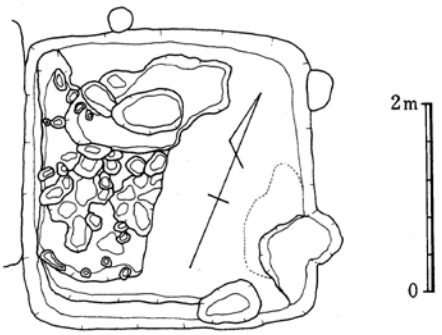


Fig-44　SC-095完掘状況実測図（縮尺1/80）

Ph-57　SC-095調査状況（西から）

この部位から行われたことが想定されよう。埋土中・床面上から遺物が出土した。出土遺物をFig－45に示した。１は土師器の甑である。完形品で 口径は21.0㎝、底径14.8㎝、器高20.0㎝を測る。外面胴部中程には把手が２ヶ所貼り付けられる。器壁は薄く５㎜前後を測る。内面底部には突起状の桟が２ヶ所設けられており、簀の子状の敷物を載せて使用したものと考えられる。焼成良好で色調は暗褐色から淡橙色を呈する。２・３は土師器の甕である。復元口径はそれぞれ25.6㎝、25.4㎝を測る。２は頸部下から縦刷毛目調整が施され、口縁部はナデ調整が施される。内面はヘラ削り調整が施され、色調は橙色を呈する。外面口縁部下には被熱の痕跡があり、黒班が観察される。３は口縁部を指押さえ・ナデ調整で成形した後に縦刷毛目調整が施される。内面には反時計回り方向のヘラ削りが施される。焼成は良好であるが、遺存状態はわるく器面調整は摩滅する。色調は暗褐色から暗橙色を呈する。

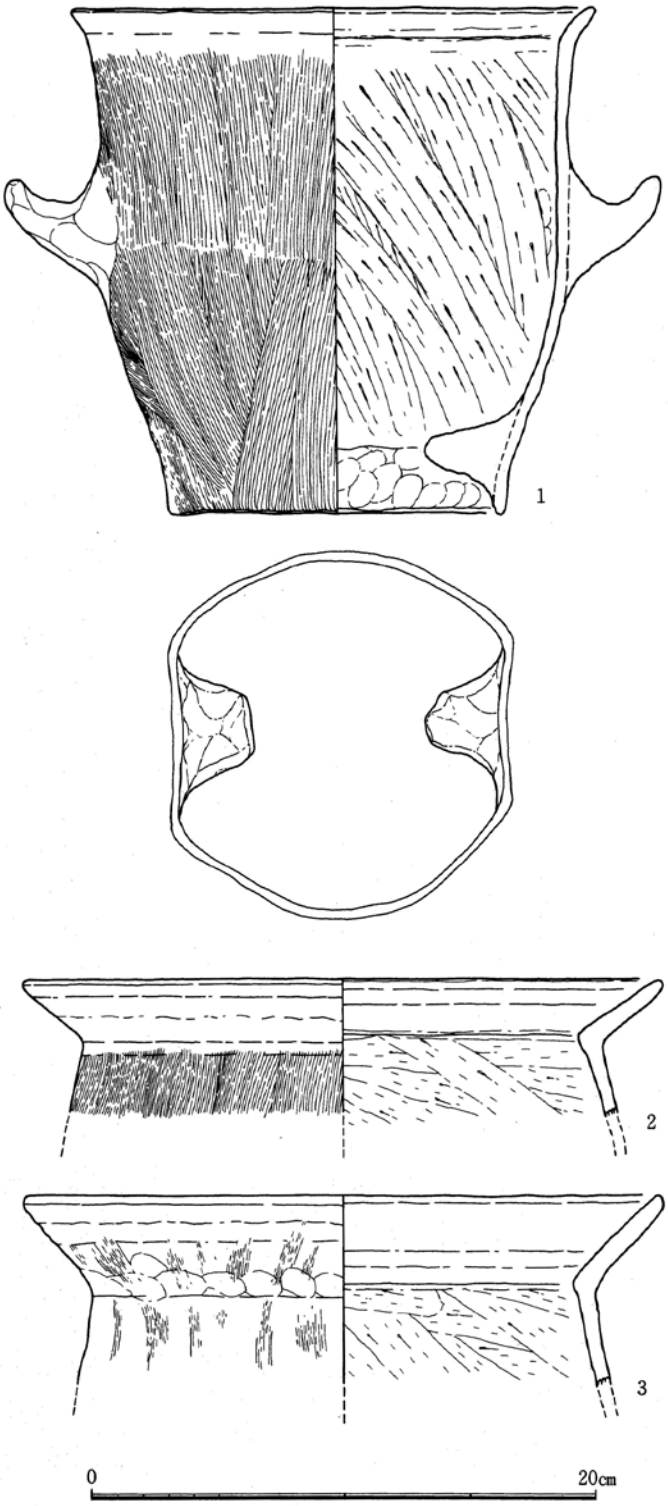
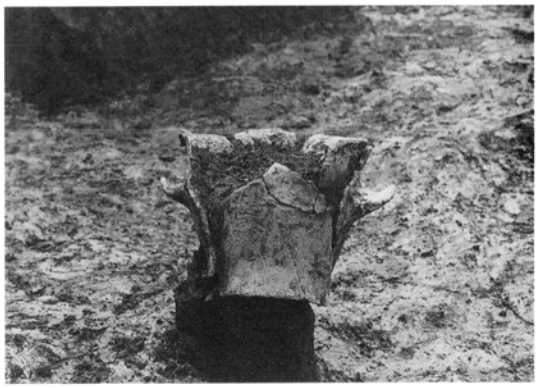


Fig-45　SC-095出土遺物実測図（縮尺1/3）

Ph-58　SC-095遺物出土状況（東から）


Ph-59　SC-095遺物出土状況（南から）

ＳＣ－０９６（Fig－４６）

SC-095・SC-097の両住居を切るように構築された住居である。平面形は方形で規模は2.60ｍ×2.71ｍを測る。検出面から床面までの深さは25㎝程を測り、SC-097の埋土中に床面をつくるため水はけが良かったのか壁溝は検出されなかった。床面上では柱穴は確認されなかったが、住居東側壁中央部に作り付けの竈を検出した。竈の本体は廃絶時にすでに破壊されていたが、竈の基底部と煙道を検出した。竈の基底部は住居床面より10㎝程低く掘り下げられており、焼土と白色粘土が堆積する。煙道は基底部より５㎝程高い壁面上に開口し、やや下った後に垂直に立ち上がる。SC-095の埋土中に掘削されているが、煙道周辺は被熱のため若干硬化する。煙道内には灰と焼土を含んだ黒褐色土が堆積していた。他の住居が張り出し部内に竈を付設するのに対しこの住居では壁

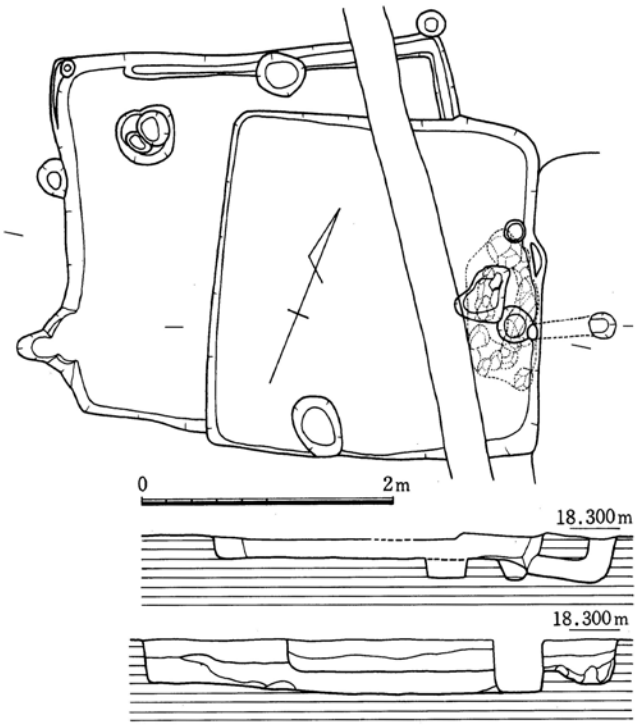
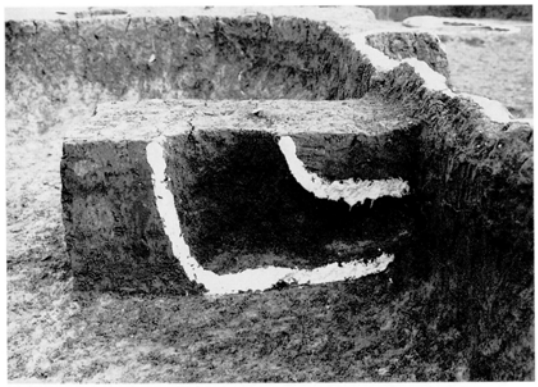


Fig-46　SC-096実測図（縮尺1/60）



Ph-60　SC-096煙道断面（北から）

Ph-61　SC-096完掘状況（北から）

面に白色粘土を直接貼り付けて竈を構築する手段がとられている。時期的な差違であろうか。
Fig－48に出土遺物を示した。１は土師器の甑である。復元口径19.6cmを測る。把手・底部が欠損しており全体像を把握することはできない。ほぼ直線的に立ち上がる胴部とやや外反する口縁部を持つ。外器面には縦位の刷毛目調整、内面には胴部下半まで縦位のヘラ削り、口縁部下まで横位のヘラ削り、口縁部には横ナデ調整が施される。部分的に被熱しており、色調は褐色から淡赤褐色を呈する。

ＳＣ－０９７（Fig－47）

SC-096に切られる方形住居で、規模は3.1m×3.1mを測る。検出面から床面までの深さは40cm前後を測る。壁溝は住居北側隅部付近のみで検出された。床面上では計３基の土坑が検出されたが、柱穴ではない。住居西側壁の南寄りの箇所に張り出し部が設けられ、竈が付設されていた。竈上部は廃絶時に破壊されていたが、白色粘土を除去すると右袖部分と煙道のみが検出できた。煙道は竈基底部から直接立ち上がり住居外へのびる。竈右袖脇から須恵器の椀と蓋が出土したが、これが竈祭祀に伴う遺物かは出土状況からは判断できなかった。Fig－48に出土遺物を示した。２は土師器の甕である。復元口径21.2cmを測り、胴部最大径は19.2cmを測る。摩滅のため外器面の調整が消失しかけるが、断片的に縦刷毛目調整が観察できる。口縁部には横位の刷毛目調整が施されており、内面はヘラ削りを施す。焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。

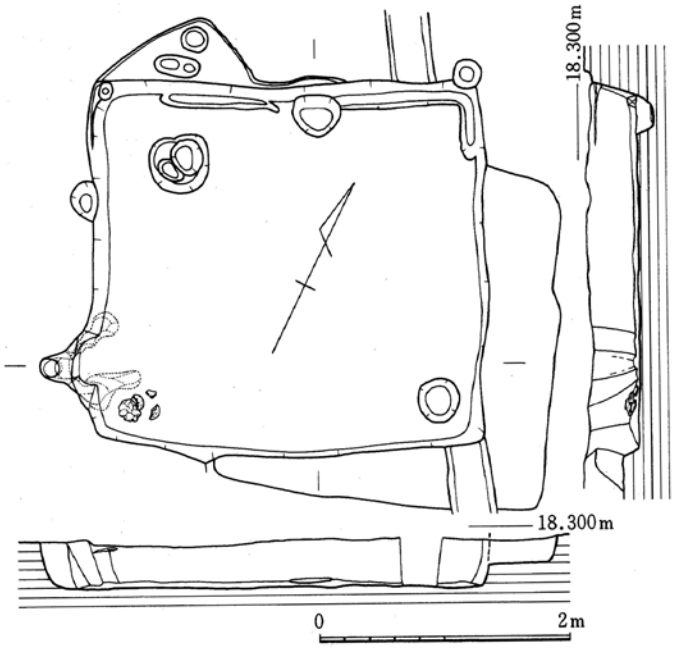
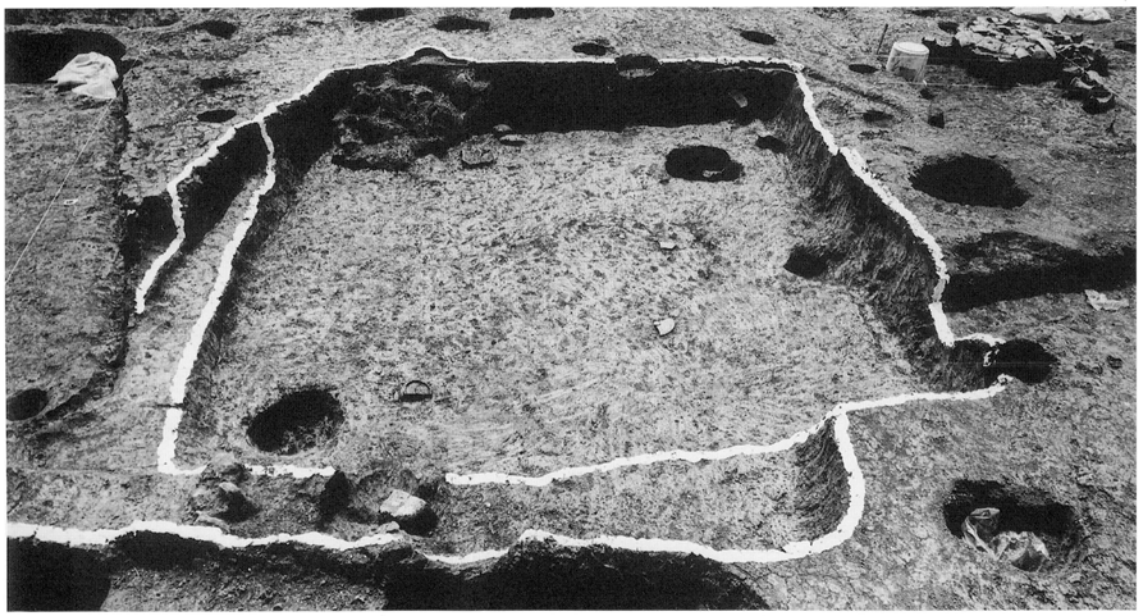


Fig-47　SC-097実測図（縮尺1/60）


Ph-62　SC-097完掘状況（東から）

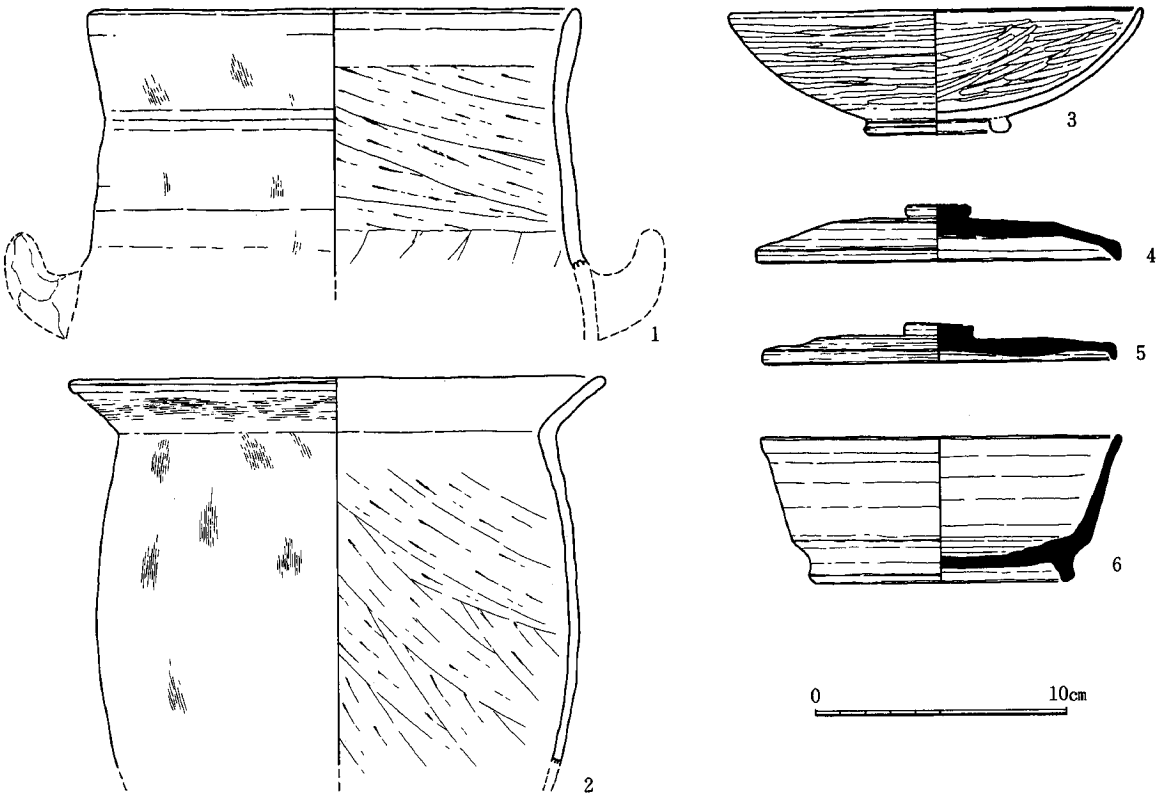


Fig-48　SC-096・097出土遺物実測図（縮尺1/3）

4・5は須恵器の蓋である。口径はそれぞれ14.4cm、14.0cm、器高は2.2cm、1.6cmを測る。焼成は共に良好で、色調は淡灰褐色、濃灰色を呈する。4は天井部に「×」字状のヘラ記号が刻まれる。6は須恵器の椀であり、口径14.2cm、高台径10.6cm、器高5.8cmを測る。高台は断面台形で底面の端部に貼り付けられ体部に連なる。6はSC-096に伴う遺物の可能性がある。7は埋土中から出土した瓦器椀である。口径16.4cm、高台径5.8cm、器高4.9cmを測り、高台の断面は台形を呈する。内外器面とも丁寧なヘラ磨きが施されており、色調は灰白色から黒色を呈する。

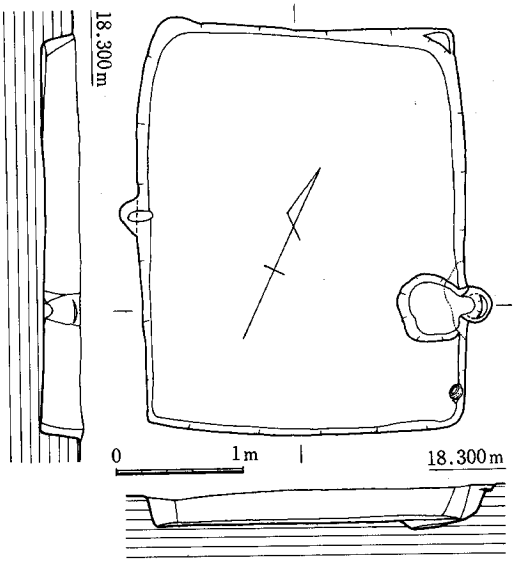


Fig-49　SC-098実測図（縮尺1/60）

ＳＣ－０９８（Fig－49）

Ｂ区中央部西側で検出された住居で、平面プランは方形を呈する。規模は2.59ｍ×3.24ｍを測り、検出面から床面までの深さは25cm前後を測る。埋土は上層と下層に分層でき、上層が暗褐色土、下層がロームブロックを含む暗褐色土である。下層の暗褐色土には白色粘土と焼土が混入する。上層に比べしまりがなく、粘性は全くない。壁溝は検出されなかった。住居東側壁の南寄りの箇所に小さな張り出し部を設け、竈を付設する。竈本体は住居廃絶時に破壊されており、構造は現状では不明である。竈基底部は住居床面より５cm程低くなり、周辺には白色粘土と焼土が散乱する。張り出し部は径30cm程度の小規模なもので上部に段を有する。煙道の基底部と考えられ

Ph-63　SC-098完掘状況（西から）

る。構築時の掘削はほぼ平坦に行われており、検出された床面もほぼ平坦になる。床面上では柱穴は検出されず、壁周囲でも柱穴と認定できる土坑の検出はなかった。後世の削平によりすでに失われているものと考えられる。Fig－50に出土遺物を示した。

１は土師器の埦である。住居東側隅部において壁に貼り付くような状況で出土した。口縁部は欠損しているため、口径・器高は計測できない。高台径は9.8cmを測り、高台の断面形は台形を呈する。体部底面はヘラ切りされ、高台は底面の端部近くに貼り付けられる。器形の成形はナデ調整によって行われる。焼成は良好で、色調は淡橙色を呈する。２は須恵器の坏である。復元口径11.4cm、復元底径7.6cm、器高2.1cmを測る。底部はヘラ切りされ、体部はナデ調整によって成形される。焼成は良好で、色調は濃灰色を呈する。

本調査地点の奈良時代に属する住居はほとんど同時代の住居と重複するが、この住居だけは単独で構築されている。住居自体が特別な施設を伴うわけでもなく、どちらかといえば規模も遺物も貧弱である。ある時期の住居配置の結果、単独で検出されたものと考えられよう。

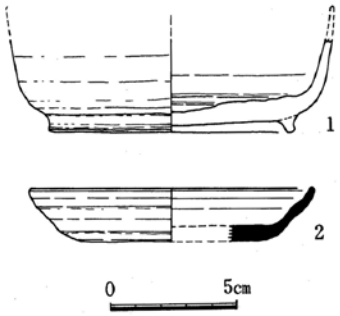
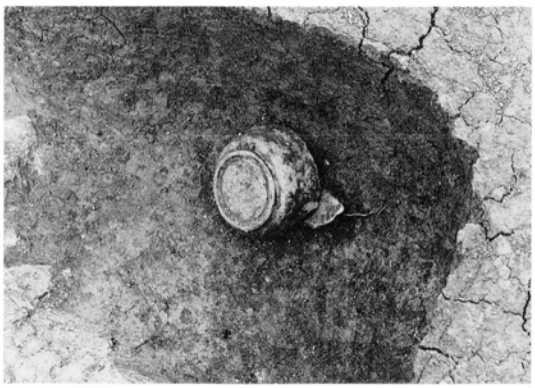


Fig-50　SC-098出土遺物実測図（縮尺1/3）

Ph-64　SC-098竈検出状況（西から）



Ph-65　SC-098遺物出土状況（西から）

ＳＣ－１００（Fig－51）

Ｂ区南側隅で検出した住居で、東側隅部は調査区外に位置し完掘できなかった。現状で平面プランは方形を呈し、規模は3.30ｍ×3.45ｍを測る。検出面から床面までの深さは70㎝前後を測り、遺存状況は良好であった。埋土は１層が暗褐色土でロームブロック・黒褐色土・炭化物・焼土粒を少量含む。２層は暗黄褐色土でロームが変質した土質である。３層は住居壁際の三角堆積で黒褐色土である。ロームブロック・炭化物・焼土粒を少量含む。床面上では柱穴は検出されず、壁溝は南側隅部と北側隅部付近のみで確認された。住居西側隅部に竈を付設しており、コーナー型に分類される。竈本体は廃絶時に破壊され、竈の上部構造は不明であるが、破壊時に白色粘土と焼土で封を行っており、底部を抜いた甕を逆位の状態でその上に据え置いている。竈祭祀の一種と考えられる。断面の観察から竈の左袖部は破壊されずに残存していたことが確認できた。竈の基底部は住居床面より30㎝程掘り下げられ、その上に白色粘土で竈を構築したものと思われる。煙道は西側隅部上部に開口していたと考えられるが、後世の撹乱により消滅していた。構築時の掘削は全体的にほぼ平坦に行われており、掘削痕は検出されなかった。Fig－54に出土遺物を示した。

１は土師器の埦である。復元口径12.6㎝、高台径9.8㎝、器高2.6㎝を測る。高台の断面形は台形を呈し、ヘラ切りされた底面の端部近くに貼り付けられる。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

２は須恵器の壺蓋である。復元口径15.8㎝、器高4.2㎝を測り、天井部の一部にはヘラ削りが施される。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。３は須恵器の坏である。復元口径12.0㎝、底径7.4㎝、器高3.3㎝を測り、底部はヘラ切りされる。焼成不良で、色調は淡灰色を呈する。

４は須恵器の埦である。復元口径11.4㎝、高台径9.0㎝、器高3.7㎝を測る。高台の断面形は台形を呈し、ヘラ切りされた底面の端部に貼り付けられ、体部に連なる。体部はナデ調整によって成形される。

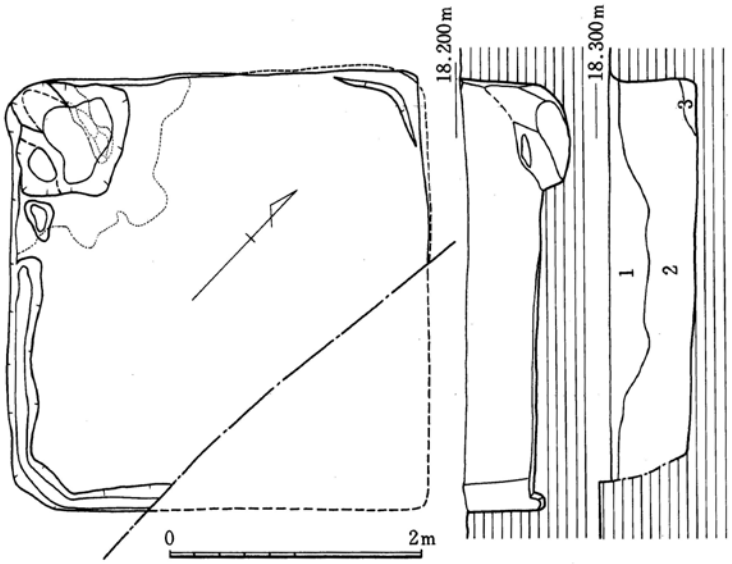


Fig-51　SC-100実測図（縮尺1/60）

Ph-66　SC-100調査状況（東から）

Ph-67　SC-100竈検出状況（南から）

5は須恵器の長頸双耳壺の肩部片である。復元最大径は15.4cmを測る。耳は貼り付け後にヘラナデによって成形し、工具突端部分によって穿孔する。焼成は良好で、色調は濃灰褐色を呈する。6は土師器の甕の口縁部片である。竈の白色粘土内より出土した。復元口径25.2cmを測る。口縁部下は被熱のため赤化する。口縁部端部から頸部まではナデ調整が施され、頸部以下は縦位の刷毛目調整が施され、内面は頸部までが横ナデ調整、頸部以下はヘラ削りが施される。7は土師器の甕である。竈白色粘土上から逆位の状態で出土した。復元口径26.2cmを測り、二次的な被熱のため外器面は摩滅する。断片的に縦位の刷毛目調整が観察でき、頸部付近は横ナデ調整が施される。頸部付近は特に被熱の痕跡が明瞭で、赤化する。口縁部下には煤が付着する。8・9は土師器の移動式竈もしくは甑である。断片資料であり、全体的な器形は把握できない。復元底径は25.5cm、22.5cmを測る。8は外面には縦位の刷毛目調整、内面には底部に指押さえ、それ以上では上方へのヘラ削りが施されている。焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面が暗褐色を呈する。9は摩滅が激しく器面調整のほとんどが消失しているが、外面に縦位の刷毛目調整、内面底部付近には指押さえの痕跡が観察できる。色調は内外面共に橙色を呈する。

SC-100竈土層

1層　暗茶褐色土　ロームブロック・炭化物混入

2層　暗褐色土＋白色粘土

3層　暗褐色土＋焼土（ブロック状）

4層　暗褐色土　焼土ブロック・炭化物含む

5層　暗褐色土　焼土粒・炭化物含む

6層　暗黄褐色土

7層　白色粘土＋暗茶褐色土　（竈袖部分）

8層　暗茶褐色土　ローム粒・白色粘土混入

9層　暗褐色土　ローム粒・炭化物混入

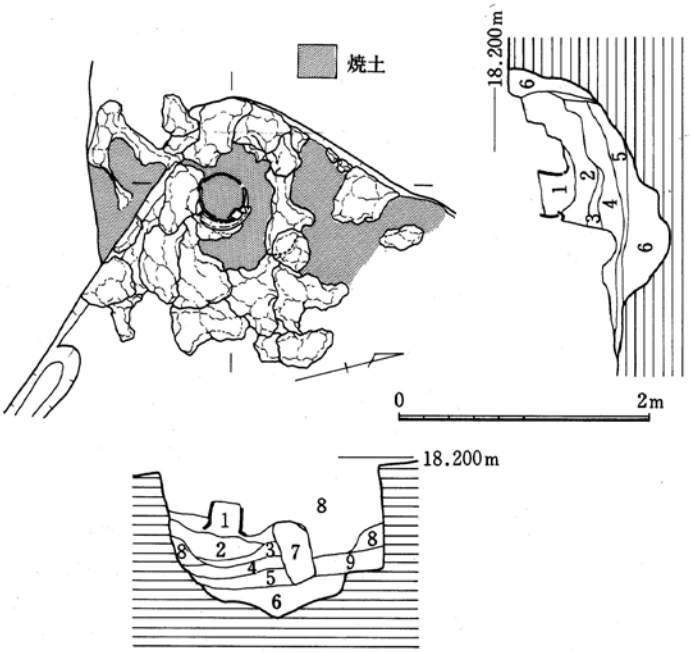


Fig-52　SC-100竈実測図（縮尺1/40）

Ph-68　SC-100竈検出状況（南から）

Ph-69　SC-100竈断面（南から）

ＳＣ－１０２（Fig－53）

Ｂ区南側隅部で検出した住居で、住居東側隅部をSC-100に切られる。住居南側隅部は調査区外に位置したため、住居全体の規模が把握できなかった。よってこの部分だけを拡張し南側隅部を検出した。現状で平面プランは方形を呈し、規模は3.10ｍ×3.28ｍを測る。検出面から床面までの深さは50㎝を測り、埋土は暗褐色土の単一土層である。壁溝は西側壁と東側隅部を除いて部分で検出された。床面上では柱穴は検出されなかった。住居東側壁の南よりの箇所に作り付けで竈が付設されていた。竈本体は廃絶時に破壊されており、周辺に白色粘土と焼土が散乱する状況が検出された。白色粘土と焼土を除去すると竈の右袖部分が残存するのが確認されたが、基底部近辺のみの残存で上部構造を復元することはできなかった。竈の基底部は住居床面より10㎝程掘り下げられる。この掘り込み内には白色粘土と焼土が堆積しており、破壊時に流れ込んだものと考えられる。基底部には被熱による硬化は確認できない。構築時の掘削は平坦になるように行われており、床面上で掘削痕は検出されなかった。Fig－54に出土遺物を示した。

10は須恵器の埦である。口径は10.8㎝、高台径は6.4㎝、器高3.9㎝を測る。高台の断面形は台形を呈し、ヘラ切りされた底部の中程に貼り付けられる。体部はナデ調整によって成形される。焼成は良好であり、色調は濃灰色を呈する。焼成時の焼き歪みにより上から見ると楕円形の平面形を呈する。

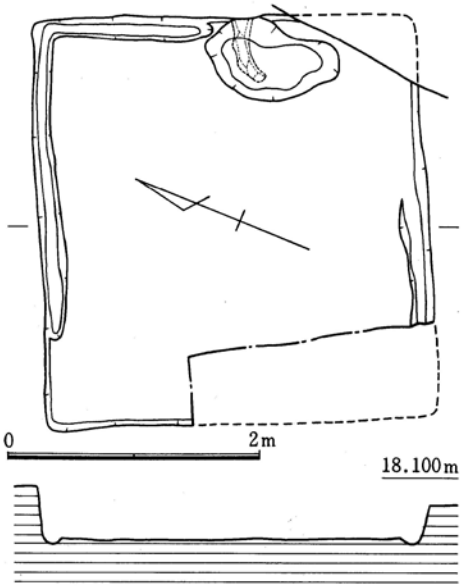


Fig-53　SC-102実測図（縮尺1/60）

11は須恵器の埦である。復元口径23.0㎝、高台径13.6㎝、器高5.6㎝を測る。高台の断面形は方形を呈し、ヘラ切りされた底部の端部に貼り付けられる。体部はナデ調整によって成形される。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。12は土師器の甕である。復元口径19.6㎝を測る。胴部中程から欠損しているため、正確な器形は把握できない。外面は被熱のため器面調整がほとんど消失しているが、断片的に横ナデ調整の痕跡が観察できる。内面は口縁部から頸部まで横ナデ調整が施され、頸部以下ではヘラ削りが施されている。焼成は良好であり、色調は暗橙色から褐色を呈する。

Ph-70　SC-102調査状況（南から）

Ph-71　SC-102調査状況（西から）

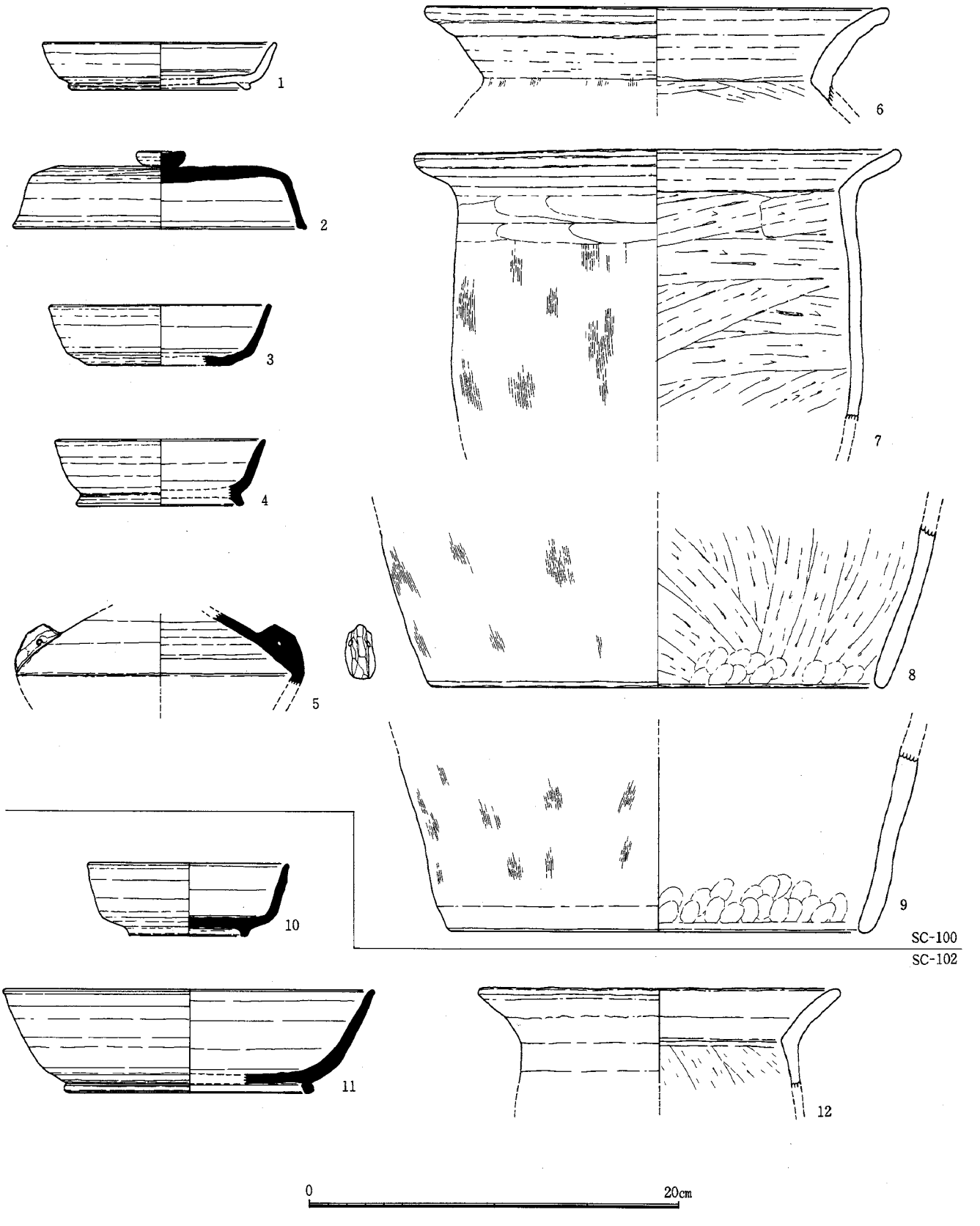


Fig-54　SC-100・102出土遺物実測図（縮尺1/3）

ＳＣ－０４１・１０３・１０７・１０９・１１０（Fig－55・56）

Ａ・Ｂ区の両方にまたがって検出された、５軒の住居が重複して構築される住居群である。住居の構築順序は調査結果からSC-110→SC-109→SC-107→SC-103→SC-041の順が復元できる。住居の主軸方向はほぼ同じであり、意図的に重複して掘削される。竈の方向は東→不明→西→東南隅→南と変化する。これらの住居の平面形は方形で、規模は2.2ｍ～3.6ｍを測る。

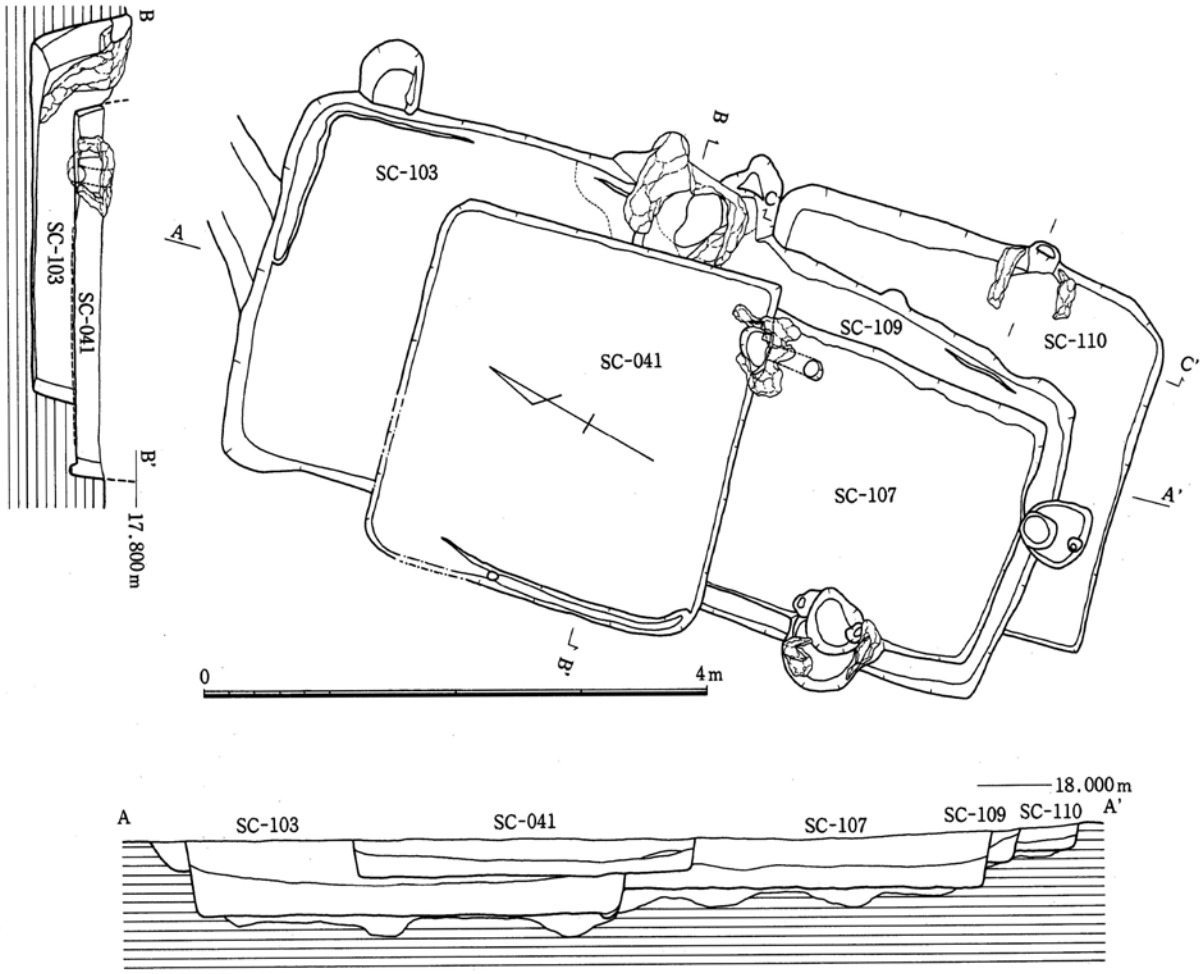
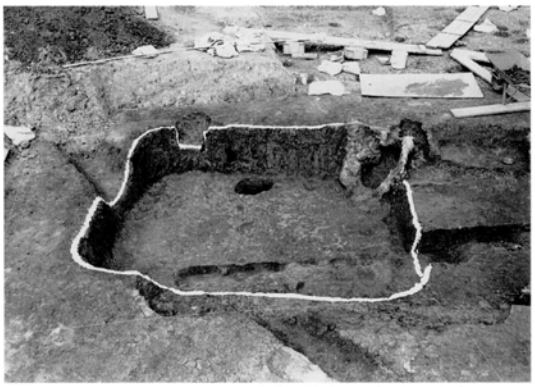


Fig-55　SC-041・103・107・109・110実測図１（縮尺1/60）

Ph-72　SC-041調査状況（北から）



Ph-73　SC-103完掘状況（西から）

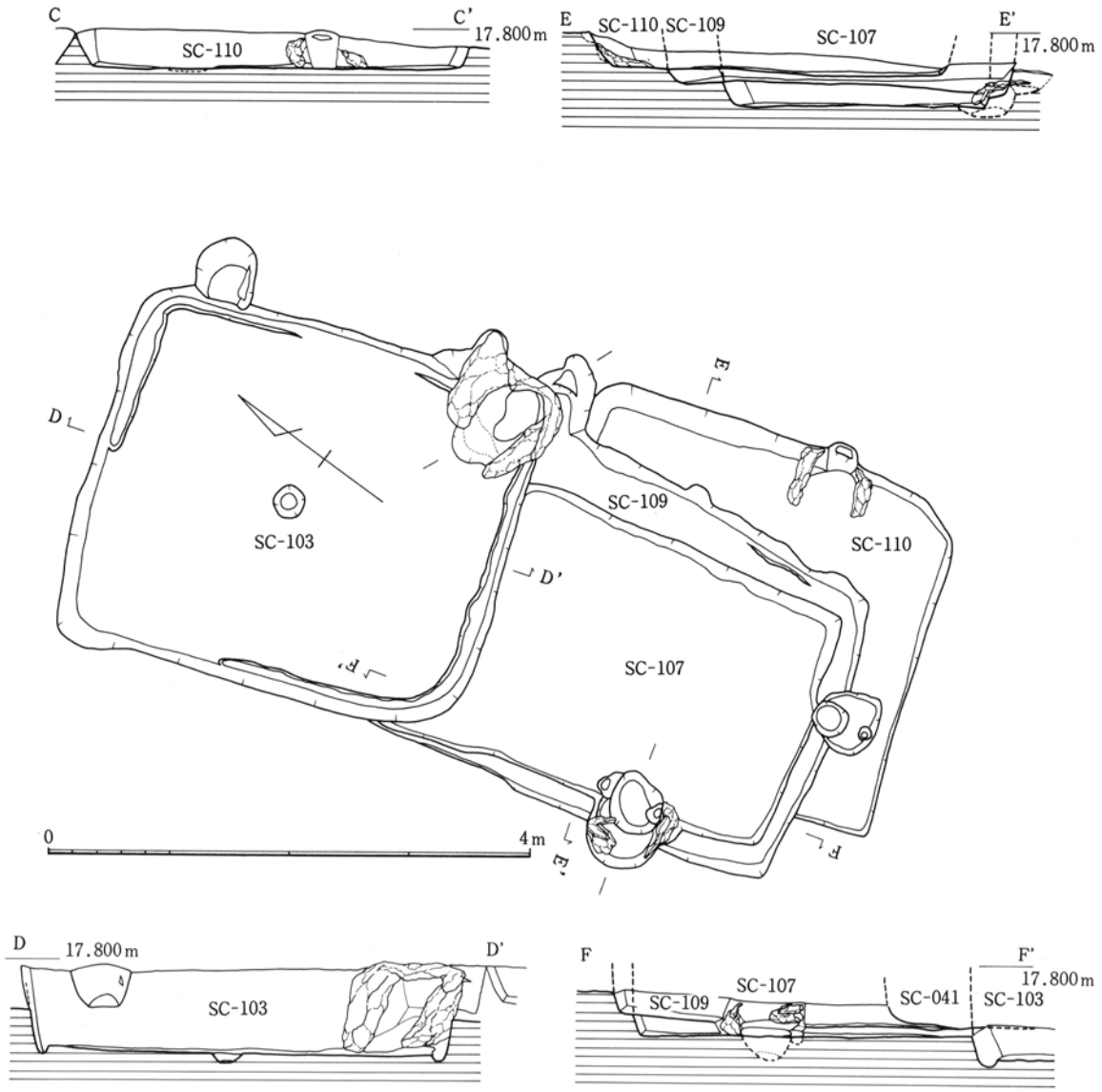
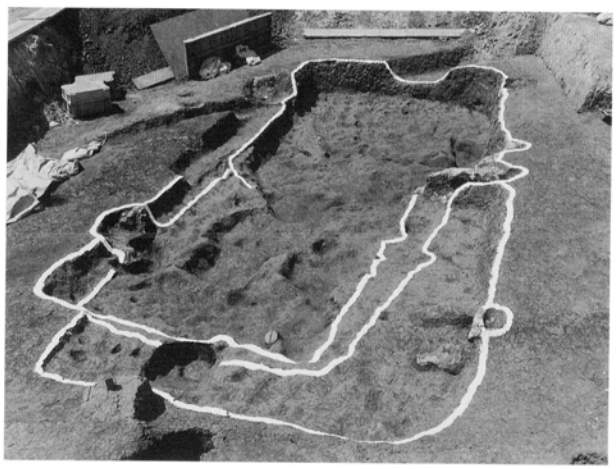
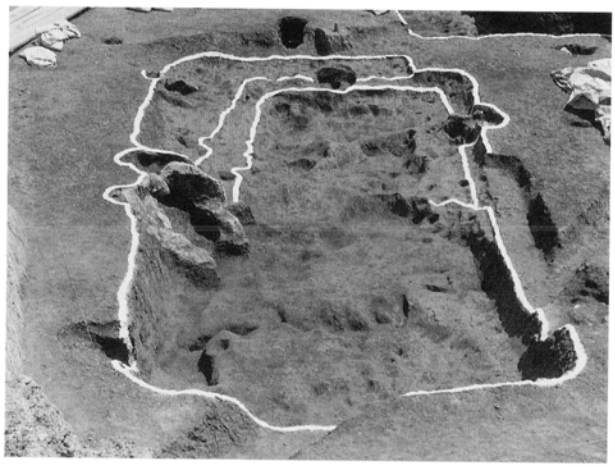


Fig-56　SC-041・103・107・109・110実測図２（縮尺1/60）



Ph-74　SC-103・107・109・110完掘状況（南から）



Ph-75　SC-103・107・109・110完掘状況（北から）

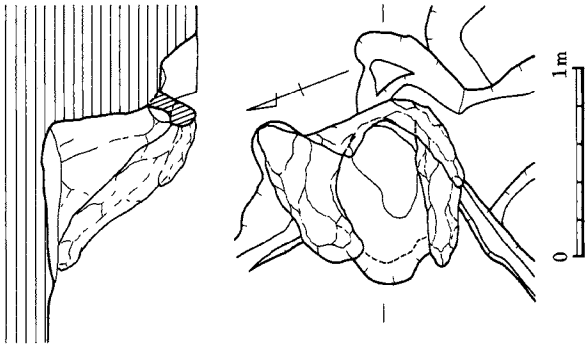


Fig-57　SC-103竈実測図（縮尺1/40）

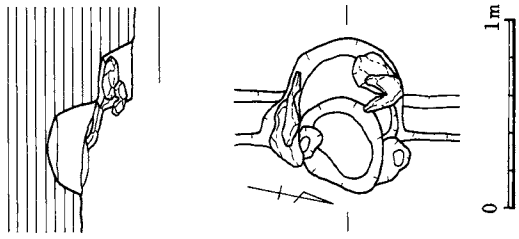


Fig-58　SC-107竈実測図（縮尺1/40）

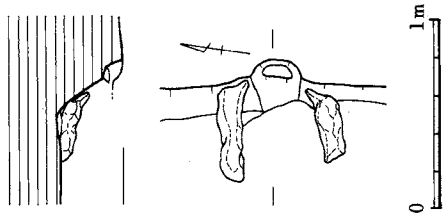


Fig-59　SC-110竈実測図（縮尺1/40）

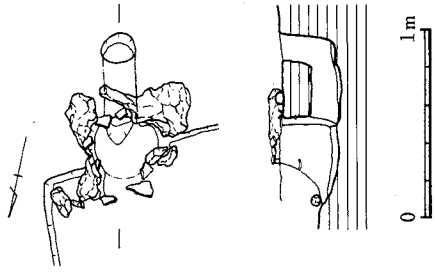


Fig-60　SC-041竈実測図（縮尺1/40）

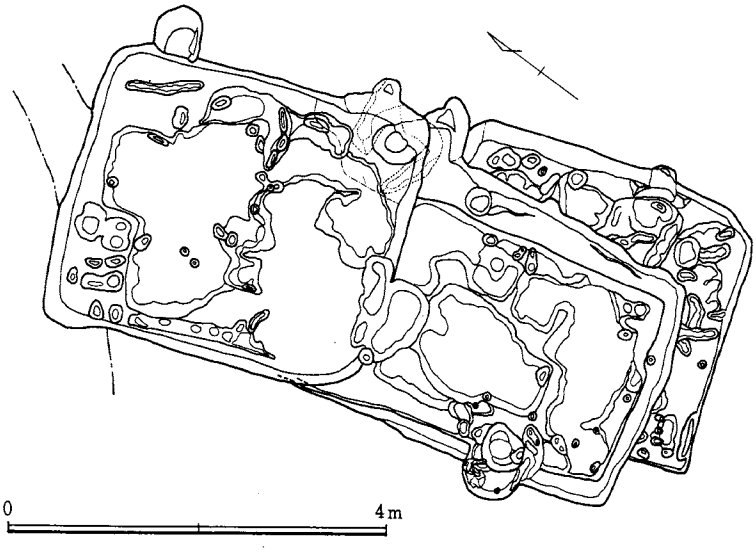


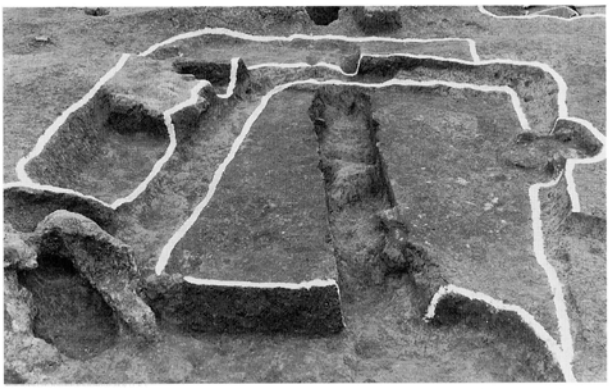
Fig-61　完掘状況実測図（縮尺1/80）

ＳＣ－０４１

住居群の埋土の中に掘削された住居で、2.85ｍ×3.00ｍの規模を測る。検出面から床面までの深さは30㎝を測る。壁溝は西南側隅部のみ検出された。竈は南側壁の東よりの箇所に作り付けられる。竈本体は破壊されるが、袖の底部と煙道が検出された。煙道は竈基底部より南側に横方向に40㎝程掘削され垂直に立ち上がる。埋土は上層がやや黒味を帯びた暗褐色土、下層が白色粘土・焼土を含む暗褐色土である。床面上では柱穴は検出されず、掘削痕も確認できなかった。Fig-62に出土遺物を示す。１は土師器の坏である。後世の混入品で、口径8.2㎝、底径4.8㎝、器高1.2㎝を測る。底部は糸切りされる。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。２は須恵器の椀である。口縁部は欠損し、高台径は9.4㎝を測る。高台の断面形は台形で、焼成不良、色調は淡灰褐色を呈する。３は須恵器の椀である。口径13.4㎝、高台径8.9㎝、器高4.0㎝を測る。高台の断面形は方形を呈し、焼成は良好で、色調は濃灰色を呈する。４は須恵器の壺の口縁部片である。復元口径14.0㎝を測り、口端部にはヘラ状工具突端部による沈線が巡らされる。口縁部から頸部付近までの破片であり、体部はナデ調整によって成形される。焼成良好で、色調は濃灰色を呈する。５は土師器の壺である。器形は金属器を模倣したものである。外器面はヘラ磨きが施した後丁寧にナデ消している。高台は端部が欠損する。焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。

ＳＣ－１０３

SC-041に切られる方形住居で、規模は3.10ｍ×3.60ｍを測る。床面は検出面から深さ60㎝を測り、壁溝は北西隅部を除いてほぼ全周する。埋土は上層が暗褐色土、下層が白色粘土を含む暗褐色土に分層される。竈は住居南西コーナー部に作り付けられる。竈上部は破壊されるが、袖部下半は残存する。竈内部には白色粘土・焼土・灰が厚く堆積していた。煙道はSC-109埋土内に掘削され、検出できなかった。SC-109住居北側隅部の張り出しがこの竈の煙道部に当たる可能性も考えられる。床面上では柱穴は検出されず、構築時の掘削は住居中央部より行われている。出土遺物をFig－62に示した。６は土師器の蓋である。摘みが欠損する以外完存する。口径18.6㎝を測り、焼成は良好で色調は淡橙色を呈する。ヘラナデによって成形される。７は須恵器の蓋である。口縁端部を欠損する。天井部はヘラ切り痕が明瞭に残る。焼成はやや甘く色調は灰色を呈する。８は須恵器の埦である。復元口径は13.0㎝を測る。高台部は欠損する。９は須恵器の坏である。復元口径18.8㎝、底径15.4㎝、器高2.1㎝を測る。底部はヘラ切りされ、焼成良好で、色調は暗灰色を呈する。10は土師器の高坏脚部片である。摩滅のため器面調整は観察できない。焼成良好で、色調は橙色を呈する。坏底面は残存するが、坏体部は欠損する。脚内部はナデ調整が施される。11は土師器の甕である。復元口径40.8㎝を測り、胴部下半部は欠損する。器面調整は摩滅のため明瞭に観察できないが、外器面には縦位の刷毛目調整、内器面にはヘラ削りが施される。口縁部は内外面共に横方向のナデ調整が施される。焼成は良好で、色調はにぶい暗褐色から橙色を呈する。



Ph-76　SC-107・109・110完掘状況（北から）

Ph-77　SC-041竈検出状況（北から）

Ph-78　SC-103竈検出状況（西から）

Ph-79　SC-107竈検出状況（東から）

Ph-80　SC-110竈検出状況（西から）

ＳＣ－１０７

SC-109を切りSC-103に住居北側を切られる方形住居で、規模は2.2m×3.0m以上を測る。床面は検出面より深さ40cm前後を測る。埋土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色土に分層され、貼床面には厚さ15cm前後の鳥栖ローム土が貼り付けられる。竈は住居西側壁の中央より南よりの箇所に張り出し部を設けて付設される。本体はすでに破壊され、右側袖部の一部が残存するのみである。基底部前面には床面より15cm程掘り下げられた土坑が掘られ、その西側壁は被熱のため赤色に硬化する。

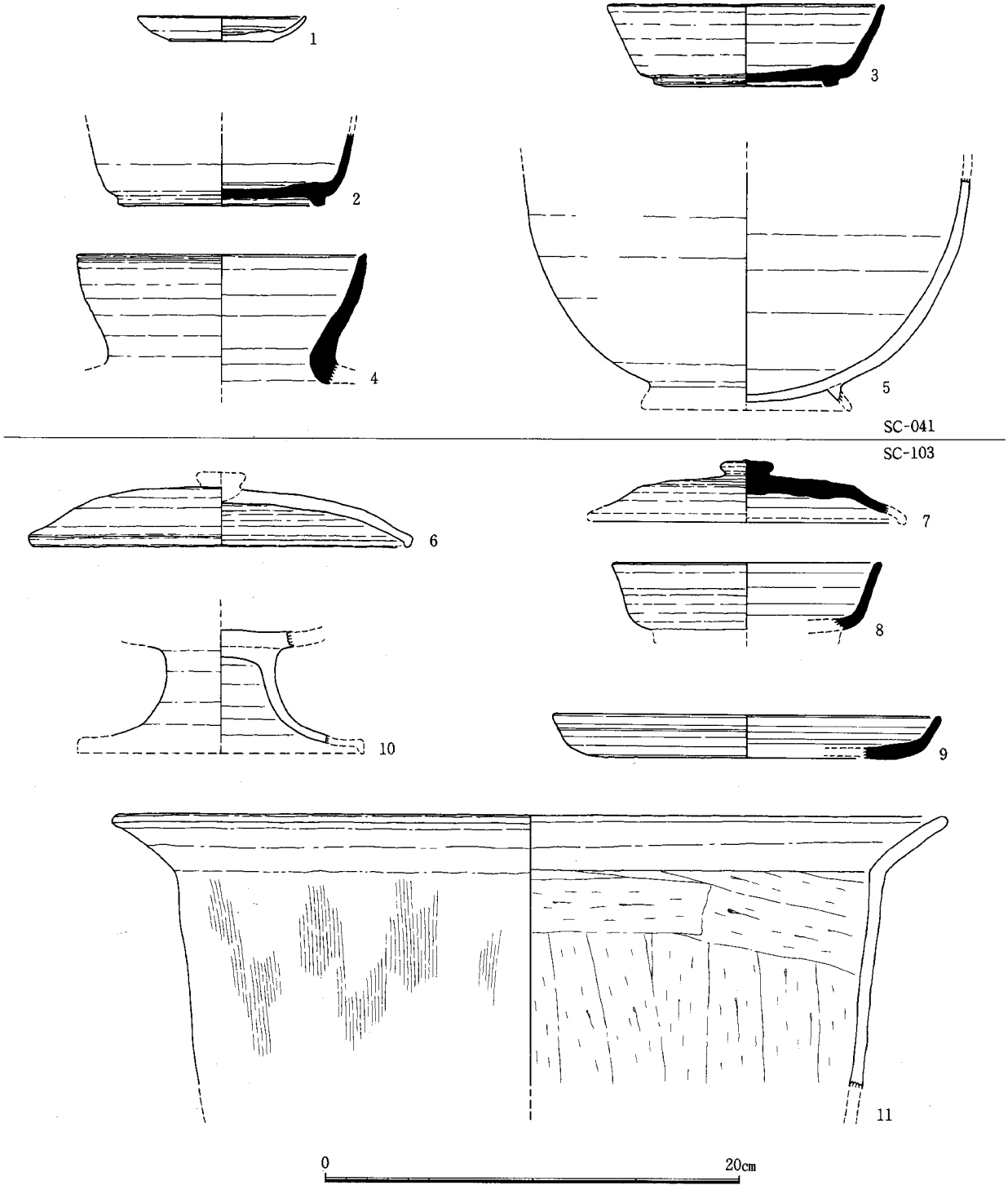


Fig-62　出土遺物実測図１（縮尺1/3）

床面は他の住居より深く、構築時の掘削は中央部から行われている。

ＳＣ－１０９

SC-107に切られ、床面の大部分は失われ、北側はSC-103により消失する。平面形は方形プランで規模は現状で2.9m×3.0m以上を測る。検出面から床面までの深さは20cm前後を測る。埋土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色土である。竈は検出されなかったが、住居北側隅部に張り出しがあり、ここに竈が付設されていた可能性が考えられる。SC-103　構築時に完全に破壊されたと推測される。床面の大部分はSC-107によって消失しているため、柱穴・掘削痕は検出されなかった。

ＳＣ－１１０

SC-107・SC-109に切られる方形住居で、南側壁と東側壁のみが残存する。規模は現状で3.0m×3.3mを測る。床面は検出面から深さ20cm前後を測る。住居東側壁の南寄りの箇所に作り付けで竈を付設する。竈上部は廃絶時に破壊されており、両袖基底部のみが残存する。基底部には掘り込みはなく床面とほぼ同じ高さを測る。煙道方向には小さな張り出しが掘削され、これが煙道の基底部に相当する。構築時の掘削は住居中央部より行われる。SC-107・SC-109・SC-110の出土遺物は出土状況からは分離することはできなかったので、Fig－63に出土遺物を一括で示した。１は土師器の蓋である。口径15.2cm、器高2.2cmを測る。摘みは宝珠型を呈する。２・４・５は須恵器の蓋である。口径はそれぞれ14.2cm、14.6cm、14.8cmを測る。３・６・７はSC-110から出土した。３は須恵器の坏で口径は11.4cmを測る。６・７は須恵器の埦である。６の口径は13.4cm、高台径は8.8cmを測る。高台の断面形は台形を呈する。７は口縁部が欠損する。高台径は9.8cmを測る。高台は断面方形を呈する。９は須恵器の坏である。復元口径12.0cmを測る。焼成良好で色調は黒灰色を呈する。８は土師器の高坏脚部片である。10は土師器の甑である。復元口径14.0cm、最大径24.4cmを測る。焼成は良好であるが、器面調整は摩滅によって消失しておりナデ調整以外は観察できない。把手は平坦なものが胴部最大径部分下に貼り付けられる。

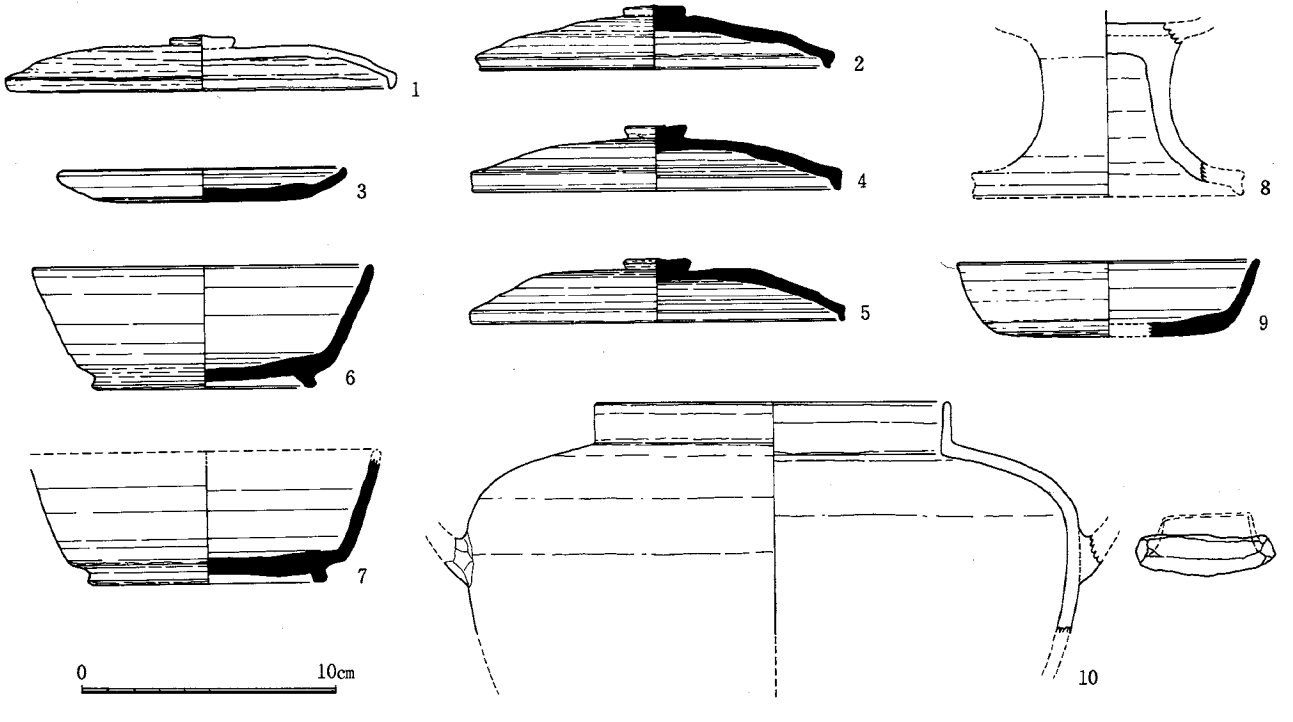


Fig-63　出土遺物実測図２（縮尺1/3）

ＳＣ－１０４・１０５・１０６・１１４・１１５（Fig－64）

Ｂ区東側で検出した住居群で、５軒の住居が重複する。住居の構築順序は調査結果からSC-115→SC-114→SC-106→SC-104→SC-105の順序が復元できる。住居の主軸方向はほぼ同じで、住居の大部分を重複させながら構築を繰り返す。竈の付設方向は検出できなかったSC-114・115を除いて西→西→南と変化する。これらの住居の規模は2.8ｍ～3.2ｍを測る。

ＳＣ－１０５

他の住居を切って掘削された方形住居で、規模は2.8ｍ×3.0ｍを測る。他の住居とは軸を少しずらす。埋土は上層・下層・貼床に分けられ、上からローム粒を含む黒褐色土、白色粘土・焼土を含む黒褐色土、鳥栖ローム土層となる。上層と下層の間には白色粘土がブロック状に堆積する。検出面から床面までの深さは70㎝前後を測る。床面は他の住居の軟質埋土中に位置しないように深く掘削される。検出された貼床上では柱穴は確認できなかった。住居南側壁の東寄りの箇所に張り出しを持ち、底に竈を付設する。竈本体は廃絶時に破壊されており、袖部と壁体の一部・煙道部のみが検出された。

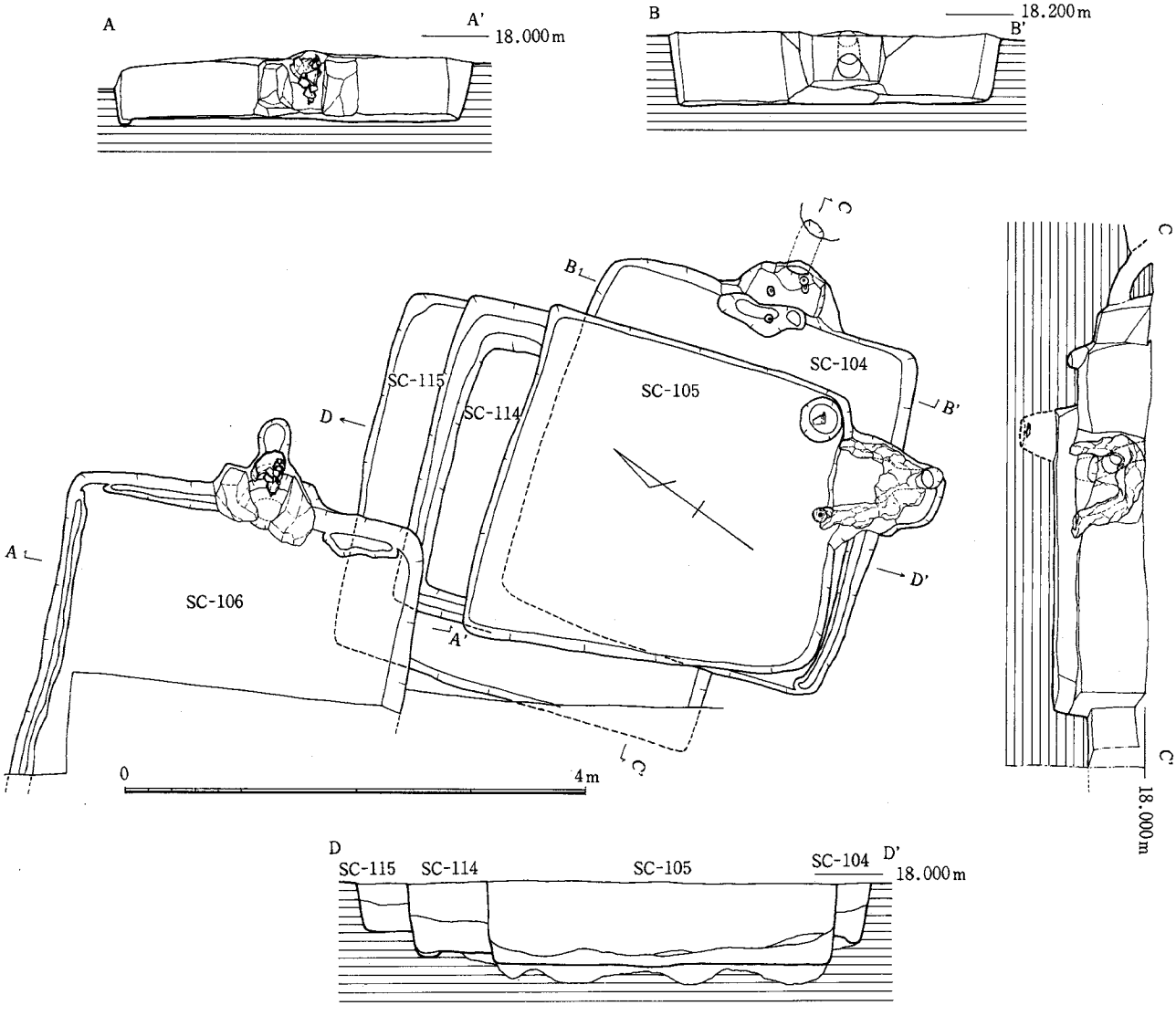
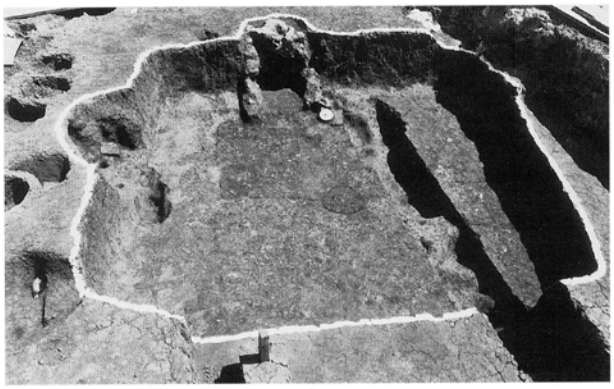
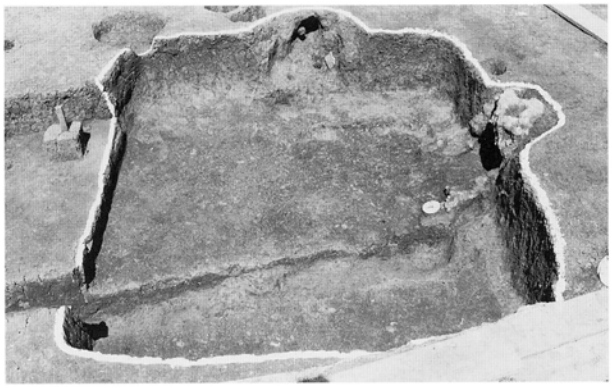


Fig-64　SC-104・105・114・115・116実測図（縮尺1/60）

竈基底部は住居床面より20㎝程高くなる。張り出し部は南側に向かって高くなり白色粘土で壁体を構築し、煙道は基盤層である鳥栖ローム層中に掘削される。煙道の断面は竈基底部に沿って高くなり、竈背面30㎝付近でほぼ垂直に立ち上がる。竈前面には半円形の掘り込みがあり焚き口と考えられる。左袖部前面には須恵器蓋２枚が埋置してあり、廃絶時の竈祭祀に用いられたものと推定される（Fig-65）。構築時の掘削は住居中央部より行われ、急いで掘削されたのか凹凸が激しい。Fig－68に出土遺物を示した。１・２は須恵器の蓋である。竈前面に埋置されていたもので、口径は14.8㎝、13.2㎝を測る。天井部はともにヘラ切り痕が明瞭に残る。焼成良好で色調は黒灰色、暗灰色を呈する。４・６・７・９は須恵器の埦である。４は高台径8.6㎝を測り、断面は台形を呈し、焼成は不良である。６は口径11.8㎝高台径7.0㎝器高5.2㎝を測る。10は土師器の蓋である。復元口径20.6㎝を測る。天井部にはヘラ切り痕が監察できる。14は土師器の甕である。復元口径21.6㎝を測る。16は須恵器の長頸壺の胴部片で、径は20.6㎝を測る。胴部最大径部位上には浅い沈線が巡る。

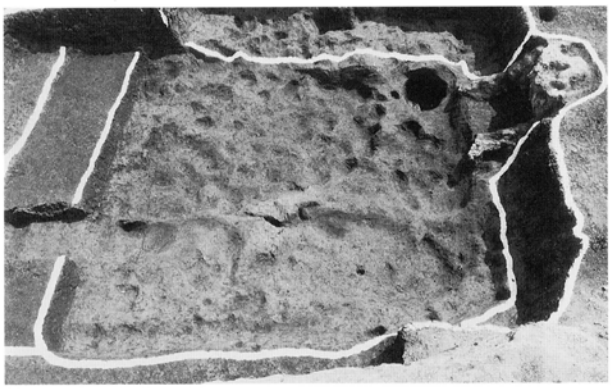


Ph-81　SC-104・105検出状況（北から）

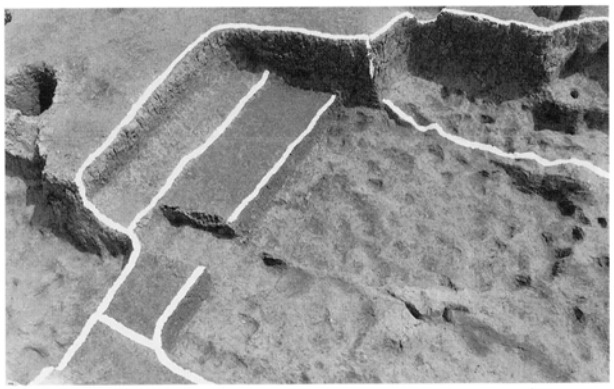


Ph-82　SC-104・105検出状況（西から）

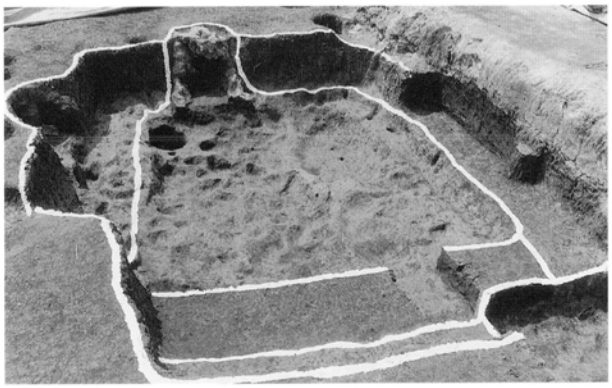
Ph-83　SC-106調査状況（西から）



Ph-84　SC-104・105・114・115完掘状況（西から）



Ph-85　SC-114・115完掘状況（西から）



Ph-86　SC-104・105・114・115完掘状況（北から）

ＳＣ－１０４

SC-114･115を切るように掘削され、SC-105によって切られる住居で、住居東側壁と南側壁のみが検出された。平面形は方形で、現状で規模は2.95ｍ×3.2ｍを測る。住居の大部分をSC-104に切られ失うが、検出面から床面までの深さは45㎝前後を測る。床面は掘り抜かれており柱穴などは検出されなかった。住居東側壁に張り出し部を設けて竈を付設するが、本体は完全に破壊される。張り出し部は方形で、基底部は住居床面より20㎝程高く、壁はほぼ垂直に立ち被熱により赤色に変化し硬化する。竈背面底部には煙道が設けられ、斜め方向に立ち上がる。前面には掘り込みがあり、焼土が堆積する。残存する部分での掘削痕から住居中央より掘削されたものと考えられる。出土遺物をFig－68に示した。13は土師器の椀底部片である。高台径は12.0㎝を測り、高台の断面は台形で底面の端部に貼り付けられる。焼成良好で色調は橙色を呈する。床面より出土した。他の遺物はSC-105出土のものと分離することができなかった。

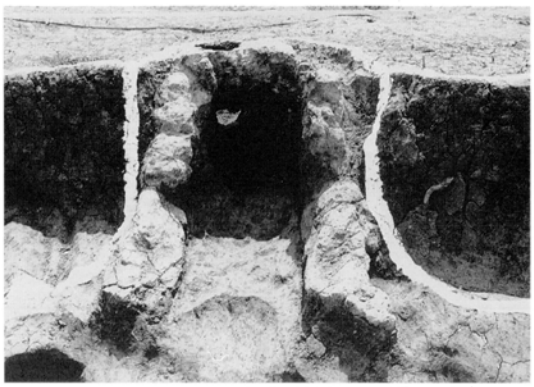
ＳＣ－１１４・１１５

SC-104･105･106に切られる住居群で、検出時には１軒の住居と判断して掘り下げたところ、２軒の住居の切り合いと判明した。共に方形プランで、規模はSC-114が一辺2.8ｍ、SC-115が一辺3.2ｍを測る。大部分を消失していることから住居の詳細は分からなかった。検出面から床面までの深さはSC-114が60㎝、SC-115が45㎝を測る。両住居共に北側壁と他の一部のみが残存するだけで竈の付設位置は確認できなかった。検出状況から東側壁に付設されていたと推測される。Fig－68に出土遺物を示した。８はSC-114から出土した須恵器の椀である。復元口径13.4㎝高台径9.8㎝器高4.4㎝を測る。高台の断面は方形で、底面の端部近くに貼り付けられる。焼成良好で、色調は黒灰色を呈する。３はSC-115から出土した須恵器の坏である。復元口径13.6㎝復元底径10.0㎝器高2.7㎝を測る。底部はヘラ切りされ、焼成良好、色調は暗灰色を呈する。５は須恵器の椀の底部片である。

Ph-87　SC-106竈検出状況（西から）

Ph-88　SC-105竈検出状況（北から）

Ph-89　SC-104竈完掘状況（西から）



Ph-90　SC-105竈完掘状況（北から）

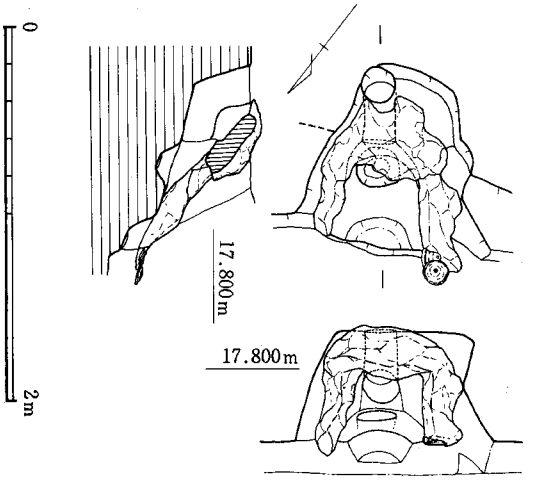


Fig-65　SC-105竈実測図（縮尺1/40）

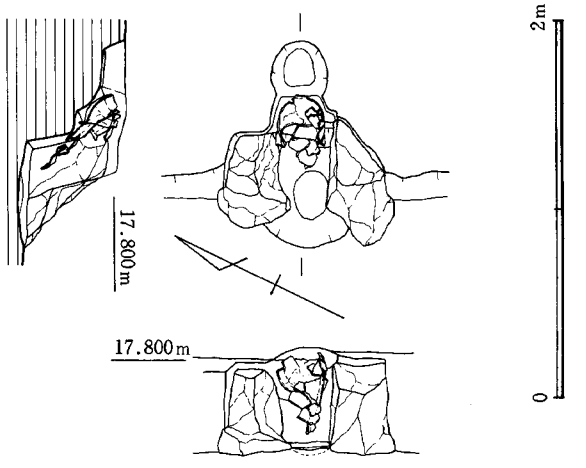


Fig-66　SC-116竈実測図（縮尺1/40）

高台径9.8cmを測り、断面は方形を呈する。12は土師器の鉢である。復元口径25.0cm高台径16.6cm器高4.0cmを測る。15は土師器の甕である。復元口径22.4cmを測る。

ＳＣ－１０６

SC-114･115を切るように掘削された住居で、西側壁は調査区外に位置するため住居全体を調査することはできなかった。平面形は方形で、現状での規模は3.1m×2.7m以上を測る。検出面から床面までの深さは55cm前後を測る。構築順序ではSC-104以後としたが直接切り合う箇所はなく前後逆転する可能性もある。床面の掘削深度だけを考慮するとSC-104→SC-106の順が想定できるが、出土遺物からはSC-106→SC-104の順が考えられる。壁溝は住居北側壁と東側壁で検出された。床面上では柱穴は検出されなかった。住居東側壁中央部に小さな張り出し部を設けて竈を付設する。竈上部は廃絶時に破壊される。白色粘土の両袖部下半は残存し、内面は被熱のため赤色に硬化する。竈内部からは竈祭祀時に用いられた土師器甕などが検出された。甕は逆位の状態で底部を抜いて据えられる。竈背面には煙道底面と考えられる掘り込みが検出された（Fig-66）。出土遺物をFig－69に示した。１～６は須恵器の蓋である。復元口径はそれぞれ15.6cm、19.2cm、19.4cm、18.6cm、19.4cm、22.4cmを測る。いずれも天井部にはヘラ切りの痕跡が観察できる。１のみ焼成良好で色調は灰褐色を呈する。２～６は焼成が甘く、色調は淡灰褐色から茶灰褐色を呈する。７・８・10～12は須恵器の埦である。復元口径は13.2cm、14.8cm、13.6cm、12.6cmを測る。７の高台は断面台形で底面の端部に貼り付けられる。他の高台は方形を呈し、底面の端部近くに貼り付けられる。７・８・10は焼成が甘く、色調は灰白色を呈する。他は焼成良好で色調は濃灰色を呈する。９は須恵器の小壺で、口径6.0cm、最大径

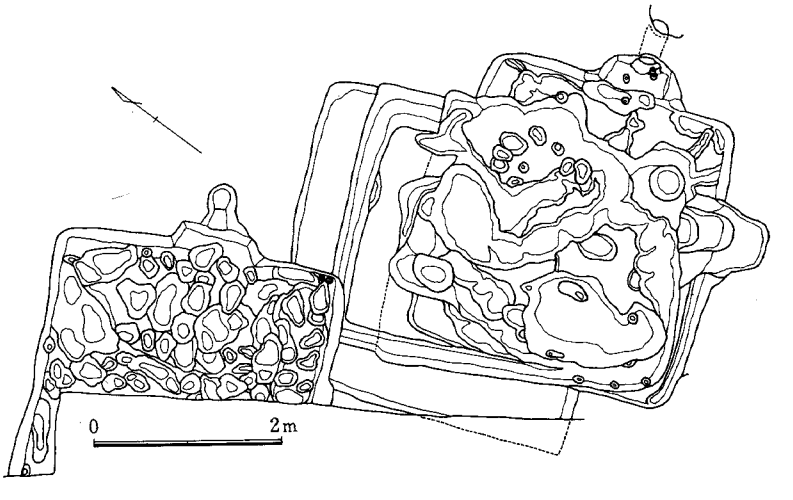


Fig-67　完掘状況実測図（縮尺1/80）

9.2cm、底径6.0cm、器高4.7cmを測る。底部はヘラ切りされ、やや丸味を帯びる。焼成良好で色調は黒灰色を呈する。13～15は土師器の甕である。いずれも竈内から出土した。口径はそれぞれ27.4cm、18.4cm、27.0cmを測る。13は外器面の縦位の刷毛目調整が明瞭に残り、内面にはヘラ削り痕が観察できる。14はやや摩滅されるが、刷毛目調整とヘラ削りが観察できる。15は外器面が摩滅のため遺存状態はよくないが、縦位の刷毛目調整と横位の指ナデ調整が観察できる。

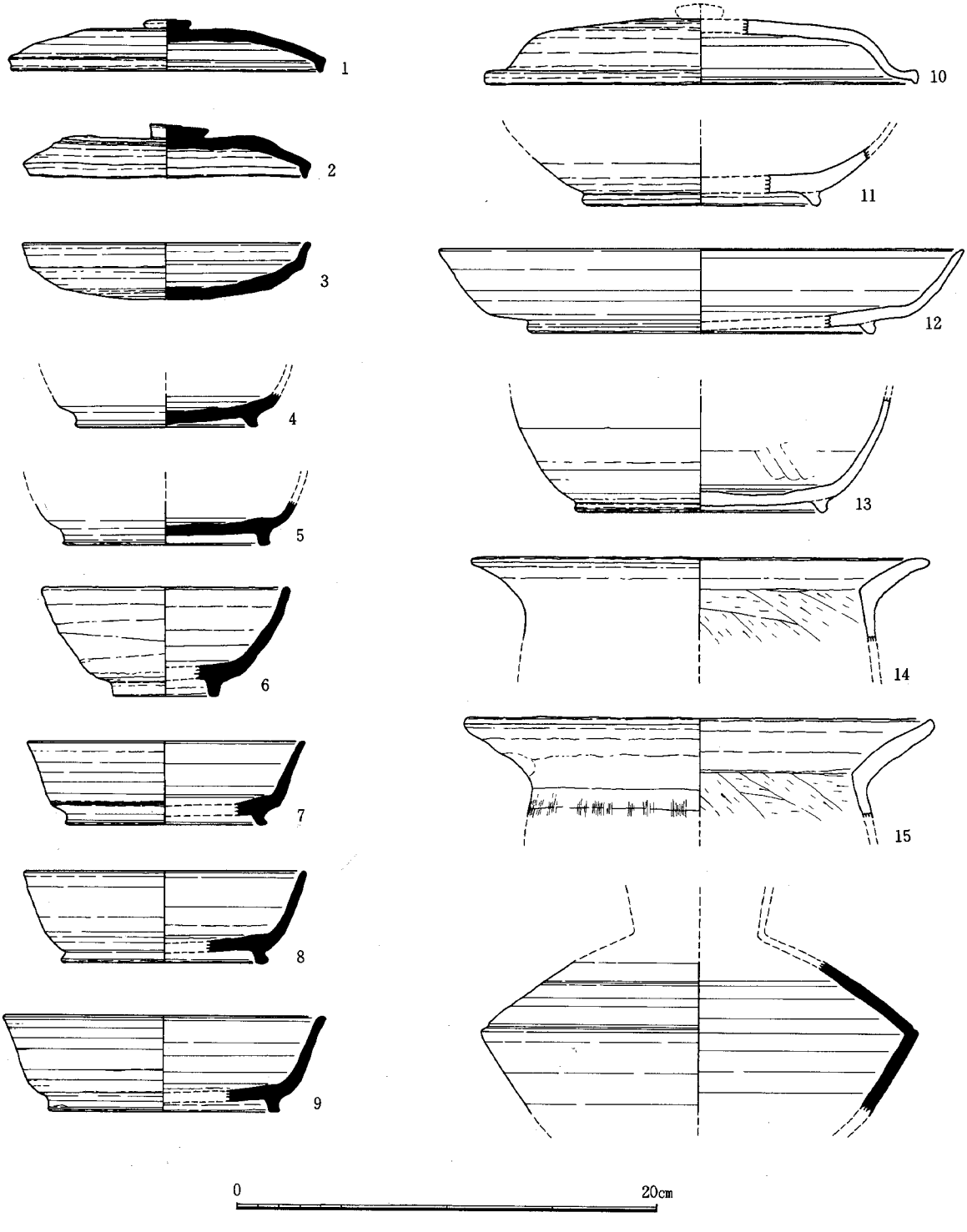


Fig-68　出土遺物実測図１（縮尺1/3）

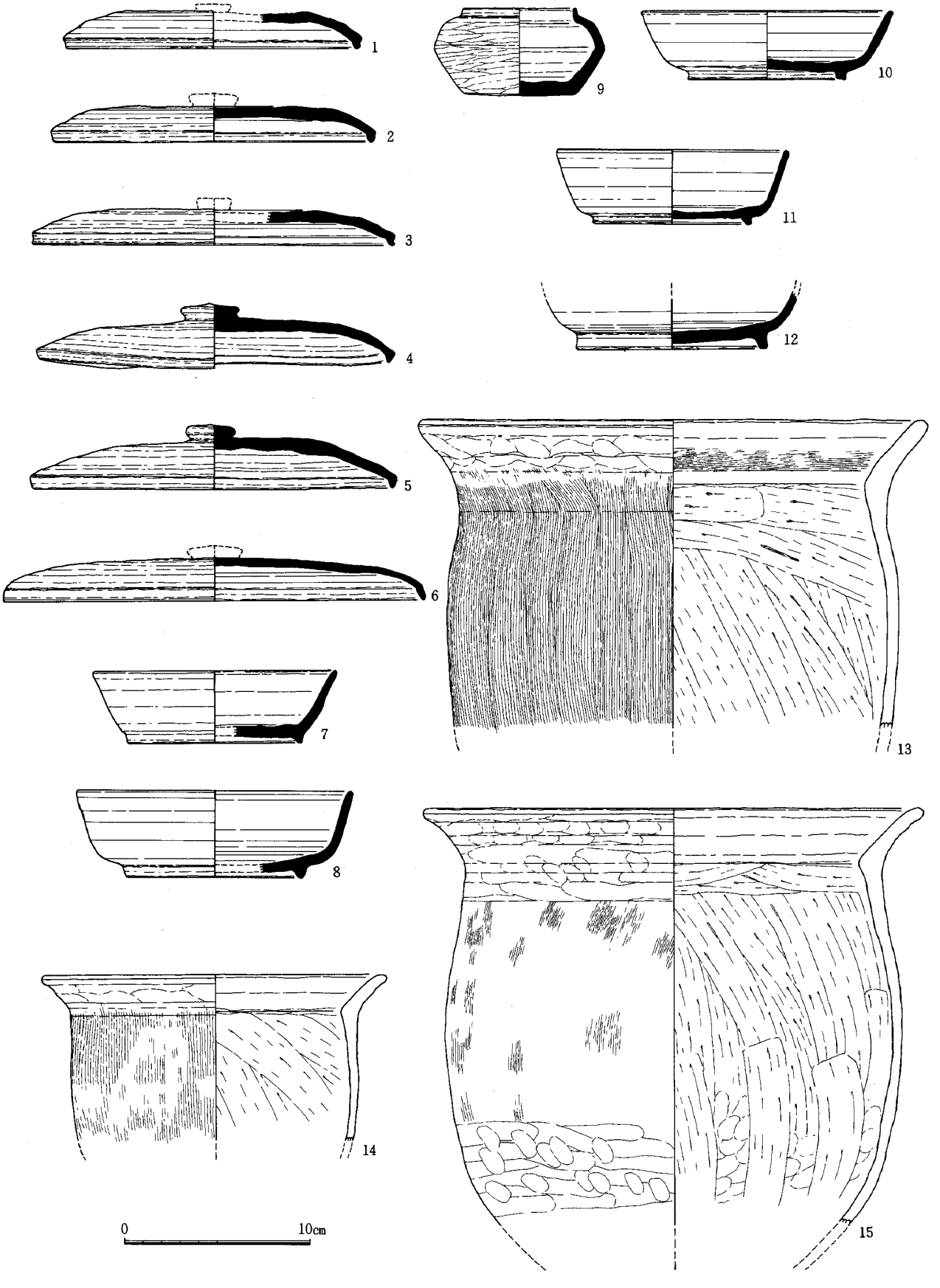


Fig-69　出土遺物実測図２（縮尺1/3）

ＳＣ－１３９（Fig－70）

Ｂ区東側で検出された方形住居で、規模は3.3ｍ×4.0ｍを測る。住居北側の大部分が削平され、南西側壁と南東側壁の壁溝のみの検出された。壁溝は検出面から深さ10㎝前後を測る。住居床面からは４穴の柱穴が検出された。４本柱の住居である。柱穴は床面からの深さ40㎝から50㎝を測る。柱穴の埋土は黒色土でしまりがある。竈などの検出はなく、残存する床面上でも白色粘土・焼土は検出されなかった。この住居から遺物の出土はなかったため、時期は特定しがたいが削平状況から、他の奈良時代の住居群以前の遺構と考えられる。この他に壁溝の一部だけが検出された住居が４軒以上あり、調査区東側が中世以降に削平を受けていなければ、これ以上の住居が検出されたものと考えられる。

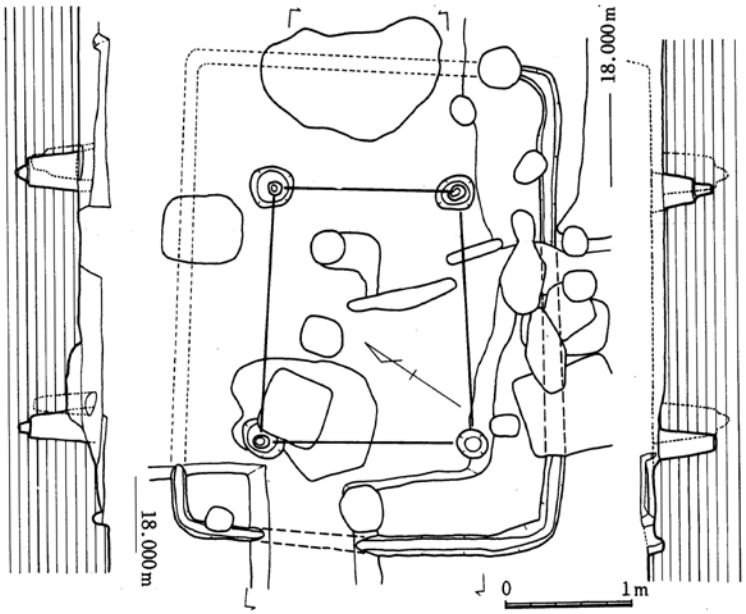


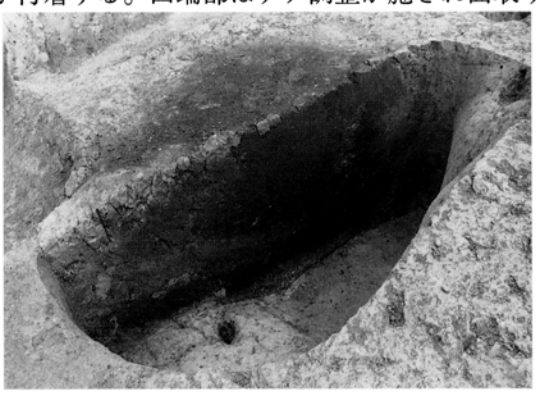
Fig-70　SC-139実測図（縮尺1/60）

その他の遺構

ＳＸ－０１０（Fig－71）

Ａ区北西側で検出された土坑で、平面プランは長方形を呈し、検出面から底面までの深さは80㎝前後を測る。上部は削平されており、本来は１ｍ以上の深さを測るものと考えられる。埋土は上層から黒褐色土、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土、ローム土を含む暗褐色粘質土の順に堆積する。底部には杭などの棒状のものを打ち込んだと見られる跡が見られる。堆積状況・規模から落し穴遺構と考えられる。遺物は埋土上層の黒褐色土から出土した。

Fig－74に出土遺物を示した。１は須恵器坏の底部片である。復元底径7.4㎝を測る。２は土師質土器の片口鉢である。復元口径17.2㎝を測る。体部はナデ調整によって成形され片口部外面には煤が付着する。口端部はナデ調整が施され面取り


Ph-91　SX-010土層断面（南から）

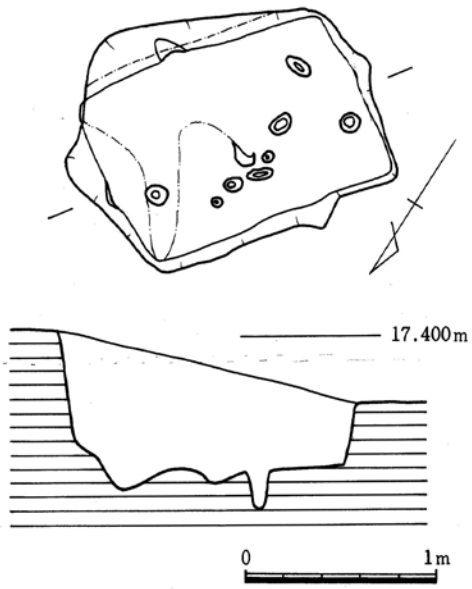


Fig-71　SX-010実測図（縮尺1/60）

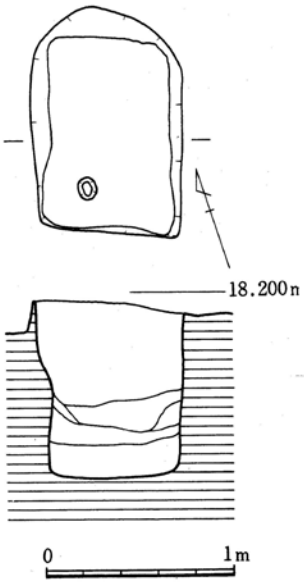


Fig-72　SX-164実測図（縮尺1/40）

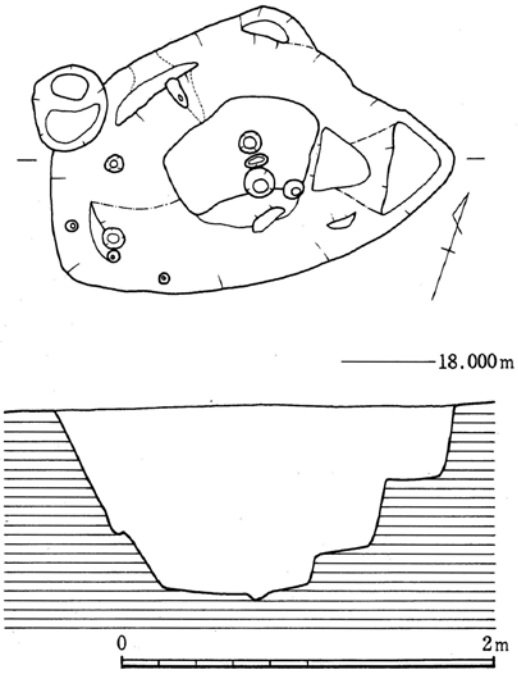


Fig-73　SX-016実測図（縮尺1/40）

される。焼成は良好で色調は外面が暗褐色から黒色、内面が黒灰色を呈する。

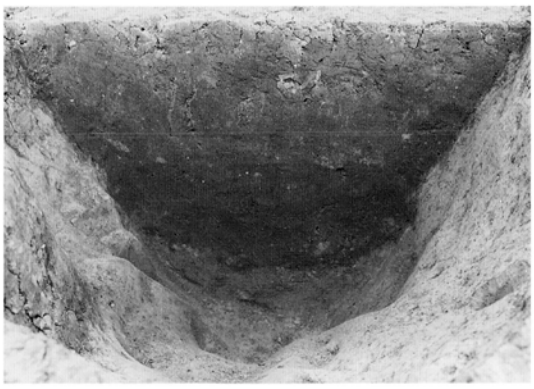
ＳＸ－０１６（Fig－73）

Ａ区中央部北側で検出した土坑である。平面形は楕円形で、規模は長径2.15ｍ、短径1.40ｍを測り、検出面から底部までの深さは約１ｍを測る。埋土は上層から黒褐色土、暗褐色土とに分層できる。土坑東側には階段状の掘り込みが検出される。遺物は上層の黒褐色土から出土した。Fig－74に出土遺物を示した。３は須恵器の蓋である。復元口径13.2㎝を測り、天井部にはヘラ切り痕が残る。摘みは基部から欠損する。焼成は良好で、色調は暗茶灰色を呈する。４は須恵器の埦である。口縁部は欠損しており、高台径は5.8㎝を測る。高台の断面形はほぼ方形で、ヘラ切りされた底面の端部近くに貼り付けられる。５は須恵器の壺の口縁部片である。復元口径14.0㎝を測る。ナデ調整によって成形され、口縁端部は大きく外反する。焼成は良好で色調は濃灰色を呈する。

ＳＣ－１６４（Fig－72）

Ｂ区中央部東側で検出された土坑である。平面プランは長方形で、規模は0.72ｍ×1.09ｍを測る。検出面から底部までの深さは95㎝前後を測る。埋土は上層より黒褐色土、黒色土、褐色土、黄褐色土、黒褐色粘質土の順に堆積する。底部には杭の痕跡は１ヶ所のみ確認された。埋土・規模・構造から、この遺構も落し穴遺構と考えられる。

Ph-92　SX-164土層断面（西から）



Ph-93　SX-016土層断面（西から）

これらSX-010・SX-016・SX-164の各遺構は直線上に位置しており、同時期に掘削された落し穴遺構と捉えることができよう。これらの落し穴は丘陵の頂部に平行するように掘削される。周辺の調査では麦野Ｂ遺跡第３次調査において同様の落し穴遺構が検出されている。４基の落し穴遺構がほぼ同じ等高線上に並び、谷頭を囲むように配置され、追い込み猟に利用されたものと考えられる。遺物の出土はなく時期は特定されていないが、古代以前の遺構と考えられる。本調査地点の落し穴遺構からは８世紀代に位置づけられる遺物が出土しているが、いずれの遺物も埋土上層からの出土であり、積極的に該期の遺構とする要素とは考えにくく、遺構自体の時期はそれよりも遡るものと考えたい。

この他にも多数の土坑などが検出されたが、紙面の都合により割愛する。

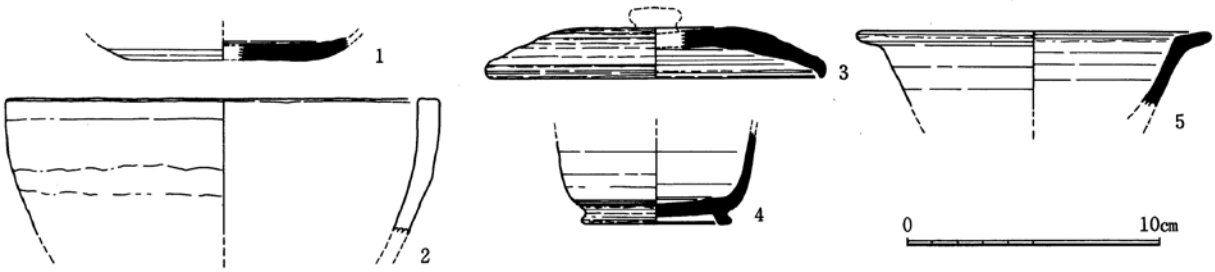


Fig-74　出土遺物実測図（縮尺1/3）

掘立柱建物

調査区内においては多数の柱穴が検出されたが、建物として復元できたのは２棟のみである。この他にも調査区外へと続く建物や他の住居などの遺構によって撹乱される建物が検出されたが、今回はSB-086・SB-087の２棟のみ報告する。

ＳＢ－０８６（Fig－75）

Ａ区中央部で検出された掘立柱建物である。梁間１間×桁行２間の建物となり、梁間全長1.85ｍ、桁間全長3.20～3.50ｍを測る。各柱穴の検出面から底部までの深さは、30～35㎝を測る。柱穴の埋土は暗褐色土で、底部には柱痕跡が検出される。建物の主軸はＮ－61°－Ｅとなる。遺物は少数が出土した。Fig－77に出土遺物を示した。１は須恵器の椀である。復元口径13.4㎝を測る。焼成はあまく色調は淡褐色を呈する。

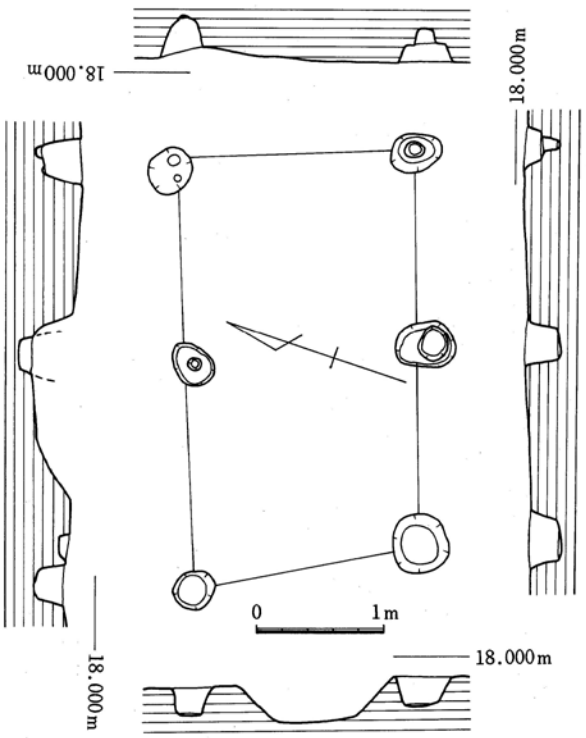
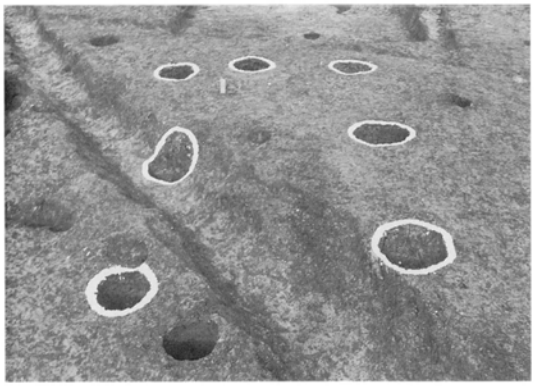


Fig-75　SB-086実測図（縮尺1/60）



Ph-94　SB-086検出状況（東から）

ＳＢ－０８７（Fig－76）

Ａ区中央部北側で検出された掘立柱建物である。梁間２間×桁行２間の建物であるが、東側は他の竪穴住居によって柱穴は失われている。梁間全長3.60ｍ、桁間全長4.25ｍを測る。各柱穴の検出面からの深さは20㎝～50㎝を測る。柱穴の埋土は暗褐色土で、底部には柱痕跡が確認できるものもある。建物の主軸はSB-086と同軸でＮ－61°－Ｅをとる。柱穴は30㎝～40㎝前後で平面形は円形または楕円形を呈する。これらの柱穴は住居完掘後に床面にて検出されたものもあり、住居群以前の遺構の可能性と住居群の存続中に同時に存在していた可能性の両方が考えられる。

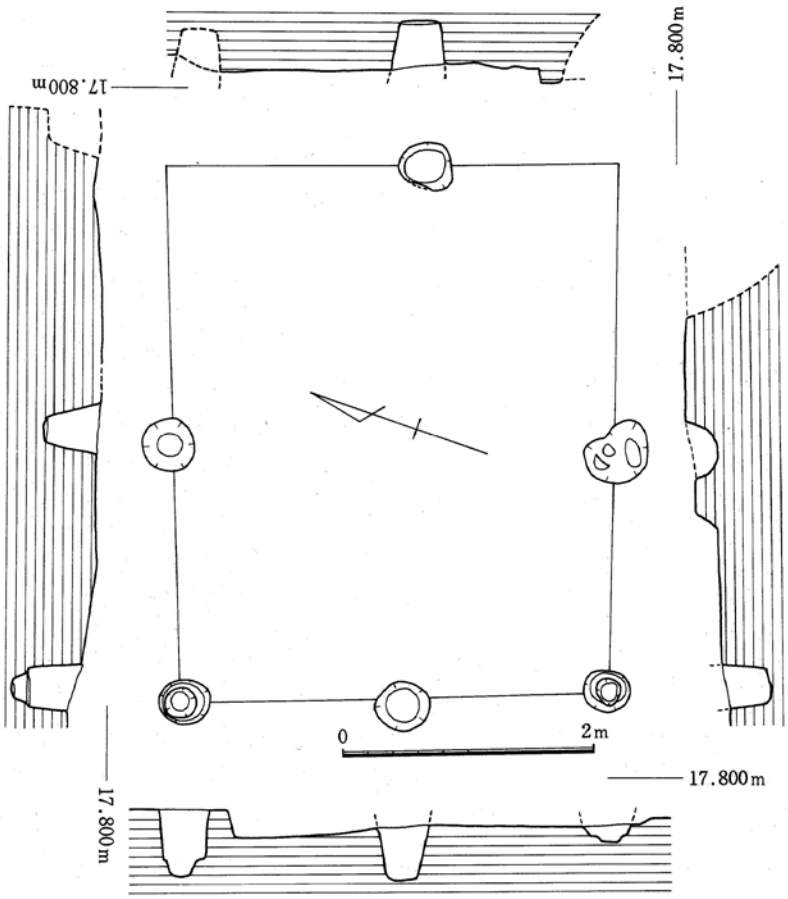
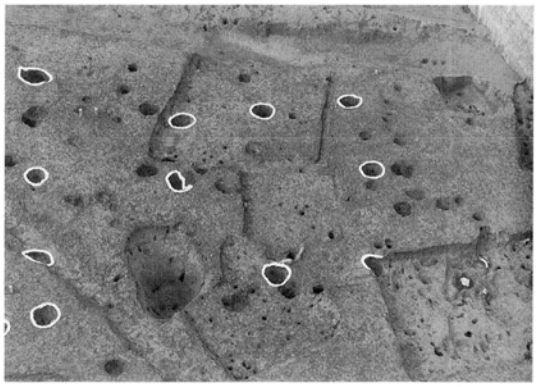


Fig-76　SB-087実測図（縮尺1/60）

遺物は柱穴の埋土から出土した。Fig－77に出土遺物を示した。２は須恵器椀の高台部片である。復元高台径は8.8㎝を測り、高台の断面形は台形を呈する。高台はヘラ切りされた底面の端部に貼り付けられ、ナデ調整によって成形される。焼成は良好で、色調は濃灰色を呈する。

古代における本調査地点付近は長期間にわたって居住地として利用されていたことが検出された遺構群から推測することができる。雑餉隈遺跡・南八幡遺跡・麦野Ａ・Ｂ遺跡内の他の調査区においては、遺構検出数は多いもの、今回のような数回にわたる建て替え住居が見られないため、比較的短期間の居住と考えられる。


Ph-95　SB-087検出状況（東から）

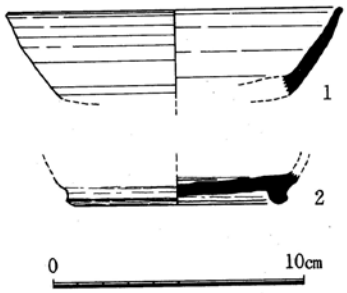


Fig-77　出土遺物実測図（縮尺1/3）

その他の出土遺物（Fig－78）

古代の遺構以外からも該期の遺物が出土し、古代の遺構から他の時期の遺物が検出されている。ここでまとめて報告する。Fig－78に出土遺物を示した。

1は須恵器の蓋である。復元口径12.4cm、器高2.4cmを測る。口縁端部の立ち上がりは内傾する。焼成は良好で、色調は灰褐色から黒褐色を呈する。SC-003から出土した。2は須恵器の埦である。復元高台径は8.4cmを測る。高台の断面形は台形を呈し、ヘラ切りされた底面の端部に貼り付けられ、ナデ調整が施される。焼成良好で、色調は灰褐色を呈する。SC-003から出土した。3は須恵器の埦である。復元口径15.4cm、高台径12.8cm、器高4.3cmを測る。高台の断面形は方形を呈する。焼成はあまく、色調は淡褐色を呈する。SK-011から出土した。4・5は土師器の皿である。4は口径8.8cm、底径6.4cm、器高1.0cmを測る。底部はヘラ切りされる。焼成は良好で色調は橙色を呈する。SP-144から出土した。5は口径9.0cm、底径6.6cm、器高1.3cmを測る。底部はヘラ切りされる。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。SK-112から出土した。6・7・9は土師器の坏である。6は復元口径13.2cm、底径9.2cm、器高2.3cmを測る。底部はヘラ切りされる。焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。SK-112から出土した。7は復元口径11.6cm、底径8.0cm、器高2.3cmを測る。底部は欠損するため切り離し方法は判然としない。SK-112から出土した。9は底径9.4cmを測る。底部はヘラ切りされる。焼成は良好で色調は褐色を呈する。SK-145から出土した。8は土師器の埦である。高台径は7.4cmを測り、高台の断面形は三角形を呈する。焼成は良好で色調は黒褐色を呈する。SK-145から出土した。10は須恵器の蓋である。復元径16.0cmを測り、摘みは欠損する。天井部にはヘラ切り痕が残る。焼成は良好で、色調は黒灰色を呈する。SC-158から出土した。11は瓦器埦である。底部は欠損する。復元口径は14.4cmを測る。外器面には横方向のヘラ磨きが施される。内器面は横ナデ調整が施される。焼成は良好で、色調は外面が黒色から灰褐色、内面が黒灰色から灰白色を呈する。SP-163から出土した。12は土師器の壺の口縁部片か。復元口径15.4cmを測る。外器面は口縁部付近に横ナデ調整が施され、それ以下では縦位の刷毛目調整が施される。内面は口縁部端部から2cm付近までは横方向の刷毛目調整が施され、それ以下ではヘラ削りが施される。焼成は良好で、色調は暗褐色からにぶい橙色を呈する。SD-108から出土した。13は須恵器の埦である。復元口径14.4cm、高台径9.8cm、器高7.2cmを測る。高台の断面形は方形で、ヘラ切りされた底面の端部近くに貼り付けられナデ調整が加えられる。焼成はやや甘く、色調は灰白色を呈する。SC-111から出土した。14は土師器の甕である。口縁部のみが出土する。復元口径20.8cmを測り、摩滅のため遺存状態はわるい。器面調整はナデ調整のみが観察できる。内面にはヘラ削りが施される。焼成は良好で、色調は外面が暗褐色、内面が橙色呈する。SK-112より出土した。15は須恵器の埦である。口径14.0cm、高台径8.2cm、器高4.2cmを測る。高台の断面形は台形を呈し、ヘラ切りされた底面の端部近くに貼り付けられる。焼成は良好で、色調は濃灰色から黒灰色を呈する。SP-178より出土した。

16は鉄斧である。袋状であるが、基部の一部が欠損する。長さ9.3cm、刃部幅4.9cm、基部幅3.2cm、基部厚2.0cmを測る。刃部側面には面取りを施している。古代の住居であるSC-106より出土したが弥生時代後期に属する遺物である。17は石製紡錘車である。半分は欠損する。復元直径は4.0cm前後で、厚さ1.2cm～1.3cmを測る。滑石製で、片面には「十」状の線刻が施される。SC-007より出土した。18は滑石製の鉢である。復元口径22.6cm、器高3.8cmを測る。外面には下位から行われた剝離痕が観察できる。内面は蚤状の工具で刳り抜かれ、斜め上方から行われた剝離痕が明瞭に観察できる。口縁端部は横方向に削られ凹凸を修正する。SC-096から出土した。

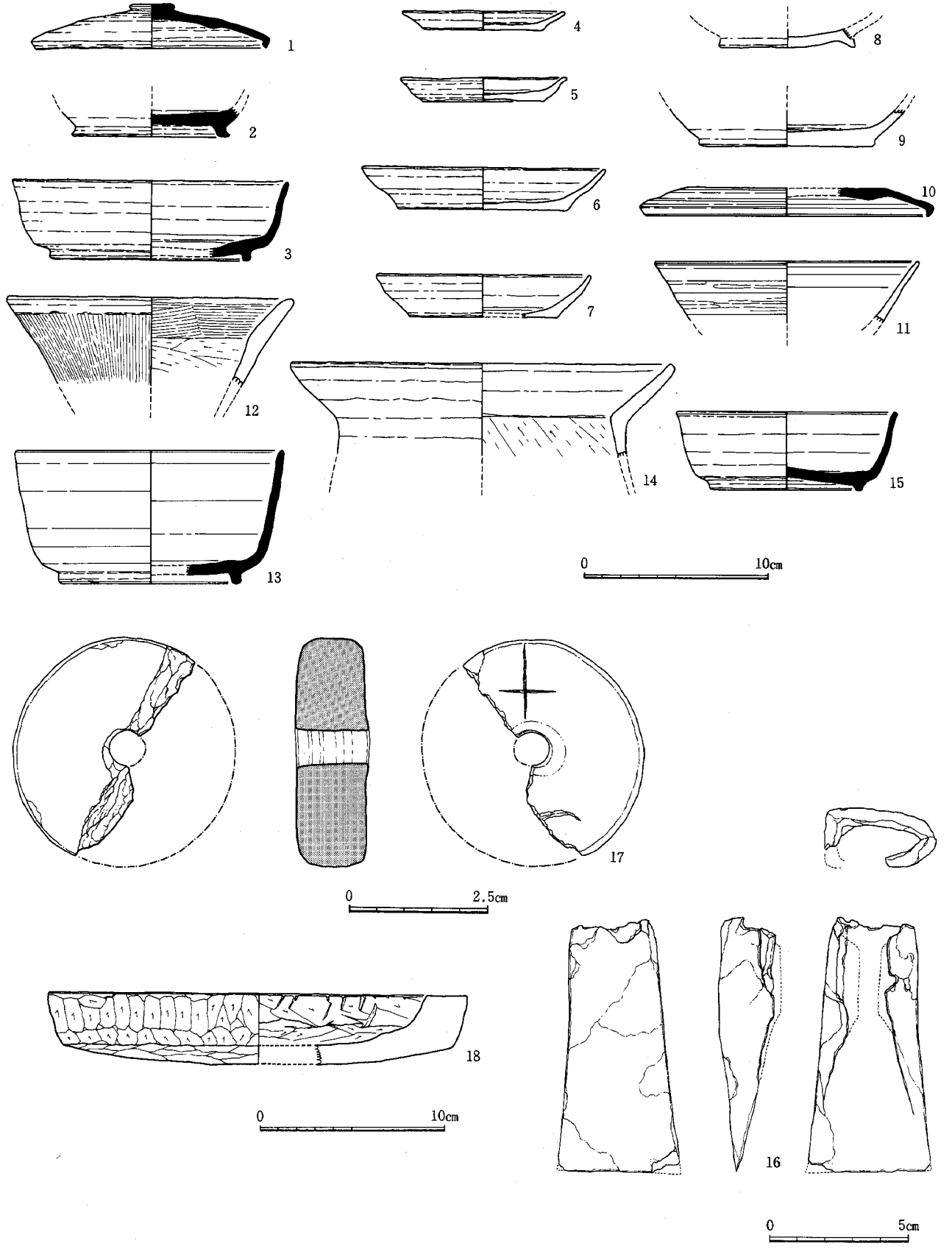


Fig-78　その他の出土遺物実測図（縮尺1/1.1/3.2/3.1/4）

4．中世の遺構と遺物

これまで麦野Ｃ遺跡内の調査では中世の遺構は検出されていなかったが、本調査では溝３条・土壙墓１基・方形竪穴状遺構１基などを検出した。西側に近接する麦野Ａ遺跡第１次・第４次地点では中世前半期の集落と15世紀代の集落の調査が行われているが、周辺の雑餉隈遺跡・南八幡遺跡内では該期の遺構の検出例は少なく、その分布は限定されている。麦野Ｂ遺跡第１次調査では中世の井戸が検出され、麦野遺跡全域に散漫ではあるが中世の集落が展開していたと考えられる。

ＳＸ－００１（Fig－79）

Ａ区南東端部で検出された方形竪穴状遺構で平面プランはほぼ長方形で長軸が3.80ｍ～4.60ｍ、短軸が1.86ｍを測る。床面はほぼ平坦で柱穴などは検出されなかった。検出面から床面までの深さは30㎝前後を測り、土坑内にはしまりのない暗褐色土が堆積していた。遺物は東側底面に集中しており、白磁碗・青磁碗・国産陶器などが出土した。

Fig－81に出土遺物を示した。青磁・白磁の分類は「博多出土貿易陶磁分類表」に準じた。

１は白磁の碗である。復元口径14.6㎝を測り、復元高台径は5.0㎝を測る。高台部は一部欠損する。高台は露胎で、口縁部下には浅い沈線が巡り口縁部は水平に整えられる。釉調は濁乳白色を呈する。２は青磁碗である。いわゆる龍泉窯系青磁碗で、復元口径16.0㎝を測る。内面には片切彫りによって雲文を施す。器外壁は無文である。Ｉ－６類。３も同様の龍泉窯系青磁碗である。復元口径16.0㎝を測る。内面には雲文を施す。４も龍泉窯系青磁碗の高台部片である。復元高台径は7.6㎝を測る。内面見込みに片切彫で文様を施す。畳付きまで施釉される。５は器外壁に櫛描文を施す青磁碗で、同安窯系青磁である。高台径は4.8㎝を測り、外底部まで施釉される。６は龍泉窯系青磁碗である。高台径は5.4㎝を測り、畳付きから露胎とする。内面には櫛描文と片切彫によって文様を施す。７も龍泉窯系青青磁碗である。復元口径16.8㎝を測り、外器壁には鎬連弁文を施す。

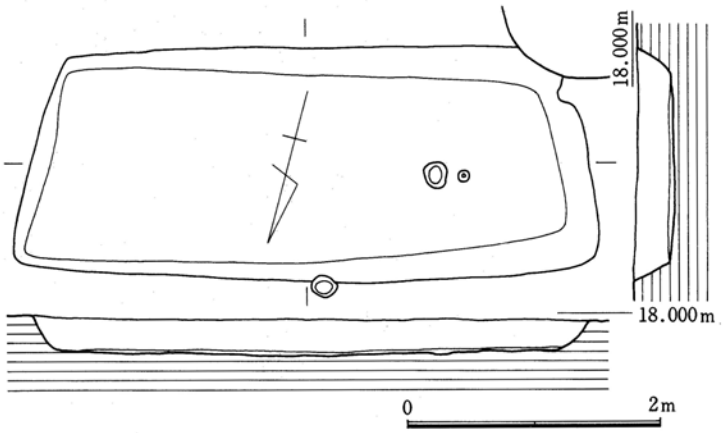
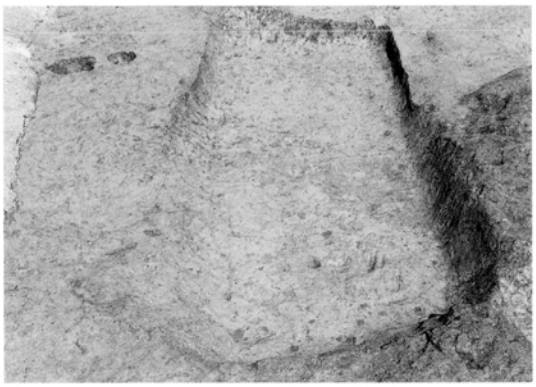
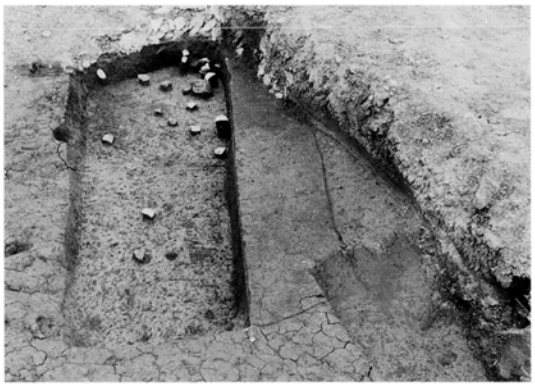


Fig-79　SX-001実測図（縮尺1/60）



Ph-96　SX-001完掘状況（西から）



Ph-97　SX-001遺物出土状況（西から）

ＳＸ－１０１（Fig－80）

Ｂ区中央部西側で検出した土壙墓である。平面形は方形を呈し、検出面での規模は長さ1.65ｍ、幅1.00ｍを測り、検出面から深さ20㎝の地点で段を設けて墓壙を掘削する。この段は蓋の痕跡であろうか。墓壙の規模は長さ1.32ｍ、幅75㎝を測る。一段目はSC-092の西側壁に重複して掘削される。検出面から底面までの深さは65㎝前後を測る。一段目はロームブロックを大量に含む暗褐色粘質土で密閉される。この暗褐色粘質土はしまりがあり約20㎝程堆積する。二段目の墓壙内にはしまりのない暗褐色土が堆積する。底面直上には黒褐色粘質土が堆積する。土層断面において木棺の痕跡を精査したが検出はなかった。墓壙の主軸はＮ－15°－Ｗをとる。墓壙底面北側から青磁碗が出土した。おそらく頭部付近に副葬したものであろう。遺物は埋土の中から土師器の坏片などが出土した。

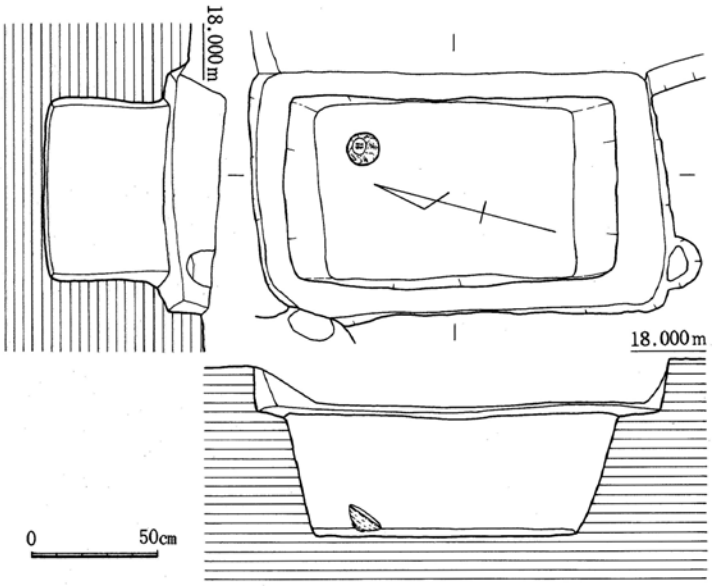
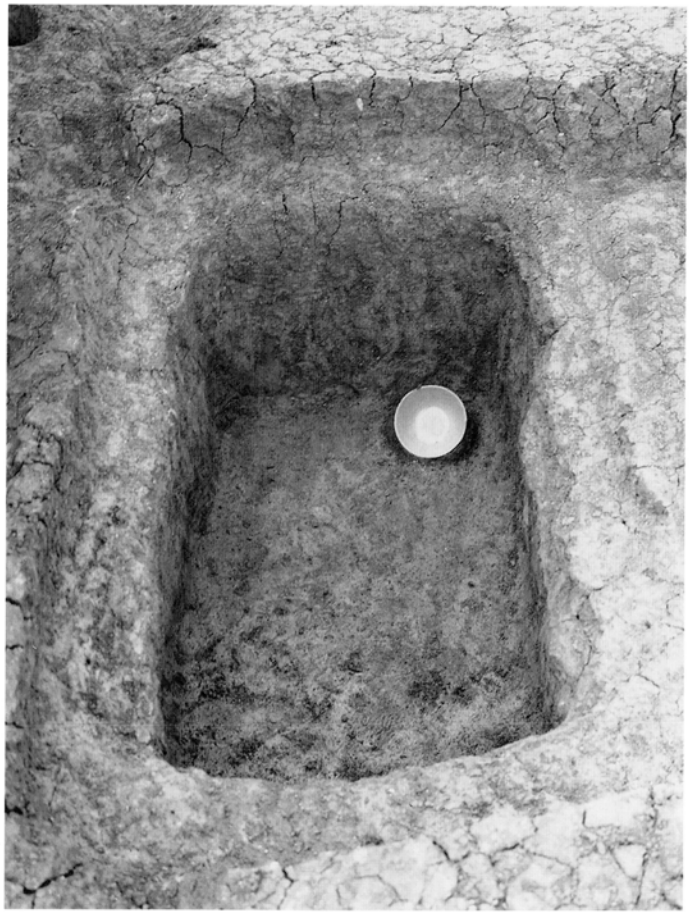


Fig-80　SX-101実測図（縮尺1/30）

Fig－81に出土遺物を示した。

８は青磁碗である。いわゆる龍泉窯系青磁である。土壙墓底面から出土した完形品である。口径16.8㎝、高台径6.7㎝、器高6.8㎝を測る。畳付き中程から内底面を露胎とする。内面壁を片切彫で五区分しその中に雲文を施す。内底面中央に「金玉満堂」のスタンプを施す。釉調はオリーブ灰色を呈する。

Ph-98　SX-101土層断面（北から）



Ph-99　SX-101完掘状況（南から）

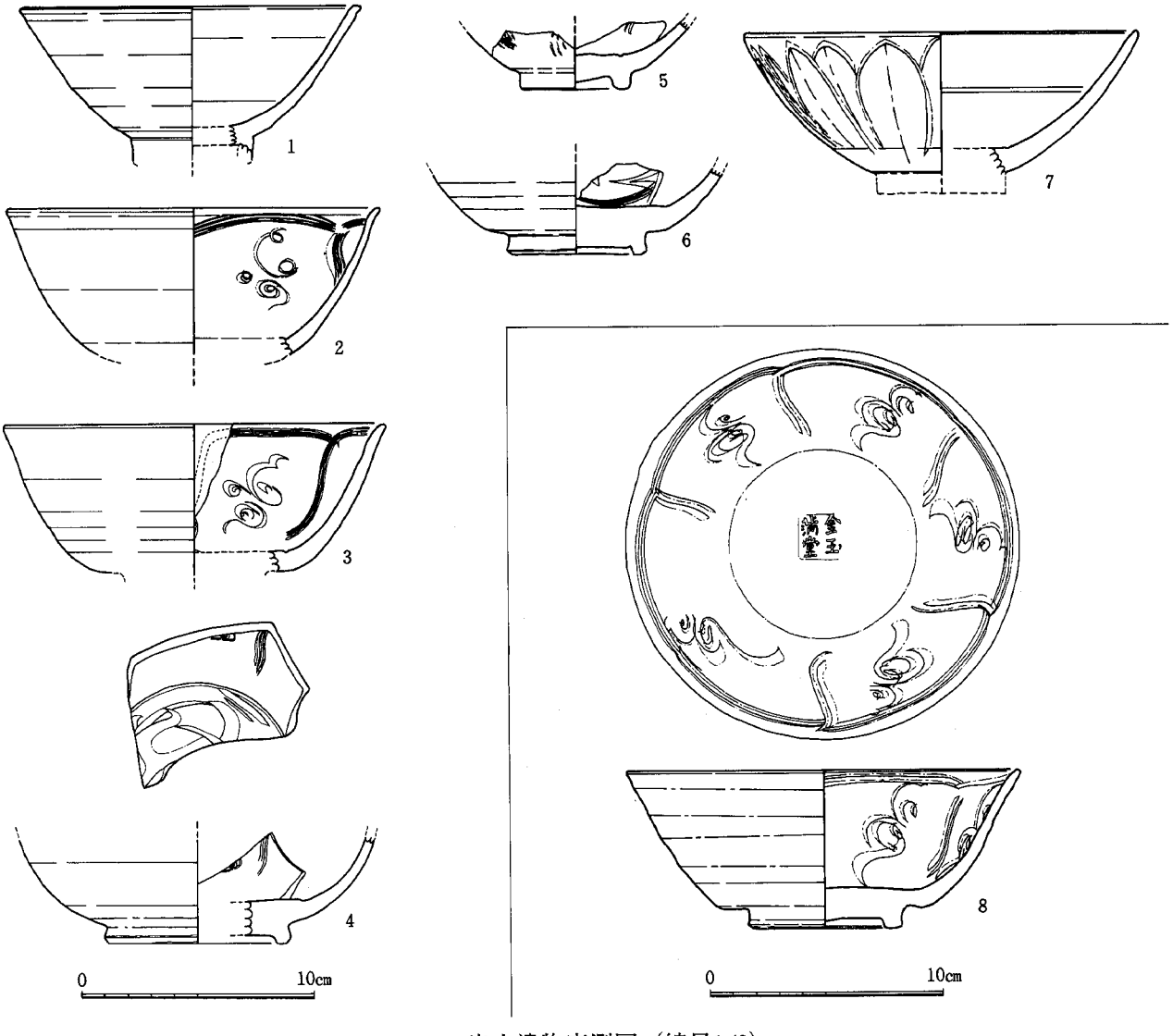


Fig-81　出土遺物実測図（縮尺1/3）

SD－004・005・009（Fig－82）

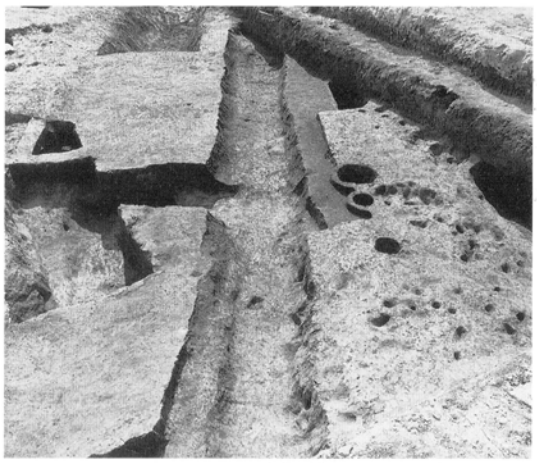
A区西側で検出した溝で、調査結果から掘削順序はSD-009→SD-005→SD-004の順を復元できる。調査区内で検出された部分はほぼ直線的で、この両端が曲がるのか、伸びるかは今回の調査では判明しなかった。本調査地点の北側に位置する第1次調査地点はこれらの溝の方向上にあたるが、調査時にはこれらの溝または類する溝は検出されていない。北側については両調査地点の間の未調査部分内で東側に折れ曲がるものと考えられる。南側方向については開発によって調査区より大幅に地下げされており、この溝の底面より標高は低くなっており、遺構は完全に消滅しているものと考えられる。SD-004は上部幅78cm～80cm、底面幅40cm前後を測り、検出面から底面までの深さは25cm～30cmを測る。断面は台形を呈する。主軸方向はN－7°－Wをとる。SD-005埋土内に掘削される。掘り直されたものであろう。SD-005は上部幅1.05m～1.10m、底面幅75cm～80cmを測り、検出面から底面までの深さは40cm～50cmを測る。断面は台形を呈する。主軸方向はSD-004と同様にN－7°－Wをとる。南側ではSD-009を切るように掘削される。溝の底面は南側に向かって高くなる。埋土はSD-004・SD-005ともにしまりのない暗褐色土で、埋土中から土師器・白磁などの遺物が出土する。SD-009は上部幅

1.80m～2.00m、底面幅80cm～90cmを測り、検出面から底面までの深さは75cm～80cmを測る。断面は台形を呈し、主軸方向はN－11°－Wをとる。埋土は他の溝と同じくしまりのない暗褐色土で、底面には水性堆積層の痕跡は確認できず、空堀であった可能性が考えられる。底面は南側に向かって高くなり、北側では低くなる。溝の東側肩には等間隔で並ぶ柱穴が検出された。溝に沿って柵列が付設されていたとすれば、居住区は溝の東側に展開していたと考えられよう。溝の西側の調査が行われていないため推定の域を出ない。調査区東側方向には嘉暦三年の造立年が刻まれた板碑をもつ日吉神社が存在する。

Fig－83に出土遺物を示した。

1は土師器の皿である。口径5.4cm、底径4.0cm、器高1.25cmを測り、底部は糸切りされる。焼成は良好で色調は褐色を呈する。SD-004から出土した。2は土師器の皿である。口径8.2cm、底径7.1cm、器高1.0cmを測る。底部は糸切りされ、体部の立ち上がりはなく扁平な皿である。焼成は良好で色調は褐色を呈する。SD-108より出土した。3は土師器の坏である。口径9.5cm、底径7.0cm、器高1.8cmを測り、底部は糸切りされる。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。4は白磁の碗である。SC-029の埋土から出土したが本来はSD-004・005に伴うものであろう。5は白磁の碗である。SD-004より出土した。体部中程を欠損するため同一個体かは判別しなかったが、口径16.0cm高台径7.2cmを測る。口縁部は水平に整えられる。底部は外底部まで施釉し、畳付きから露胎とする。内底部周囲に沈線を巡らす。釉調は淡灰白色を呈する。6は白磁碗の高台部片である。高台径は6.8cmを測り、高台部は露胎とする。内底面の釉は輪状に掻き取る。SD-005から出土した。7は白磁碗である。口縁部は玉縁状を呈する。体部中程まで施釉し、以下を露胎とする。復元口径は16.8cmを測る。釉調は乳白色から乳灰白色を呈し、全体に氷裂がはしる。SD-005より出土した。8は青磁碗である。同安窯系青磁である。小破片である。外器壁には櫛描文を施し、内面には片切彫と櫛描文で文様を施す。釉調は淡緑色で全体に氷裂がはしる。SD-008より出土した。9は瓦質土器の擂鉢である。復元口径22.0cmを測る。口縁部下には二条の凹線が巡る。体部は指押さえと斜格子状に施された刷毛目調整が観察できる。内面には重複する斜位の刷毛目調整が施される。焼成は良好で、色調は外面が黒褐色から黒灰色、内面が灰白色を呈する。

Ph-100　SD-004完掘状況（北から）



Ph-101　SD-005完掘状況（北から）

Ph-102　SD-009完掘状況（北から）

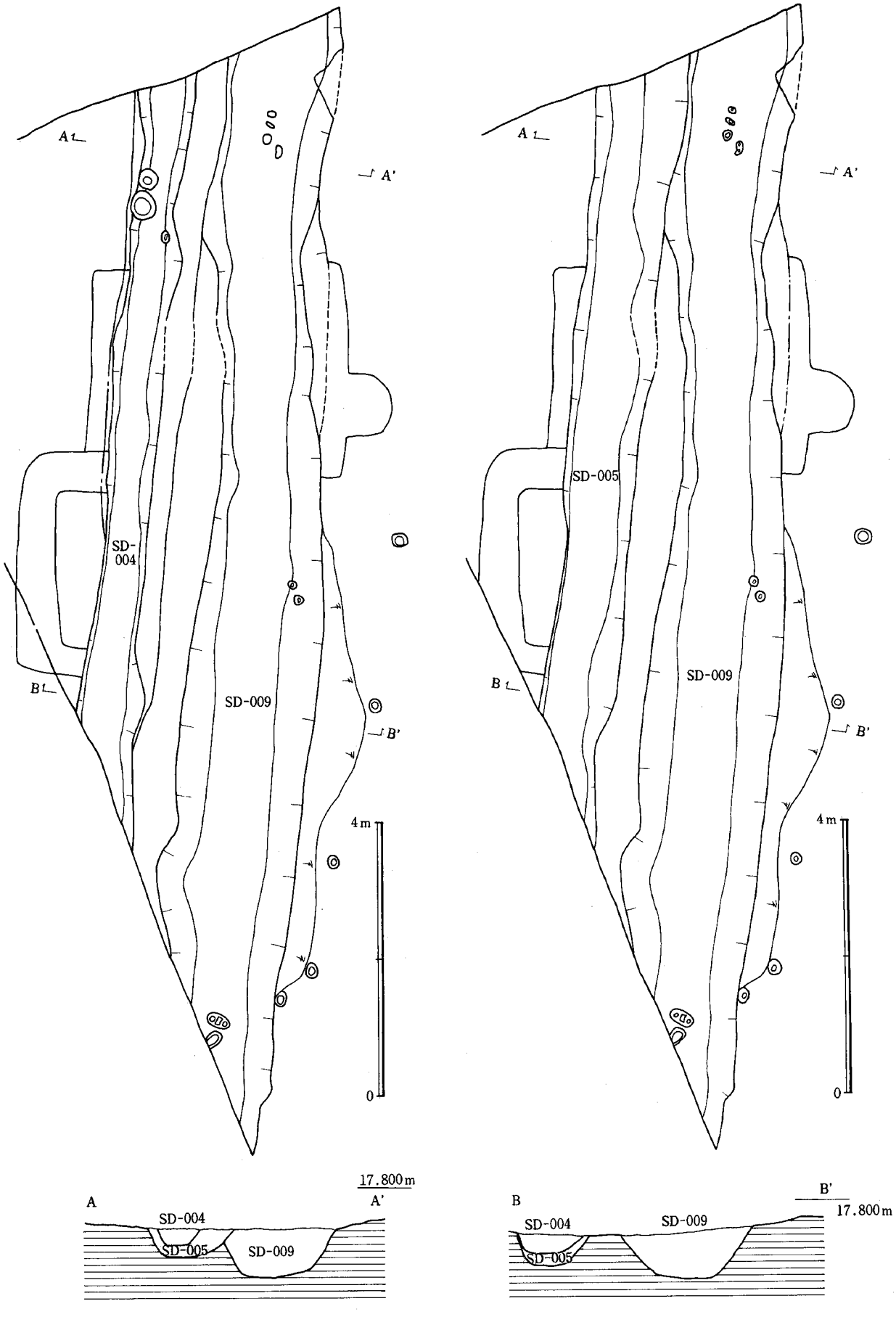


Fig-82　SD-004・005・009実測図（縮尺1/80）

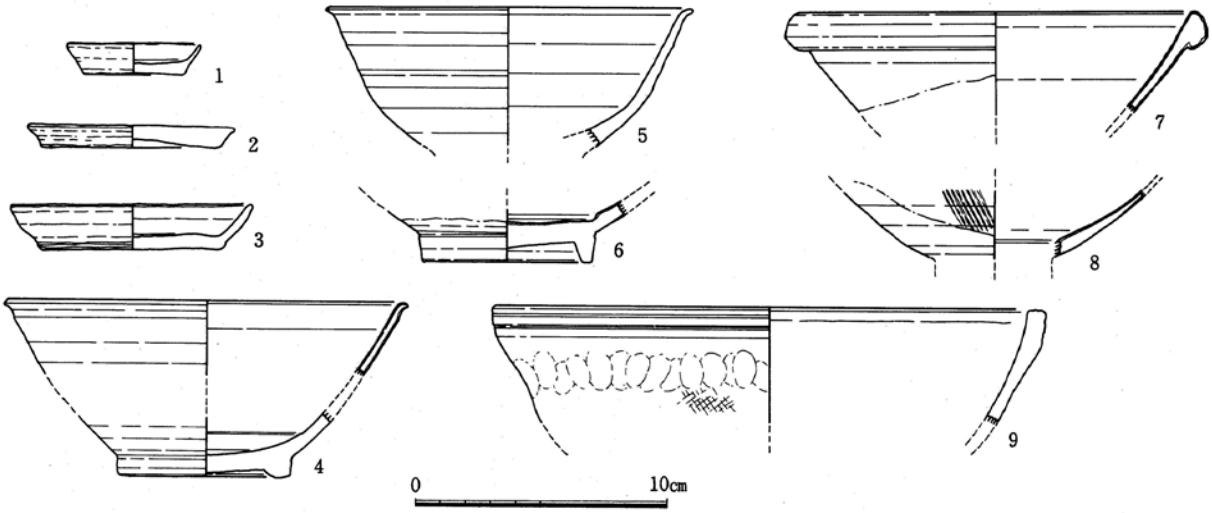
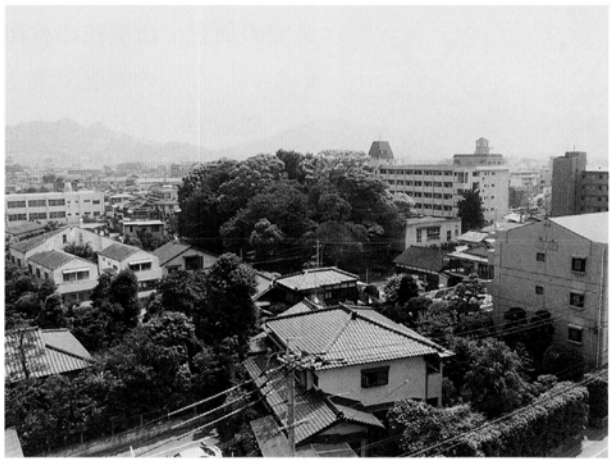


Fig-83　出土遺物実測図（縮尺1/3）

本調査地点で検出された方形竪穴状遺構・土壙墓・溝の年代は出土遺物より12世紀後半から13世紀代までの年代を考えることができよう。検出された遺構が特殊なものであり、生活の痕跡となる建物跡・井戸などは検出されなかったため、集落の様相を把握するまでには至らなかった。今回は報告できなかったが、SD-004・005・009に平行するように掘削された溝が調査区内を南北に縦断する。検出された遺物から中世末から近世にかけての遺構と考えられ、この時期までSD-009などによって画された区画が存続していたことを示す資料である。この他にはSD-008・SD-108等の遺構を検出したが、SD-009とはどのような関係があるのかは把握できなかった。本調査地点の西側に位置する日吉神社の嘉暦三年の造立年を刻む板碑は、この時期に周辺に集落またはそれに類する生活空間が展開していたことを推定できる資料と言える。日吉神社の建立は板碑造立以前であろうから、今回の調査の成果によって、その推定が証明されたと言えよう。今後の更なる調査に期待したい。



Ph103　調査区より日吉神社を望む（東より）

第三章　ま　と　め

以上、簡単であるが麦野Ｃ遺跡群第５次調査の概要について述べてきた。最後に各時期の簡単なまとめと今後の調査における問題点の指摘を行いたい。

（一）弥生時代の遺構・遺物について

本報告で述べてきたように麦野Ｃ遺跡内での弥生時代の遺構検出は本調査区が始めてであり、遺跡範囲内での、該期の遺構分布状況は現段階では不明な点が多く残るが、今後の調査で明らかにされることを期待したい。本調査区では弥生時代前期末の方形住居・小児甕棺、中期末から後期初頭にかけての方形住居群を検出した。この時期の遺構は、古代から中世にかけての後世の削平により大部分が失われており遺存は浅いか、または消滅しているため、周辺の調査区においては遺構として検出されず、遺物のみが出土したものと考えられる。本調査区は宅地化された周辺に比べ、１ｍ以上高く残存するため検出できたのであろう。

本調査区で検出されたSC-012・SC-092の両住居は時期が異なるものの、住居長軸壁に斜めに掘削する柱穴をもつタイプの住居で、入部遺跡で類例が報告されている。斜め方向に掘削された柱穴は、検出時には柱穴の抜き取り痕とも考えられたが、土層観察・検出状況より最初から斜めに打ち込まれた柱穴であったことが確認された。これらの住居の上屋構造は他の住居と異なり比較的簡単なテント構造のものが想定されることから、長期間の居住に主眼がおかれたものではなく、短期間の利用を目的に構築されたものと考えられ、一定の期間のみ使用され廃絶後に廃棄用に転用されたものであろう。

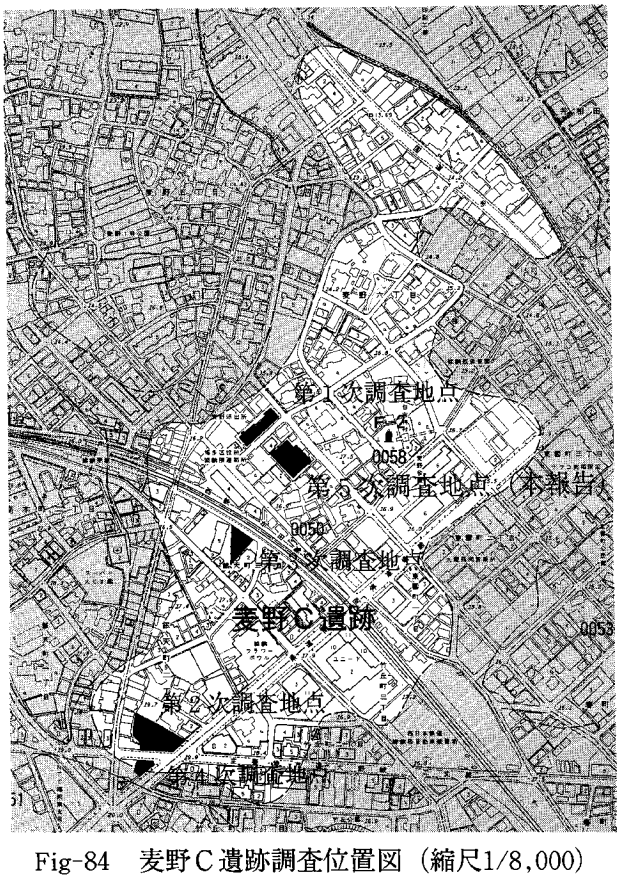


Fig-84　麦野Ｃ遺跡調査位置図（縮尺1/8,000）

他の同時期の住居からの遺物の出土は少ないが、SC-092からは意図的に集中廃棄されたと見られる土器が多量に出土することから、特殊な用途を考えることができる。また、単独で住居床面に存在する深さ1.85ｍを測る柱穴は、通常の住居の構造からは説明できない。本調査の結果からは殯屋の可能性を考えたい。

SC-092内から出土した大型の甕は、甕棺葬に使用される大きさのものに分類されるが、周辺のこれまでの調査では甕棺の検出・調査事例は報告されていない。今回の調査で集落遺跡が検出されたことから、周辺のいずれかの地点（すでに消滅している可能性もあるが、）に墓域が存在していたことは容易に推定できよう。

麦野遺跡群内での弥生時代の調査は、今回の遺構群の検出によって開始されたばかりであり、今後の周辺域における調査に期待したい。

（二）古代の住居について

本調査地点では調査面積871㎡中で古代に属する住居が45軒以上検出され、これまで調査された中で群を抜く分布密度をみせる。検出された住居群の大半は出土遺物から８世紀後半代に位置づけられ、この時期の分布密度としては５～７軒／870㎡程度となる。また、住居群の切り合い関係から８世紀後半代の約半世紀の間に５回前後の建て替えが行われたことが分かる。従来、竪穴住居の耐用年数は10年～30年前後と考えられてきた。約半世紀という期間内で５回前後の建て替えであり、各住居の存続使用年数には比較的ばらつきがあるものと考えられるが、本調査区で検出された住居群については10年～15年毎の建て替えを推定した。また、火災・天災などの突発的な理由によって建て替えられる可能性も考えられるが、本調査地点の住居群内からは焼失住居は検出されなかった。この10数年単位という期間がどのような意味合いを持って設定されたものかは、今回の調査成果からは言及すること

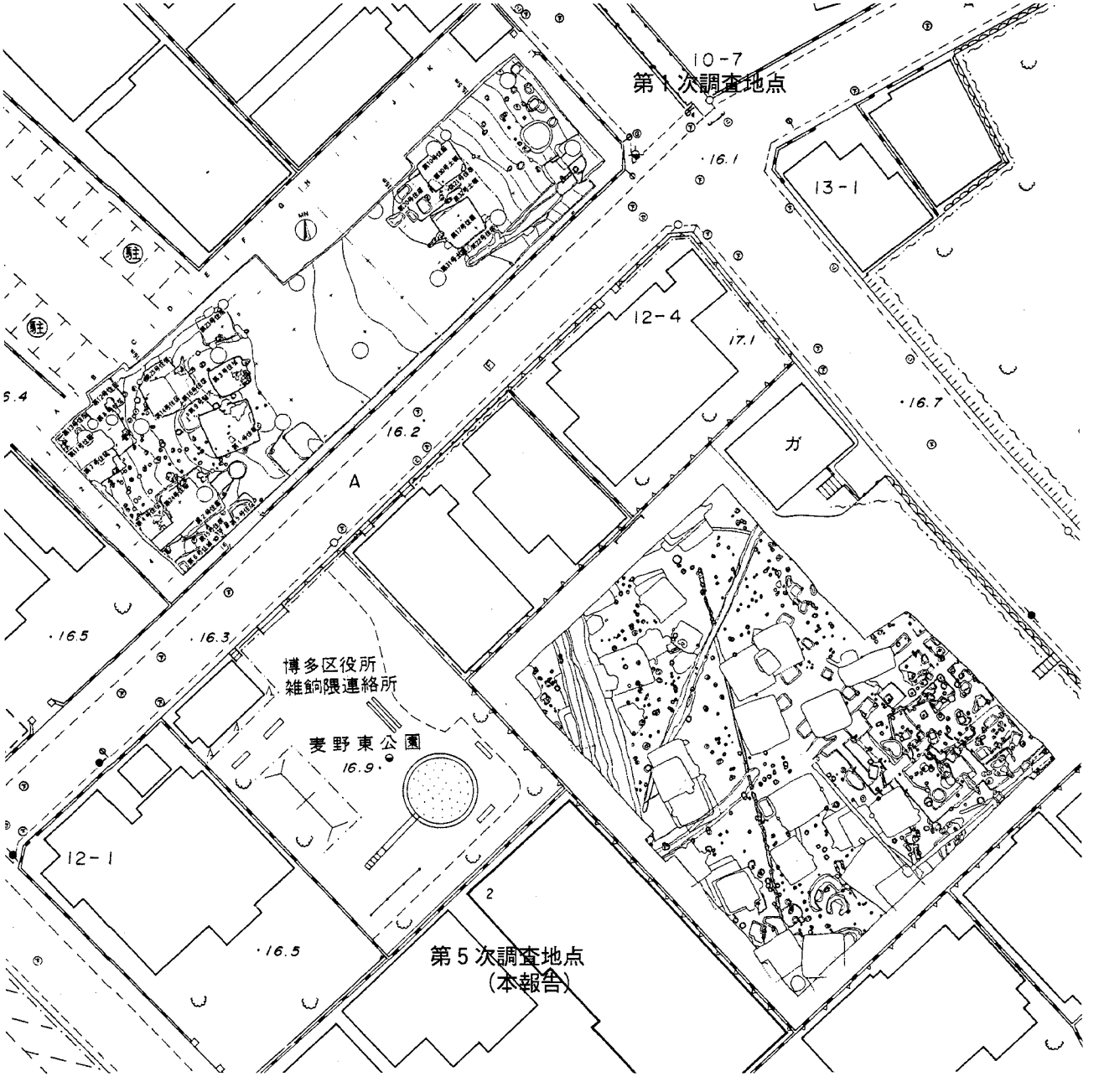


Fig-85　第１次・第５次調査位置図（縮尺1/500）

はできない。成人・婚姻・死亡などが起因となる家族構成員の増減が影響しているものであろうか。また、この住居構築から廃絶までの10年前後の単位時間が、他の調査区で検出された住居群に対しても当てはまるかどうかは現段階では不明である。今後の検討を要する課題である。

今回検出された住居群に対しては以下の項目で分類を行った。

竈の構造		竈の位置・方向		住居の規模		一次掘削痕	
1	作り付け型	A	竈位置不明	Ⅰ	1辺が2.2m以下の住居	a	一次掘削痕が確認できない住居
		B	竈が南方向				
2	コーナー型	C	竈が西方向	Ⅱ	1辺が2.4m～3.2m程の住居	b	中心から周辺に掘り広げた住居
		D	竈が東方向				
3	張り出し型	E	竈が北方向	Ⅲ	1辺が3.2m以上の住居	c	周辺から掘り下げた住居

これらの項目で住居39軒について分類を行ったのが結果を第1表で、分類結果を基に出土遺物の時期・各住居の切り合い関係から判明した6期以上の住居の変遷を第2表・Fig-86で示した。

第一項目である竈の構造については、他の住居で攪乱されたり検出できなかったものが40％を越え、作り付け型のものが15％、コーナー型のものが10％、張り出し型のものが33％となる。この差は時期的なものではなく、住居の規模に関連するもので、張り出し型とした竈はⅡ類とした住居に多く見られる。5回の建て替えを行う住居群内でも竈の構造について連続性・統一性は見られない。

第二項目とした竈の位置・方向については、不明なものが38％を越え、南方向に付設されたものが5％、西側方向に付設されたものが同じく5％、東側方向に付設されたものが43％となり、竈が北側方向に付設された住居は検出されなかった。平坦な場所に展開する住居群では、地形的な制約によって影響を受けにくいため、時期的な傾向を明らかにすることが可能であろう。しかし本調査地点のように丘陵頂部付近に展開する住居群では、土地の傾斜・住居の位置などの地形的制約が大きく、竈の位置・方向についての明確な時期差を明らかにすることはできなかった。本調査地点で検出された切り合う住居群での傾向としては、おおよそ東方向→西方向→南方向という変化が見られる。とくに南方向に付設するタイプは、出土遺物から新しい段階において見られる傾向と考えられる。全体の時期を通して東側に付設されるものが多いのは、調査地点が西側斜面上に位置していること、住居の大半がその斜面上で検出されたことが影響しているものと考えられる。第5次調査地点から北に25mと近接する第1次調査地点では同時期の住居が23軒検出され、その調査結果から竈の位置・方向については、同時期において南方向→西方向→東方向→北方向という変遷が明らかにされており、今回の結果とは大きく異なる。第1次調査地点の住居群は、大きく分けて丘陵頂部付近の西側と東側の斜面に位置する。頂部付近は削平され、住居の検出はないが、本来は頂部にも住居群が存在していたものと考えられる。両斜面上の住居群は異なる地形条件ながら、同様な竈の位置・方向の傾向をもつ。同時期の近接する場所であっても異なる傾向が示されるという結果は、竈の位置・方向という要素が集落全域内の全体的な時期差・傾向ではなく、各々の住居群が位置する環境・構成集団によって変化・対応する可能性があろう。また、第1次調査地点で検出された住居に付設される竈は、長い煙道を伴うタイプのものが多くみられるが、本調査地点でのこのような煙道を伴う竈の検出はわずかに数基のみで、竈の構造についての傾向も、近接する同時期の住居群でありながら異なる点は、今後注意して検討しなければならない。

第三項目とした住居の規模については1辺が2.2m以下の住居が全体の5％程度、1辺が2.4m～3.2m程度の住居が約59％、1辺が3.2m以上の住居が33％となる。これらの時期的な分布を見ると、

		規　模	分　類	備　考			規　模	分　類	備　考
1	SC-002	3,25×3,15	2DⅢa		21	SC-036	一辺2,60	AⅡa	
2	SC-006	3,00×3,50	AⅢa		22	SC-093	一辺3,40	AⅢa	
3	SC-007	3,40×3,50	2DⅢa		23	SC-095	3,15×3,18	3DⅡb	
4	SC-014	1,90×2,10	3DⅠa		24	SC-096	2,60×2,71	1DⅡa	
5	SC-017	3,10×3,20	1DⅡa		25	SC-097	3,10×3,10	3CⅡa	
6	SC-027	2,90以上	3DⅡc		26	SC-098	2,59×3,24	3DⅡa	
7	SC-031	一辺2,85	AⅡa	1D？	27	SC-100	3,30×3,45	2CⅢa	
8	SC-032	一辺2,80	AⅡc	1D？	28	SC-102	3,10×3,28	1DⅢa	
9	SC-026	一辺2,60	3DⅡc		29	SC-041	2,85×3,00	1BⅡa	
10	SC-028	一辺3,55	AⅢc	1D？	30	SC-103	3,10×3,60	2CⅢb	
11	SC-029	一辺3,00	AⅡc	1D？	31	SC-107	2,20×3,00	3CⅡb	
12	SC-080	一辺2,20	AⅠ	1D？	32	SC-109	2,90×3,00	AⅡ	2C？
13	SC-083	一辺3,00	DⅡb		33	SC-110	3,00×3,30	1DⅢb	
14	SC-037	一辺2,80	AⅡa		34	SC-104	2,80×3,00	3BⅡb	
15	SC-038	一辺3,80	AⅢa	3D？	35	SC-105	2,95×3,20	3DⅢb	
16	SC-039	一辺2,90	AⅡc		36	SC-114	一辺2,80	AⅡa	3D？
17	SC-040		3D		37	SC-115	一辺3,20	AⅢa	3D？
18	SC-079	一辺3,00	3DⅡc		38	SC-106	2,70×3,10	3DⅡb	
19	SC-034	2,60×2,80	3CⅡb		39	SC-139	3,30×4,00	AⅢa	
20	SC-035		1DⅡb						

表1．古代住居分類表

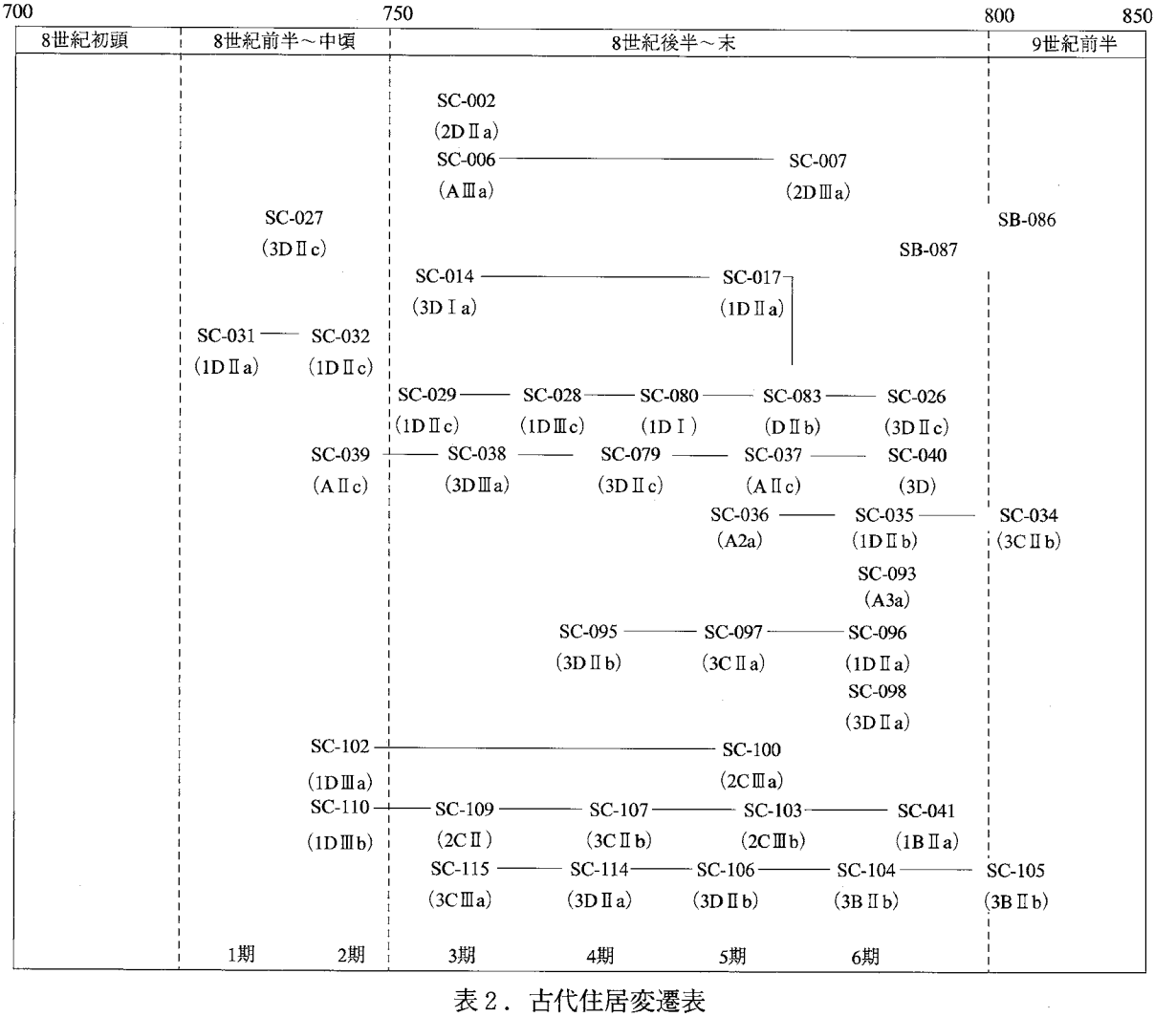


表2．古代住居変遷表

住居群の初期段階に１辺が3.2m以上の住居の割合が多く見られるようであるが、全般的には１辺が2.4m～3.2m程度の住居が標準的なものとして構築されおり、住居の規模に関しては時期的な違いではなく、各段階における集落の集団構成の違いを現したものと考えられる。

第四項目の住居構築時における掘削痕の状況については、一次掘削痕が確認できないもの、つまり床面が平坦に掘削され床面が形成されるもの（ａ類）が48％、住居中央部から掘削され中央部の貼床が厚く貼られるもの（ｂ類）が25％、住居壁周辺から掘削され中央部の貼床が薄いもの（ｃ類）が33％となる。この分類について明確な時期差は見られないが、単独で存在する住居・住居群の中でも初期段階のものに丁寧な掘削作業を必要とするａ類が多く見られる。現段階ではこのような工程・工法の差を集団・時期の差違として把握することはできない。

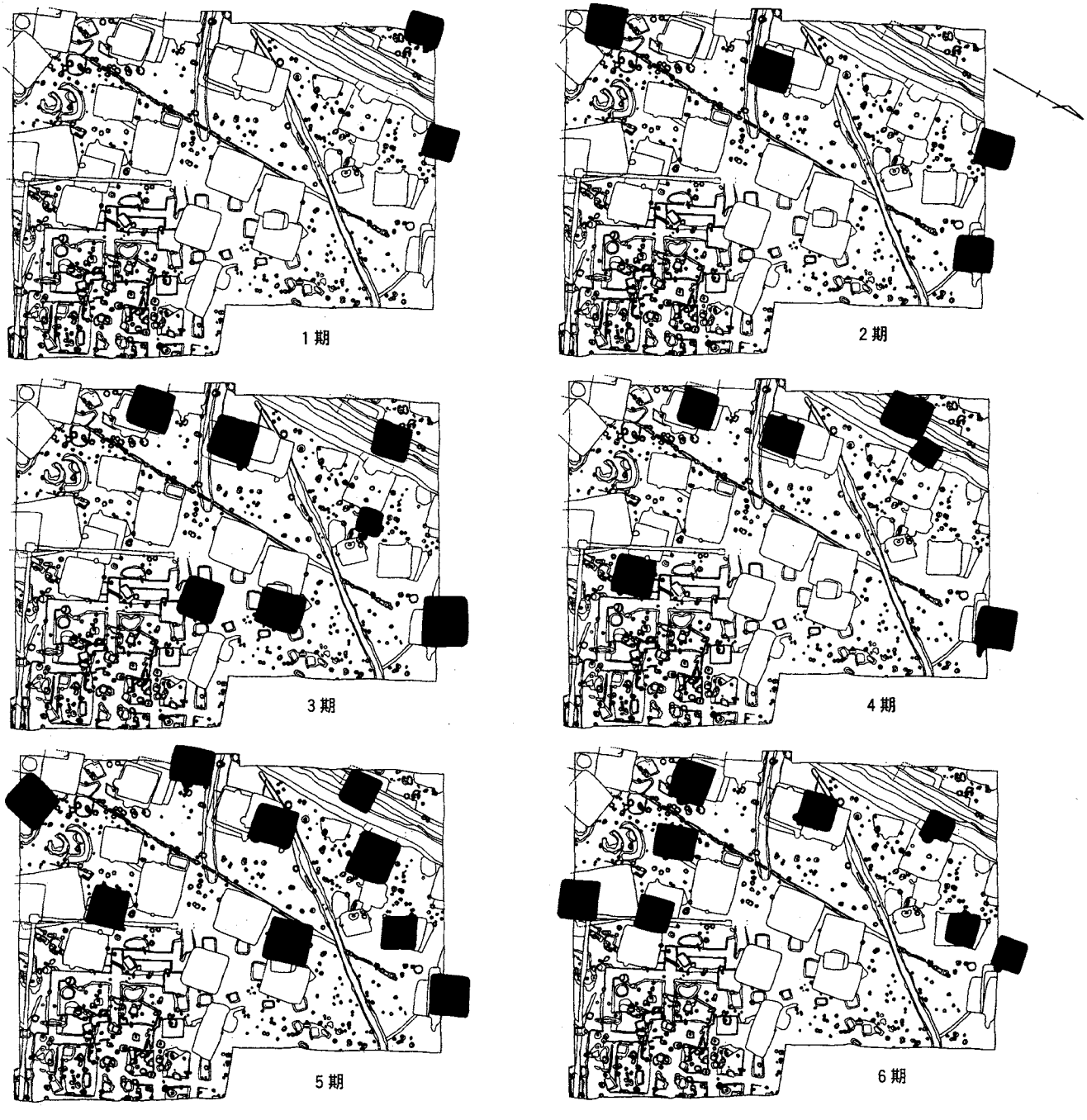


Fig-86　古代住居変遷図（縮尺1/500）

以上、簡単ではあるが各分類項目の時期的な分布について見てきた。Fig-86に示した住居の変遷図は前後関係・出土遺物より大まかに作成したもので、各住居の段階は多少前後するが、これより住居群が時期毎に直線的な配置や複数の配列関係などの規則性を持って構築されたことが読みとれよう。

今回の調査を含めた麦野A～C遺跡・雑餉隈遺跡・南八幡遺跡全体で検出された8世紀代全般の遺構数を総計すると、竪穴住居約190軒、掘立柱建物約45軒以上を数える。これらの遺跡群内の調査は部分的なものであることから今後さらに検出数は増加するものと考えられる。住居群は、これらの遺跡群内のほぼ全域に展開しており、この付近一帯が大規模な居住地であったことがわかる。検出された住居群全体に今回用いた分類項目が適用できるかどうかは、今後の検討を必要とする。仮に住居群のグルーピングが可能ならば、集落全域の構造を究明する重要な手掛かりとなるであろう。

麦野C遺跡の北側約700mに位置する井相田C遺跡では7世紀末から9世紀前半まで遺構群が検出され、8世紀中頃から後半にかけては主に掘立柱建物群から構成される集落が形成される。第1次・第2次調査では人面墨書土器・墨書土器・木簡などが出土し、公的施設の可能性が考えられている。井相田C遺跡群は御笠川左岸の微高地上に位置しており、これに対して麦野遺跡群は丘陵上に位置する。両遺跡の間には古代の大宰府から北方向へのびる官道が存在し、この官道にたいして麦野C遺跡がもっとも近接した場所に位置しており、雑餉隈遺跡・南八幡遺跡などは丘陵背面に位置する。雑餉隈遺跡・南八幡遺跡・麦野A遺跡などでは比較的散漫な分布をみせる住居が、麦野C遺跡の第1次・第5次地点では濃密に分布するのは官道に面した立地条件の影響であろうか。一方が墨書土器・木簡を持つ掘立柱建物群で構成される集落で、一方は竪穴住居群で構成される集落であることから、この同時期に近接した場所に展開する両遺跡の性格としては、官人などの上位集団の集落と労役集団の集落という見方もできよう。井相田C遺跡に集落が展開し始めた頃の麦野遺跡・雑餉隈遺跡・南八幡遺跡周辺は開発の手の及ばない森林地帯であったことがこれまでの調査成果から推測されている。これが国家的事業に携わる人々の移動・定住に起因する居住地の拡大によって広範囲に開発され、麦野遺跡・雑餉隈遺跡・南八幡遺跡等の住居群が形成され始めたものと考えられよう。

（三）中世の遺構・遺物について

中世期の遺構としては、土壙墓・方形竪穴状遺構・溝三条などを検出した。今回検出された遺構からは、周辺の該期の景観を復元するには至らなかったが、この時期の遺物としては貿易陶磁器が高い割合で出土することから、一般人の集落とは考えにくく、ある程度の有力者層の存在が推定される。調査地点付近には嘉暦三年（1323年）の造立年を刻む板碑が所在し、この時期に板碑を造立し得る階層が存在していたことを物語っている。また、先に挙げた井相田C遺跡第2次調査では、中世後半に位置づけられる柿経等の墨書木礼類・人骨・土器などが池の埋め土の中から出土している。これらの供養具は付近に存在したと考えられる寺や墓堂の整理の際、池に投げ入れられたものと推定されている。これらの供養具が奉納されていた寺社や高畑廃寺などの位置は推定、または全く解明されていない部分であり、今後の調査によって明らかにされることを期待したい。

〈参考文献〉

福岡市教育委員会　1987　「井相田C遺跡Ⅰ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第152集
1988　「井相田C遺跡Ⅱ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第179集
1998　「雑餉隈遺跡4」　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第569集
1999　「南八幡遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第602集

Ph-104　SC-092上屋構造復元（北から）

麦　野　C　遺　跡

－麦野C遺跡第５次調査概要－

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第６４３集

２０００年３月３１日 発行

発行　　福岡市教育委員会

印刷　　㈱ 博 多 印 刷